

图69 第13号住居址出土土器拓影① (1:3)

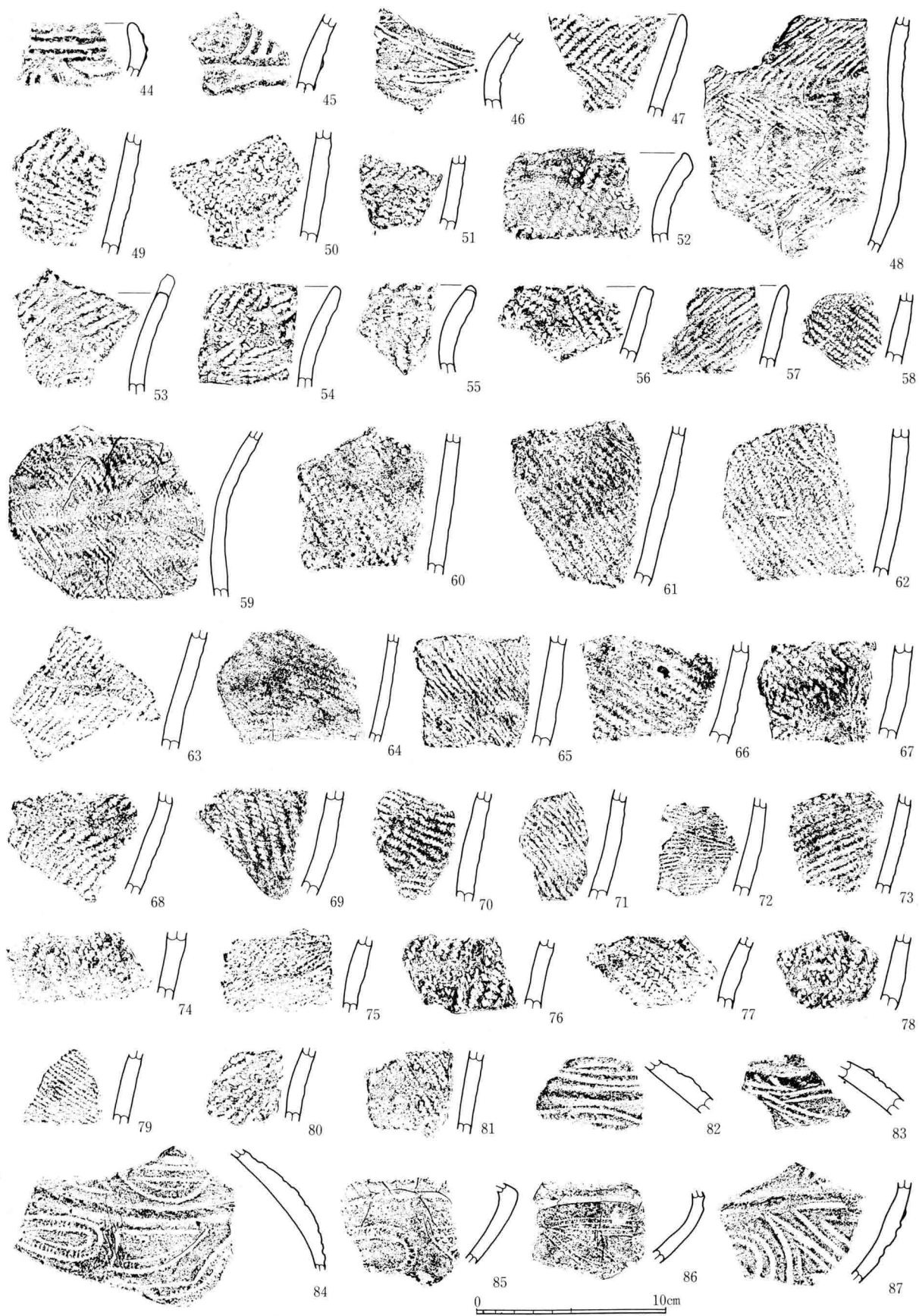


图70 第13号住居址出土土器拓影② (1:3)

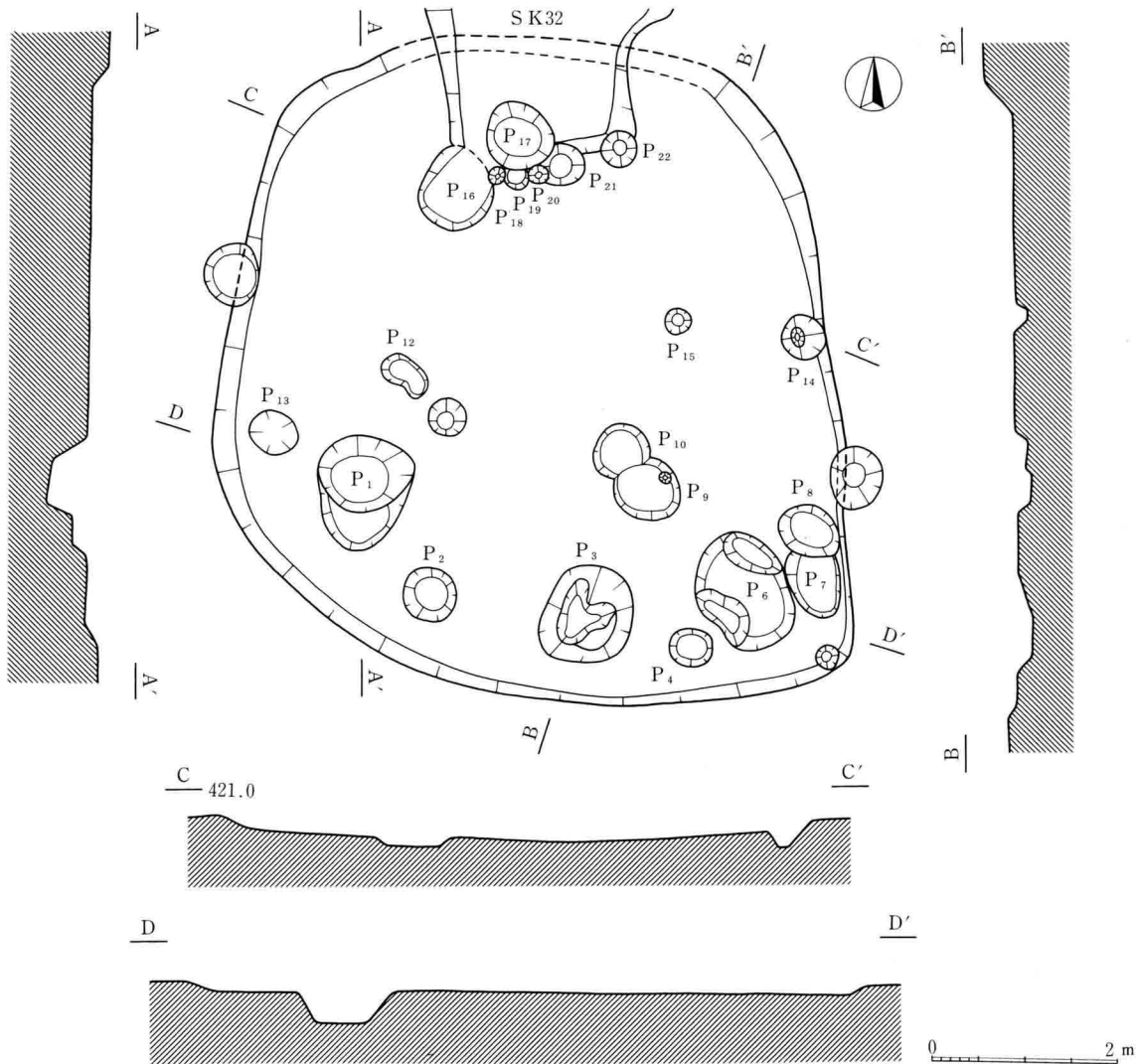


図71 第14号住居址実測図（1：80）

第14号住居址（図71～75）

調査区南側にて検出された住居址で、北側を第32号土壌に切られている。確認面からの掘り込みは平均10cm前後と浅く、一部掘り込みの不明瞭な部分も存在し、平面プランは明確なものではないが、7.00×6.60mほどの非常に不整な隅丸方形を呈する。壁の立ち上がりは全体に緩やかで、掘り込みの浅さから不明瞭な部分が多い。床面は全体に軟弱で不明瞭のものであった。

柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>22</sub>まで検出しているが、P<sub>18</sub>～P<sub>22</sub>は第32号土壌に伴うものである可能性が高い。南側に柱穴が集中する傾向があるが、明確な支柱穴配置は不明である。炉等その他の施設も確認されておらず、住居址とする積極的な根拠はない。

出土土器の様相より縄文時代前期後半諸磯b式期の所産と考えられる。

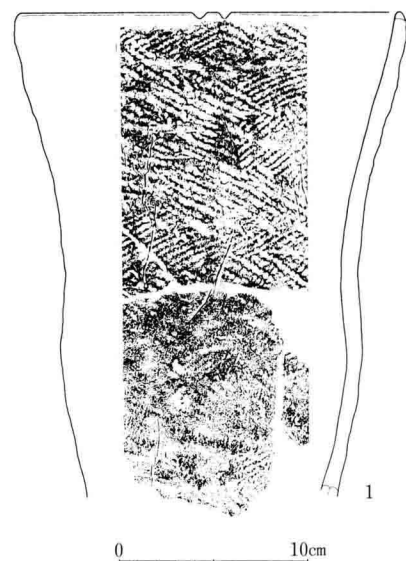


図72 第14号住居址出土土器実測図（1：4）



第14号住居址

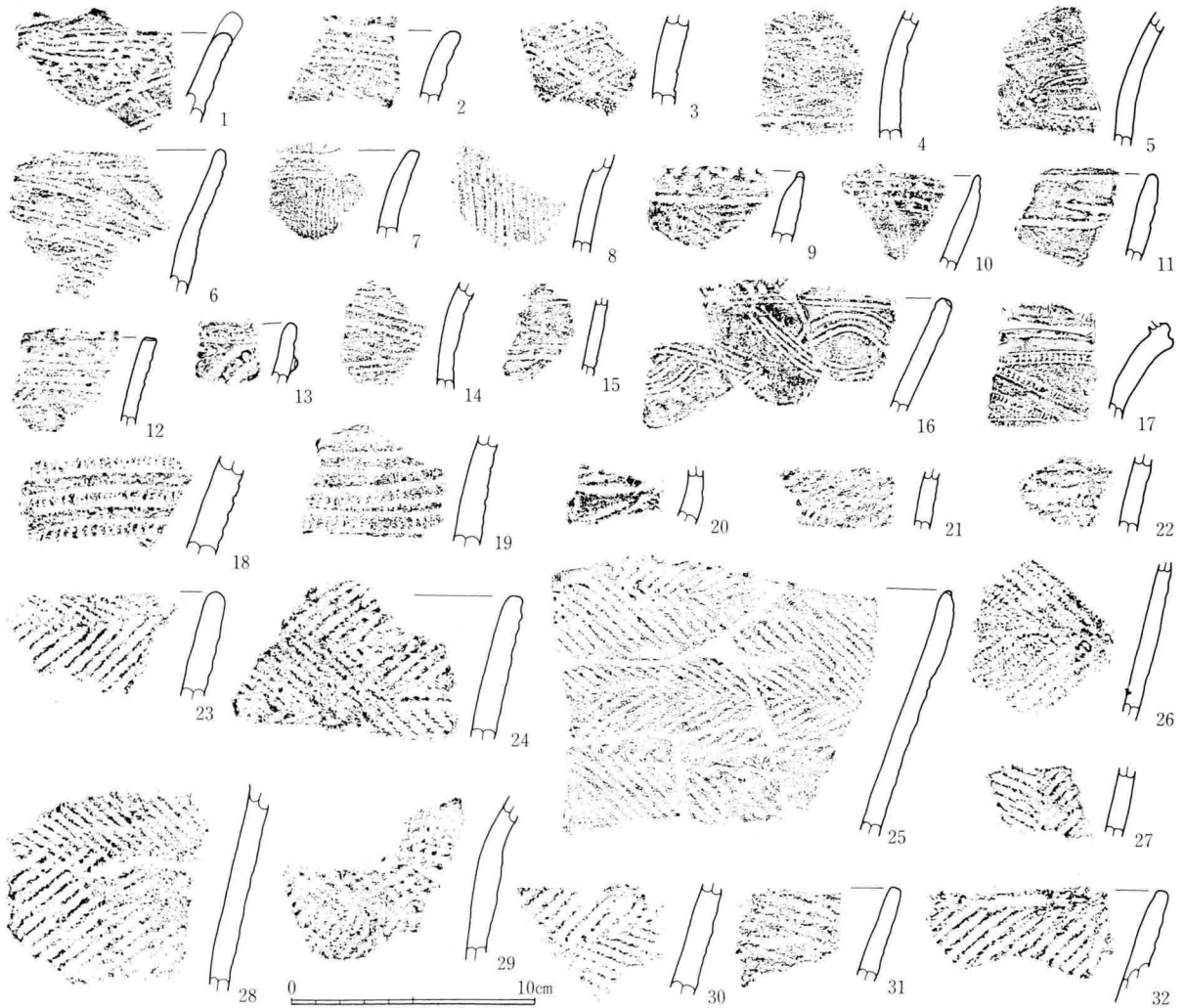


图73 第14号住居址出土土器拓影① (1:3)



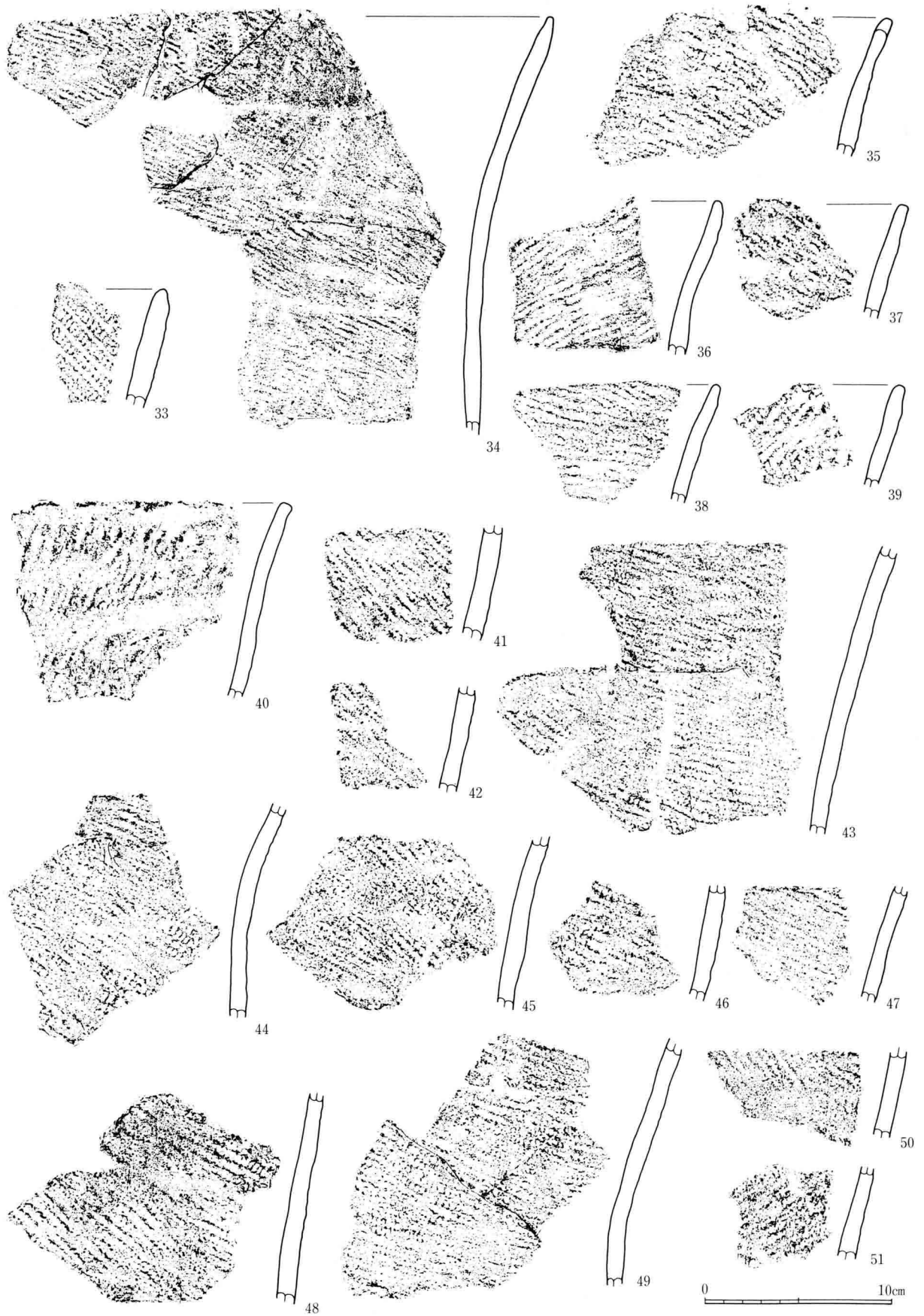


图74 第14号住居址出土土器拓影② (1:3)

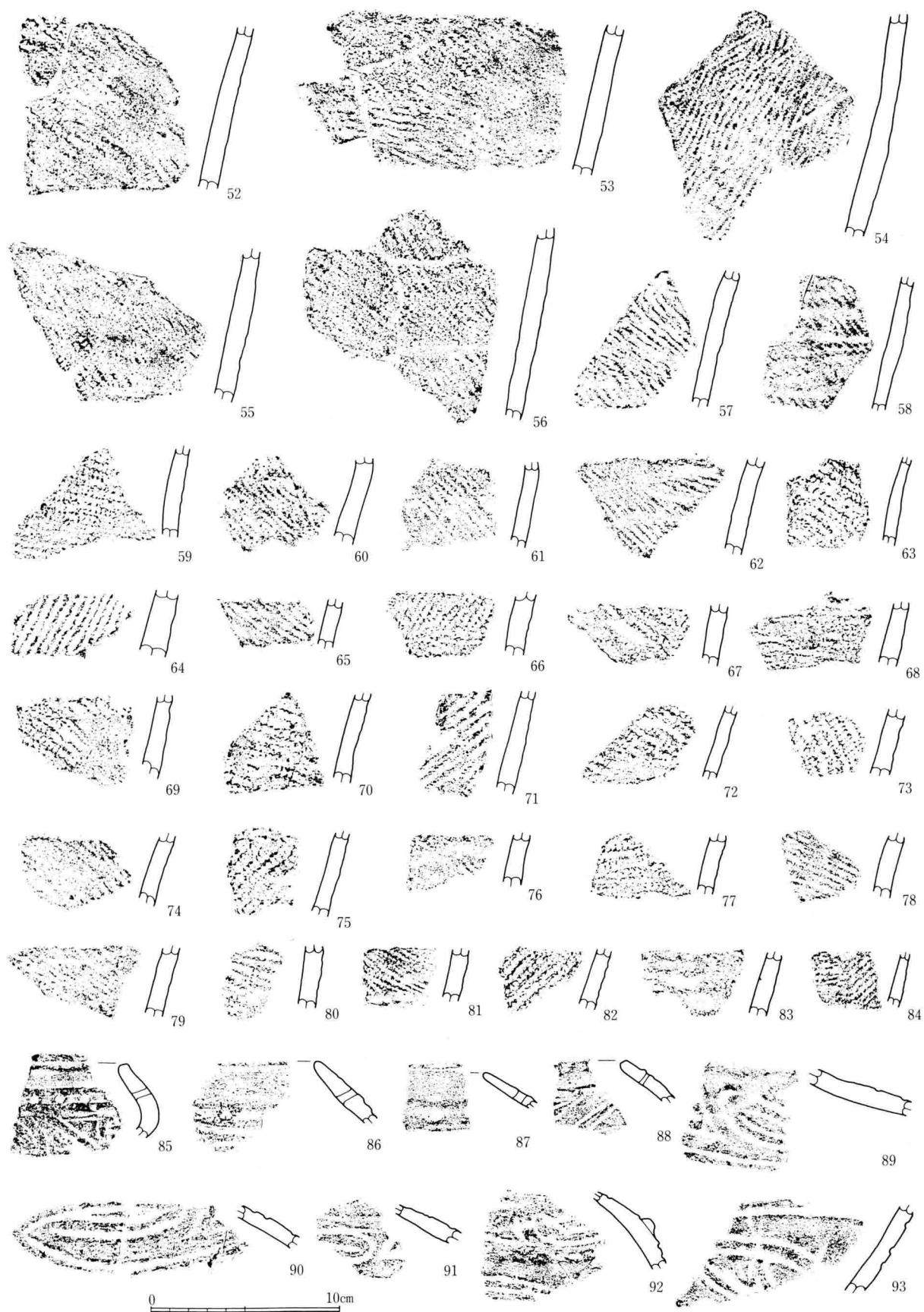


图75 第14号住居址出土土器拓影③ (1:3)

第15号住居址 (図76・77)

調査区北側にて検出された住居址で、他遺構との切り合い関係はない。

平面プランは5.40×4.50mほどの非常に不整な隅丸方形を呈する。確認面からの掘り込みは平均30cm前後を測り、比較的深い。

床面は全体に軟弱であるが、特に東側は下層の礫層を掘り込んでおり不明瞭なものであった。

柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>14</sub>まで検出されているが、支柱穴配置等は不明である。

炉等その他の施設も確認されておらず、本遺構を住居址とする積極的根拠は存在しない。

覆土上層より縄文時代中期の土器破片が比較的集中して出土しており、上層に中期の遺構が存在した可能性がある。

遺物は土器のほかに打製石鏃2点・石匙2点・石皿4点・砥石1点等が出土している。

出土土器の様相より、縄文時代前期後半諸磯b式期の所産と考えられる。

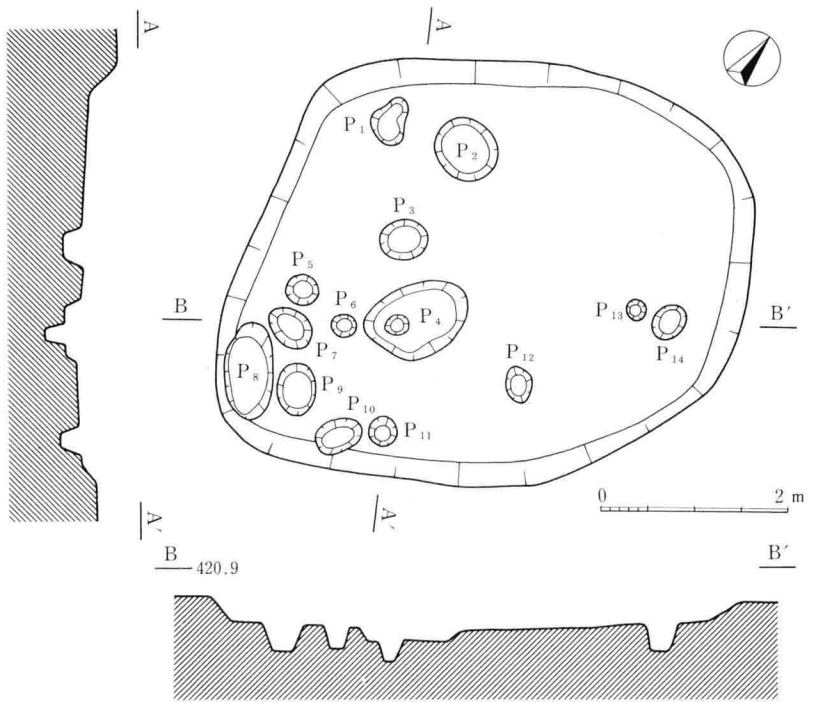


図76 第15号住居址実測図 (1:80)



第15号住居址

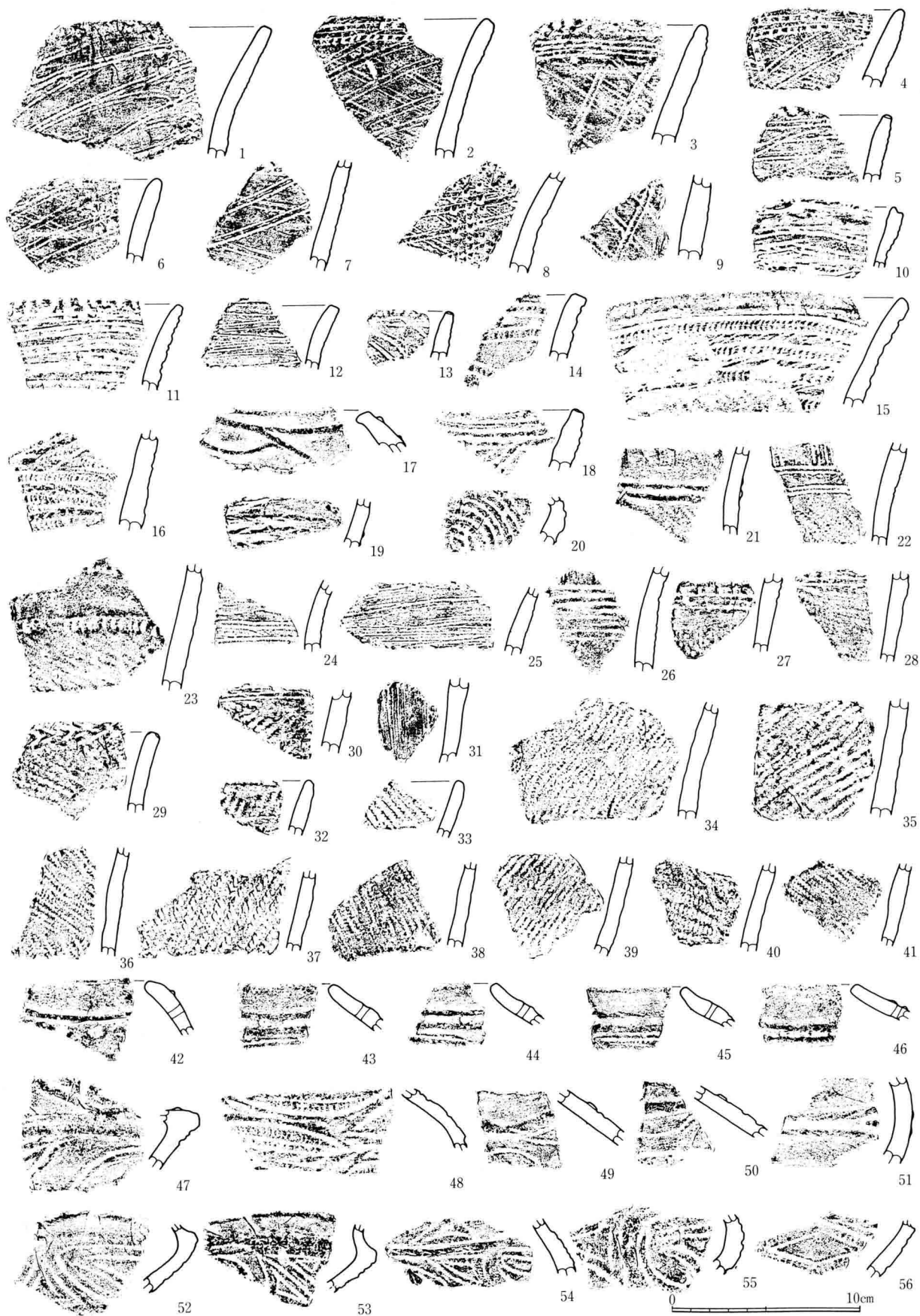


图77 第15号住居址出土土器拓影 (1:3)



第17号住居址 (図78・79)

調査区北側にて検出された住居址で、他遺構との切り合い関係はない。平面プランは7.00×6.80mほどの円形住居址である。確認面からの掘り込みは平均40cmと比較的深い。壁は比較的緩やかに立ち上がるが、特に東側が顕著である。

床面は全体に軟弱であるが、比較的明瞭なものであった。柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>17</sub>まで検出されている。明確な主柱穴配置は不明であるが、基本的に円形の配置が予想される。P<sub>19</sub>～P<sub>21</sub>の土壌状の落ち込みが検出されているが性格は不明である。炉等その他の施設は確認されていない。

遺物は土器のほか打製石鏃5点・石匙2点・磨製石斧2点等が出土している。

出土土器の様相より、本住居址は縄文時代前期後半諸磯b式期の所産と考えられる。

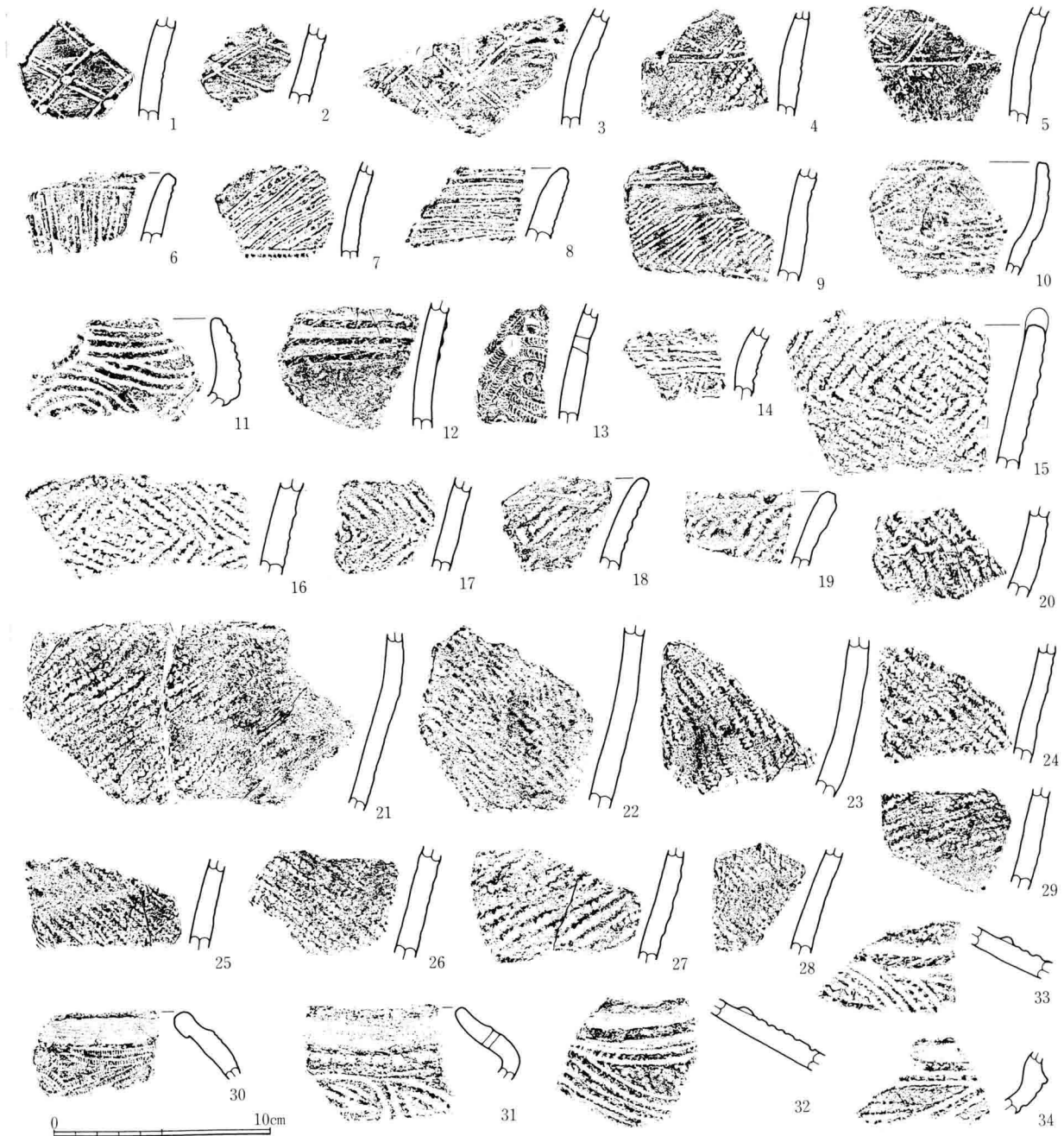


図78 第17号住居址出土土器拓影 (1:3)

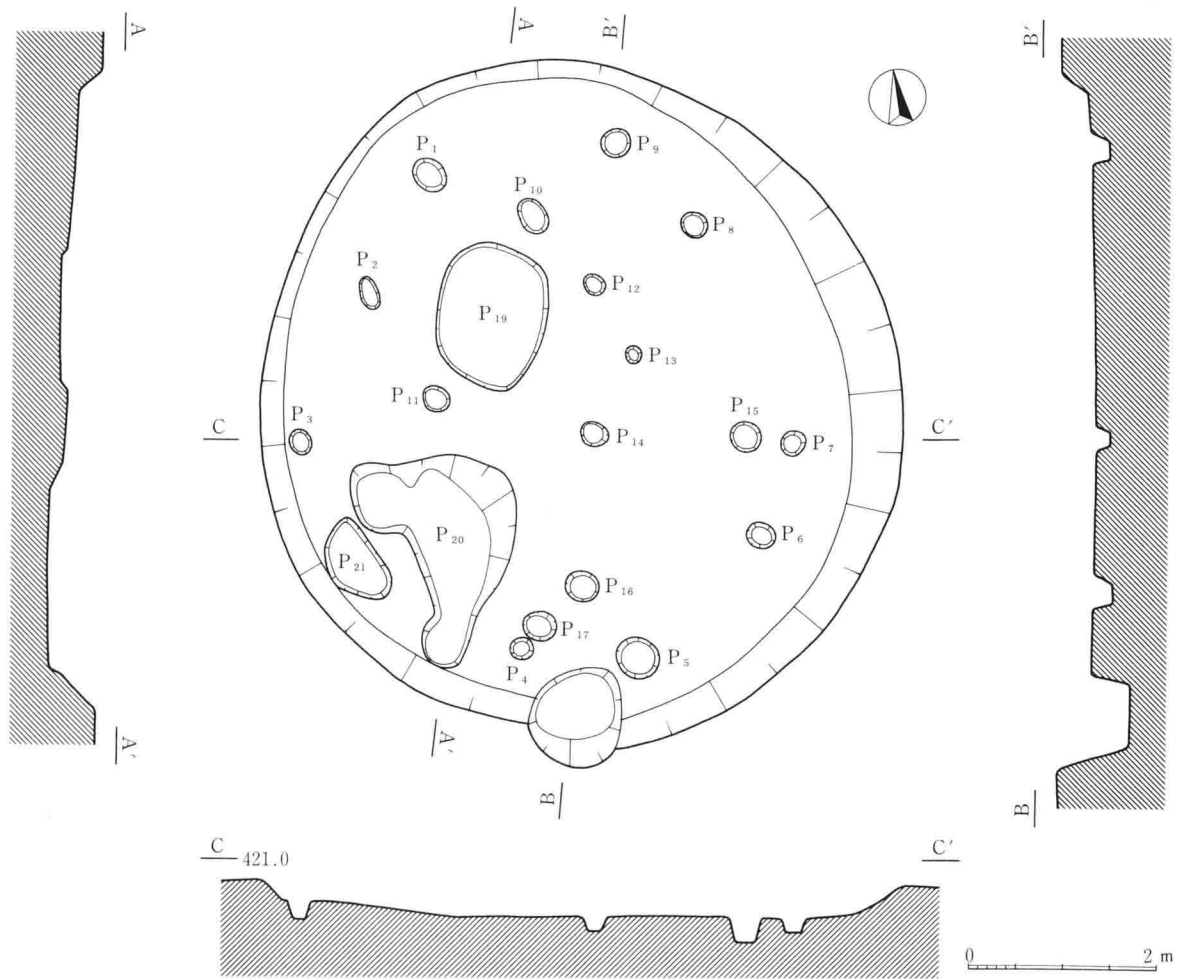


图79 第17号住居址实测图 (1 : 80)



第17号住居址

### 第19号住居址（図80～82）

調査区北側にて検出された住居址で、他遺構との切り合い関係はない。

平面プランは5.00×4.80mのやや不整な円形もしくは隅丸方形を呈する。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と比較的深い。壁の立ち上がりは全体に非常に緩やかである。

床面は全体に軟弱なものであったが、特に北側は下層の礫層を掘り込んでおり、不明瞭なものであった。

柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5個を検出しているが、支柱穴配置は不明である。

南壁下に検出されてP<sub>6</sub>は80×60cm・深さ30cmを測るが、いわゆる工作ピットと考えられ、内部より多量の黒曜石小剥片が出土している。同規模のP<sub>7</sub>からは剥片等が出土しているわけではないが、あるいはこれに関連するピットである可能性もある。炉等その他の施設は確認されていない。

遺物は土器のほかに打製石鏃3点・石皿3点・磨製石斧1点等が出土している。

出土土器の様相より、本住居址は縄文時代前期後半諸磯b式期の所産と考えられる。

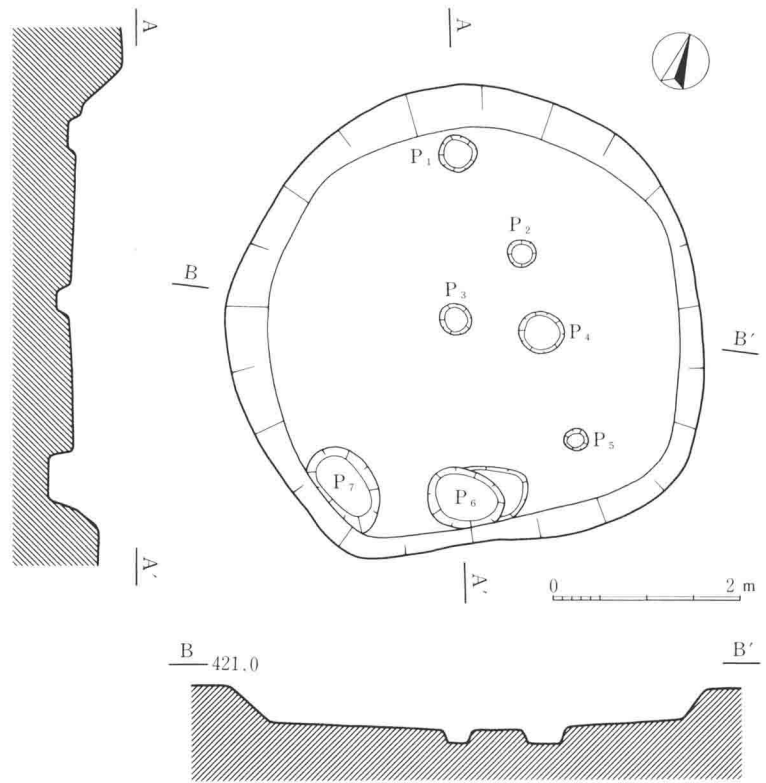


図80 第19号住居址実測図（1：80）



第19号住居址

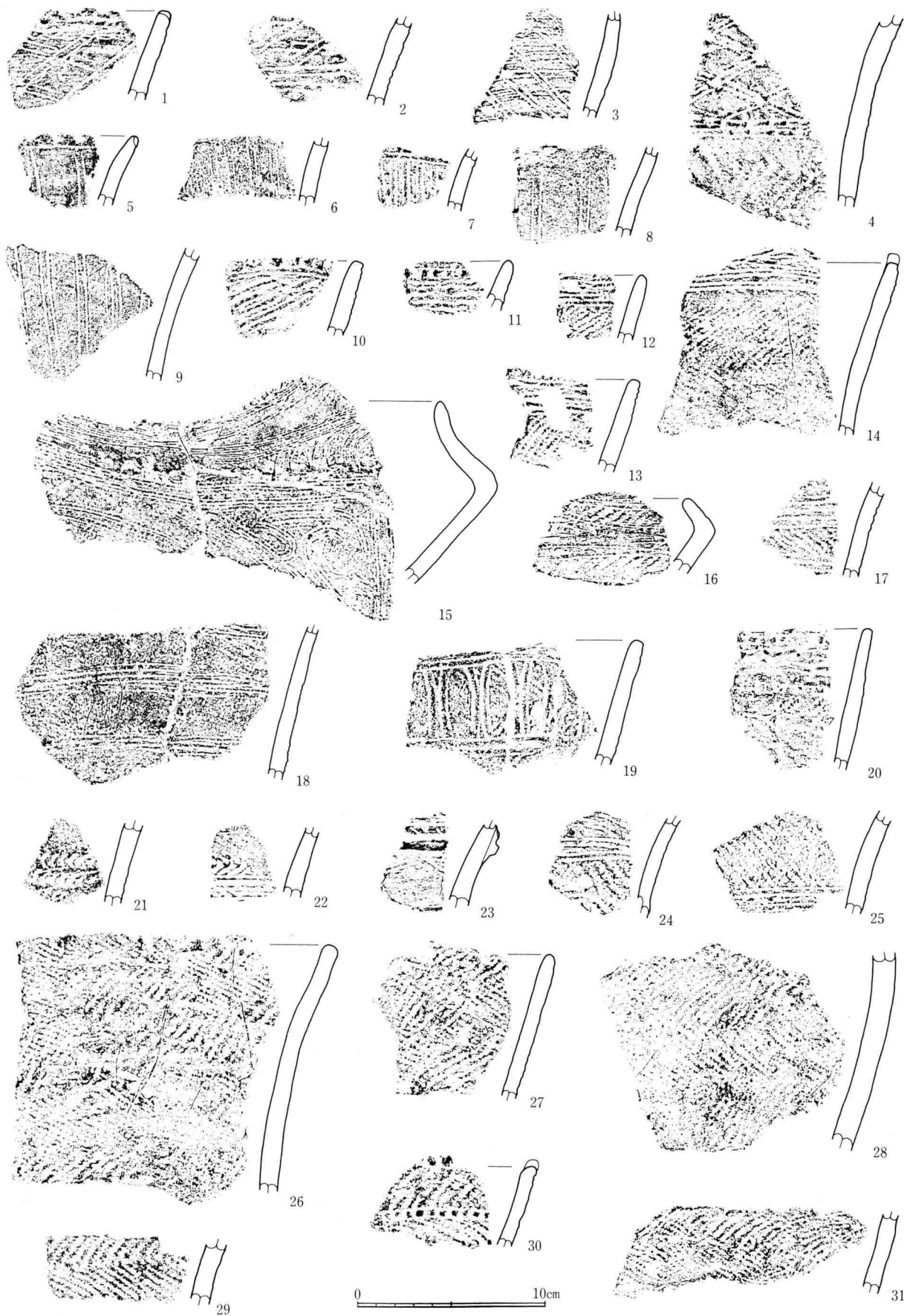


图81 第19号住居址出土土器拓影① (1:3)



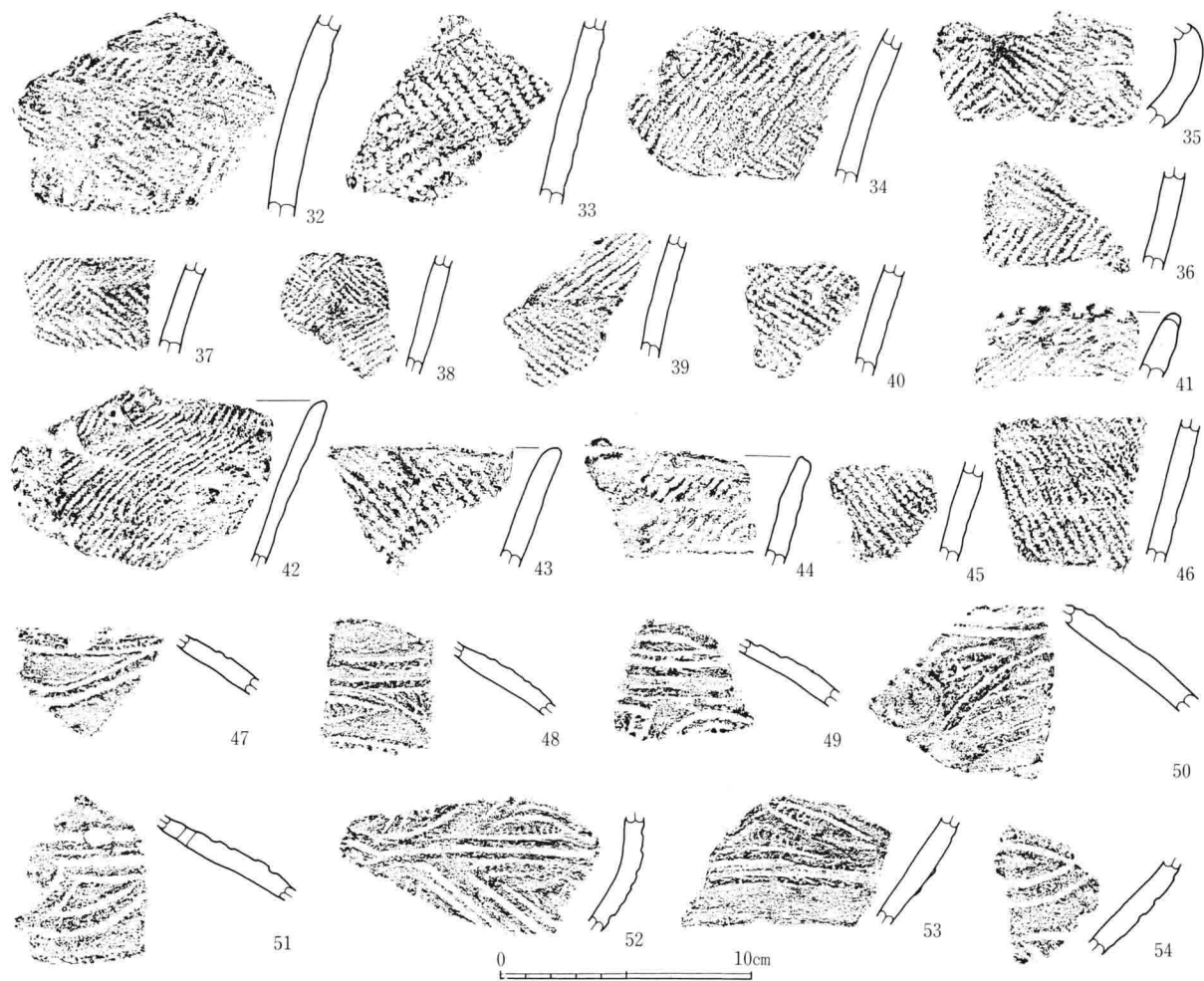


图82 第19号住居址出土土器拓影② (1 : 3)



第20号住居址

第20号住居址 (図83~86)

調査区北側にて検出された住居址で、他遺構との切り合い関係はない。

平面プランは4.80×4.40mほどのやや不整な隅丸方形を呈する。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と比較的深いが、壁の立ち上がりは全体に非常に緩やかである。

床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>15</sub>まで検出しているが、支柱穴配置は不明である。南西壁際に溝状の落ち込みが確認されているが、性格不明である。炉等その他の施設は確認されていない。

遺物は土器のほか、玦状耳飾破片1点・打製石鏃4点・石匙6点・石錐1点・石皿3点・磨製石斧1点等が出土している。

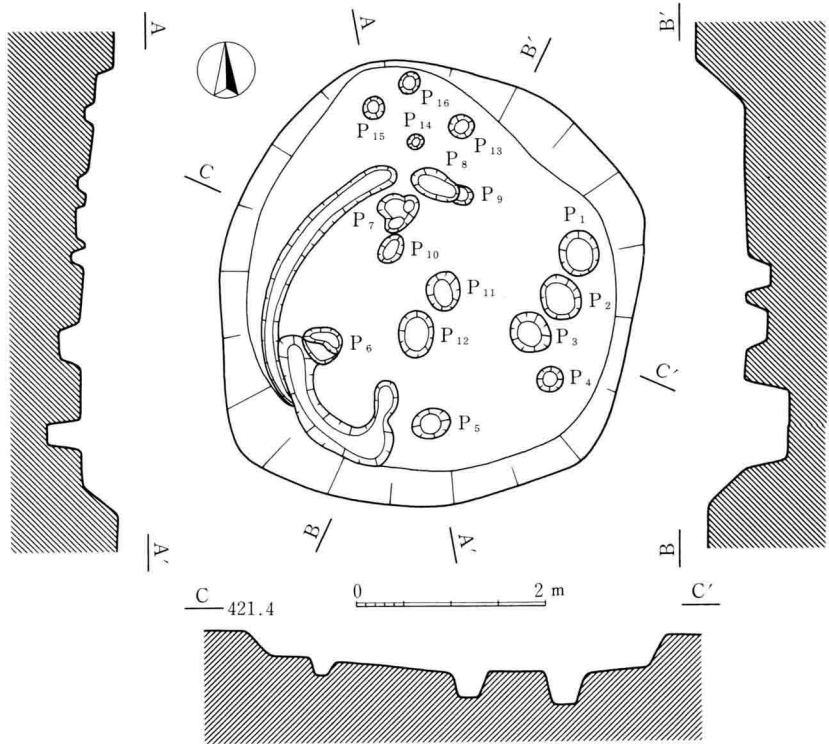


図83 第20号住居址実測図 (1 : 80)

出土土器の様相より、本住居址は縄文時代前期後半諸磯b式期の所産と考えられる。

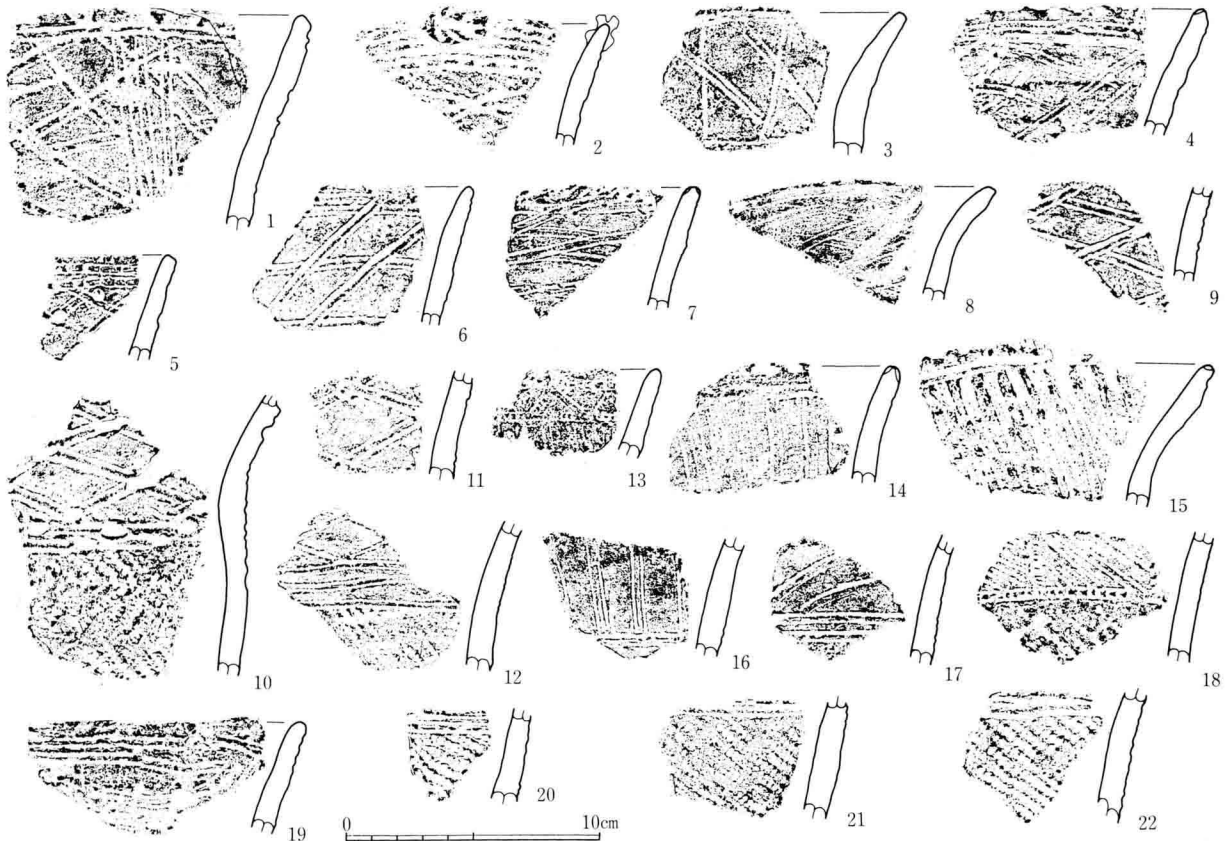


図84 第20号住居址出土土器拓影① (1 : 3)



图85 第20号住居址出土土器拓影② (1:3)

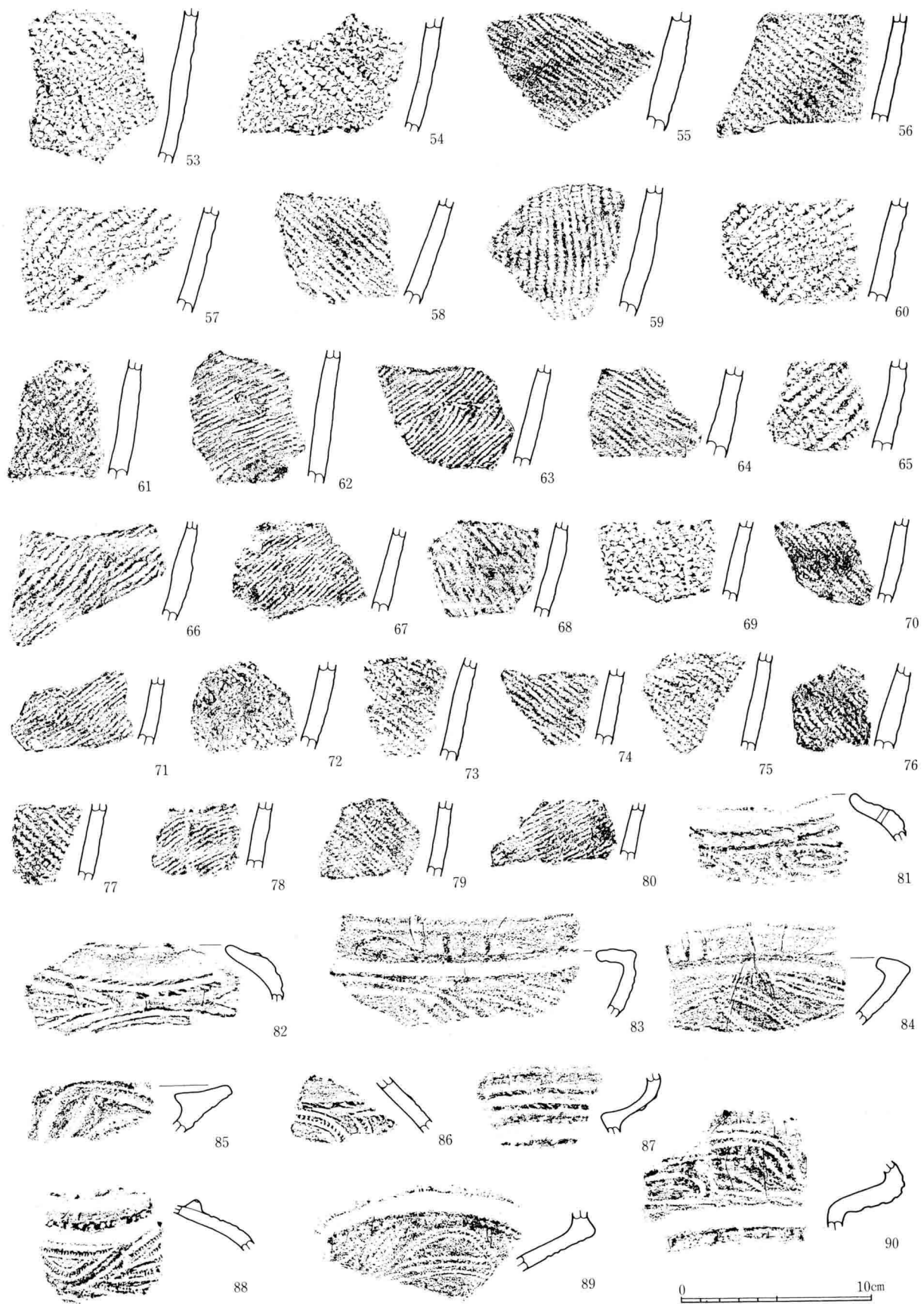


图86 第20号住居址出土土器拓影③ (1:3)



今回の調査において土壌は多数検出されているが、ここでは出土遺物があったもののみを取り上げ、その概略を述べていきたい。

### 1号土壌 (図87)

調査区北側から検出されており、径約3.20mを測る不整形円形の土壌である。確認面からの掘り込みは平均40cmを測り、内部には小ピットを有する。出土土器は諸磯b式併行期の様相を呈し、格子目文系(1~9・11)、爪形文系(15~17・19・22~28)、浅鉢形土器(35・36)などが出土している。爪形文系に関しては、15のように竹管による爪形文を横位に数段にわたり施文し、その間を埋めるように横長D字の連続刺突文を施文するものが認められる。さらには24~28のような施文具が大型化し、施文間隔が広いものも存在している。これらは文様構成に差異が認められるものの、両者ともに諸磯b式併行期の資料であると考えられる。

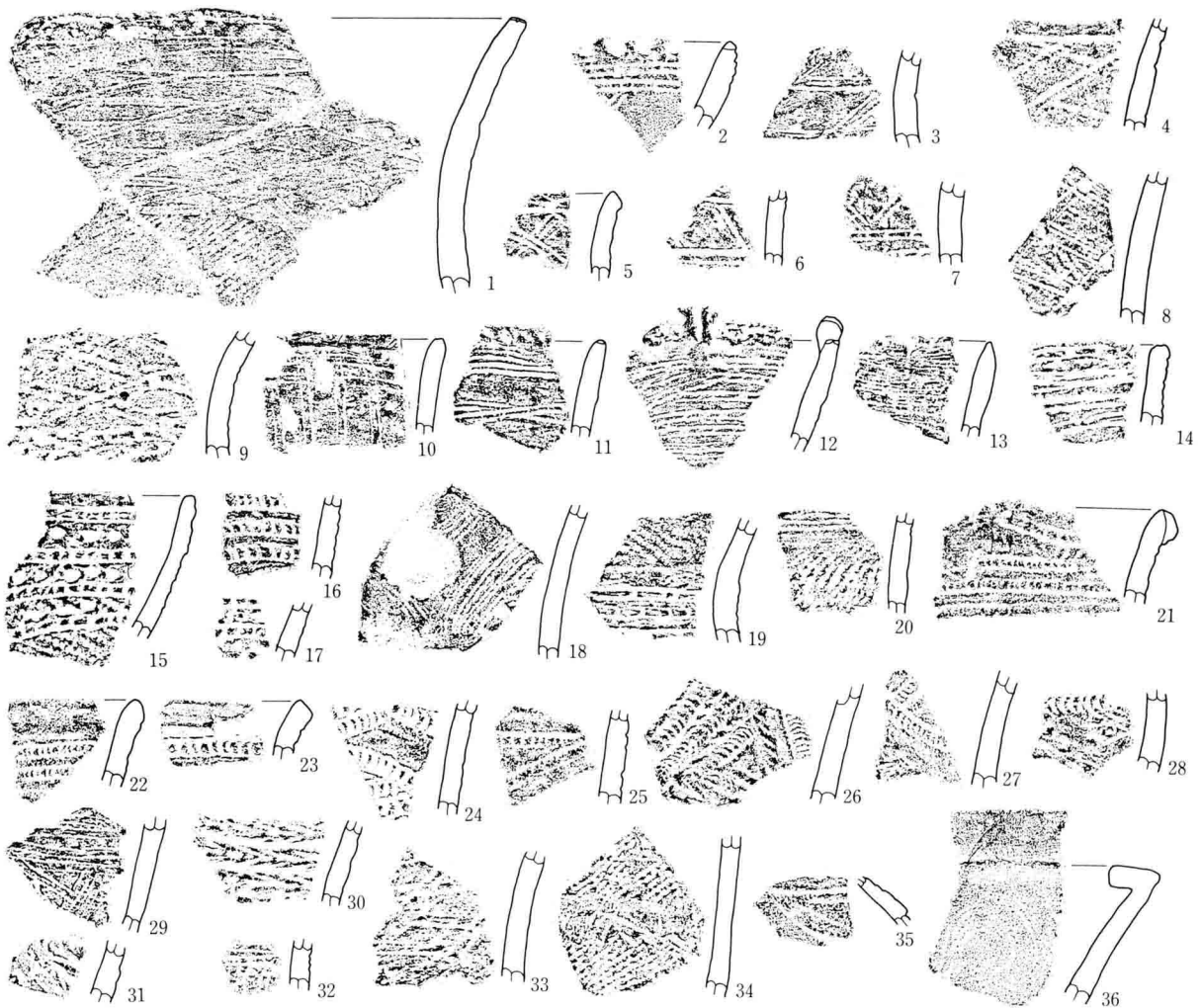
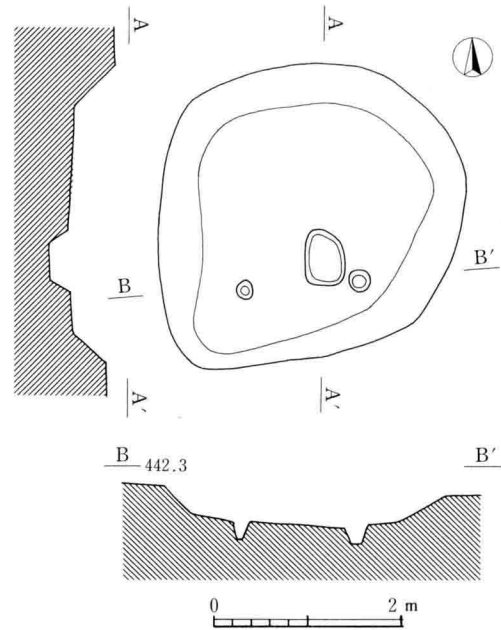


図87 第1号土壌実測図(1:40)ならびに出土土器拓影(1:3)

## 2号土壙 (図88)

調査区北側から検出されており、約半分が調査区外のため判然とはしないが、おそらく一辺約0.80mを測る長方形の土壙であると考えられる。確認面からの掘り込みは25cm前後を測り、内部には小ピットを有する。出土土器をみると、平行沈線文系 (図88-1)、篋描沈線文を施した浅鉢形土器 (5) などが出土している。その他の土器の内容は判然としないが、前期後半諸磯b式併行期の所産であると考えられる。

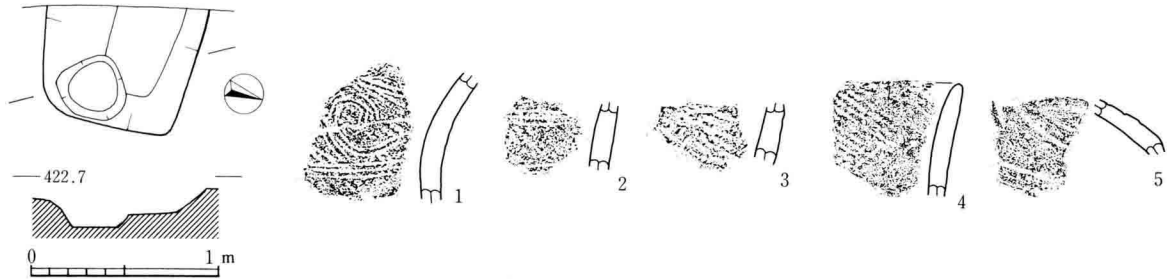


図88 第2号土壙実測図 (1:40) ならびに出土土器拓影 (1:3)

## 4号土壙 (図89)

調査区北側より検出されており、1.40×1.00mを測る長楕円形の土壙である。確認面からの掘り込みは浅く、約10cmを測るのみである。出土土器に関しては、圧痕隆帯文系 (図89-1)、および加曾利E式系 (2-6) の中期後葉の土器が主体的に出土している。ここに前期後半諸磯b式期の平行沈線文系 (7・8) と爪形文系 (10) が加わるという様相を呈す。9もおそらくは、口縁部文様帯に平行沈線文を施文した深鉢の胴部であると考えられる。

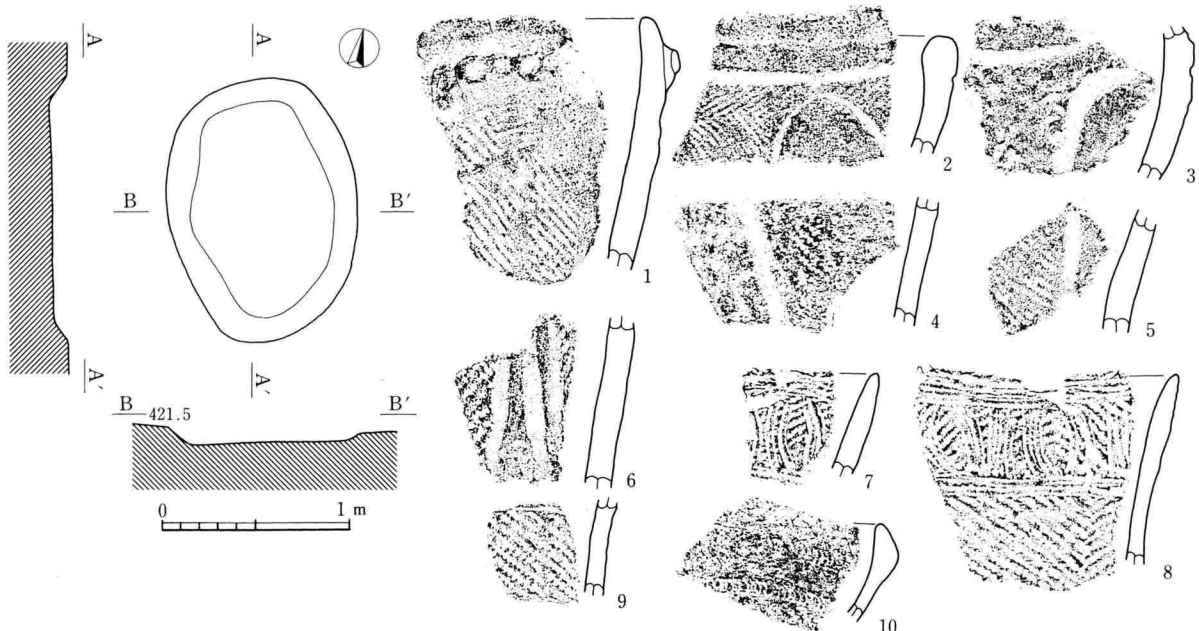


図89 第4号土壙実測図 (1:40) ならびに出土土器拓影 (1:3)

## 5号土壙 (図90)

調査区南側から検出されており、1.80×1.10mを測る隅丸方形の土壙である。確認面からの掘り込みは30cm前後を測る。土壙内からは、若干古手で大型のコンパス文を施す土器 (図90-3・7) が見られ、その他の縄文のみを施す土器 (8-17) も胎土に繊維を含有するものが多い。これらの特徴から、出土土器量から見れば前期中葉の土器が大部分を占めると言える。

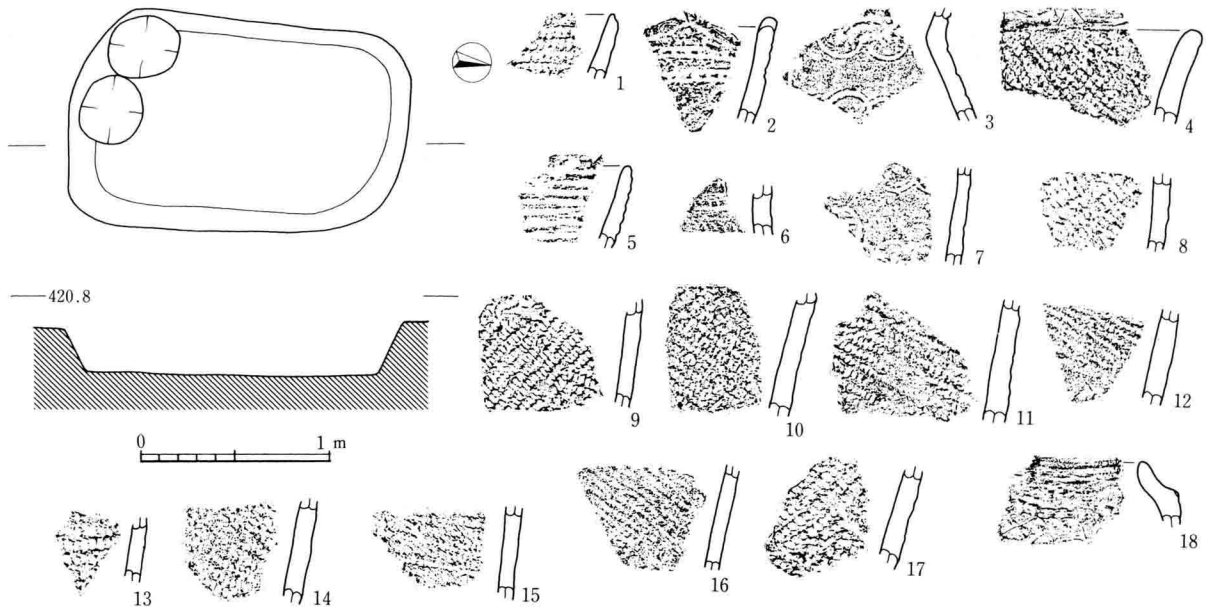


図90 第5号土壌実測図（1：40）ならびに出土土器拓影（1：3）

6号土壌（図91・92）

調査区南側より検出されており、2基の土壌が重なるような形状の不整形を呈する土壌である。確認面からの掘り込みは最深部で25cmを測る。出土土器をみると中期後葉の圧痕隆帯文系（図91-1・図92-9・10）、加曽利E式系（6～8・11～13）が多く出土している。また、縄文のみを施された土器（15～23）に関しても、原体の観察などから同時期の土器と考えられる。

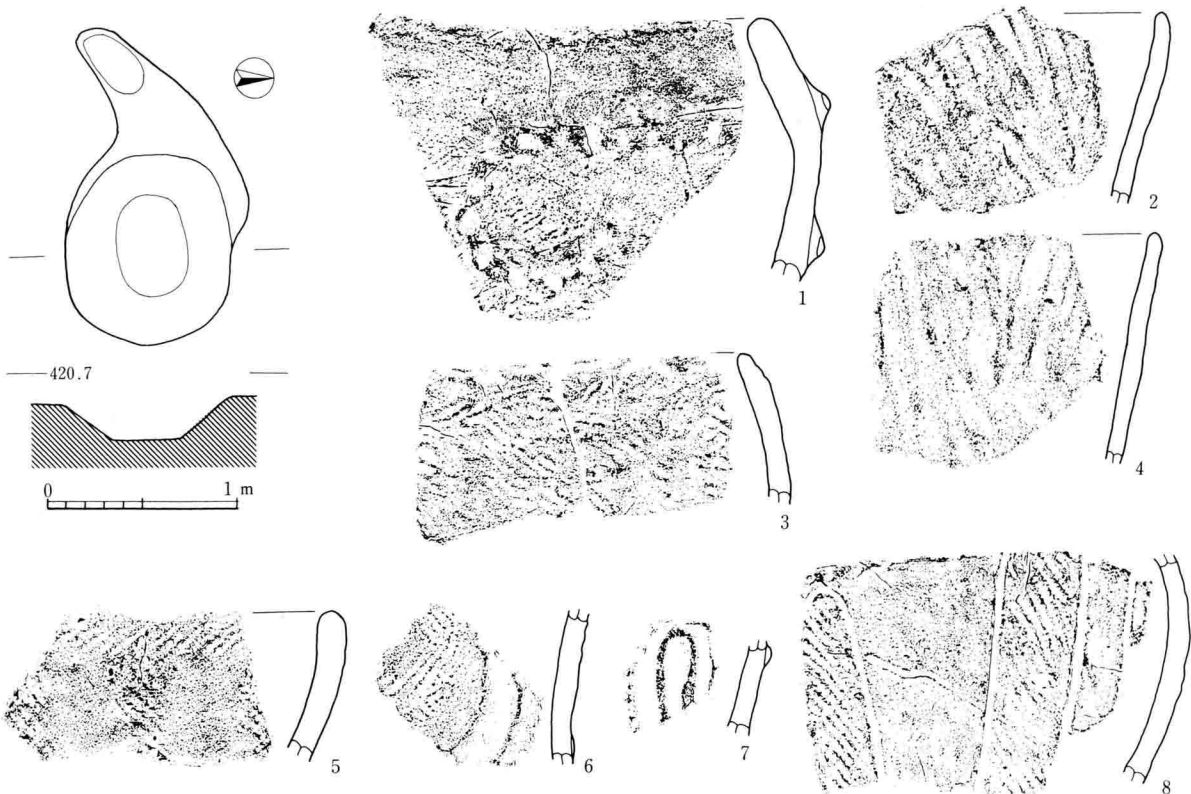


図91 第6号土壌実測図（1：40）ならびに出土土器拓影①（1：3）

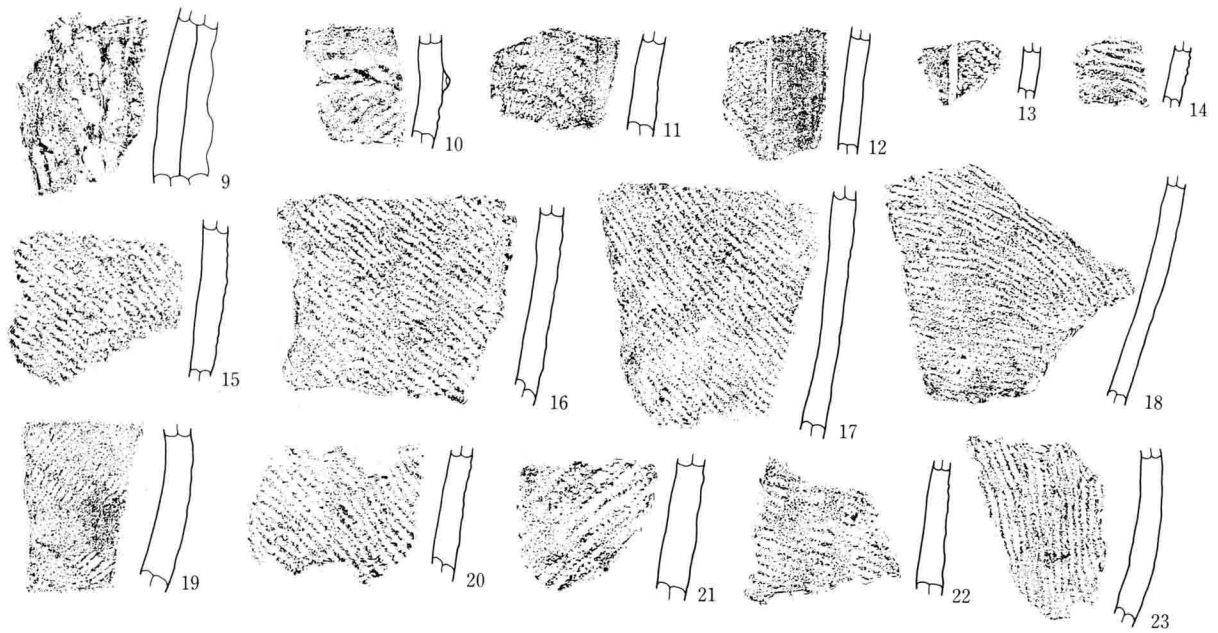


図92 第6号土壌出土土器拓影② (1:3)

7号土壌 (図93~95)

調査区南側から検出されており、3.00×2.60mを測る不整形の土壌である。確認面からの掘り込みは40cm前後を測る。土壌内からは多量の土器が出土しており、前期後半格子目文系 (図93-1・7)、垂直条線文 (2・8)、平行沈線文系 (5)、爪形文系 (3・10・11)、篋描沈線文系浅鉢 (16・17)、無文縁孔土器 (13) および縄文・羽状縄文のみの土器 (図94-18~41) などが出土している。また、中期後葉の土器も出土している。その内訳は、圧痕隆帯文系 (43・図95-49)、加曾利E式系 (42・44~48・51~64・66・67) などから構成される。59および60の土器は加曾利E式の中でも新しい様相を呈する。前期後半の遺構の上層に、中期後葉の遺構が存在していた可能性も考えられる。

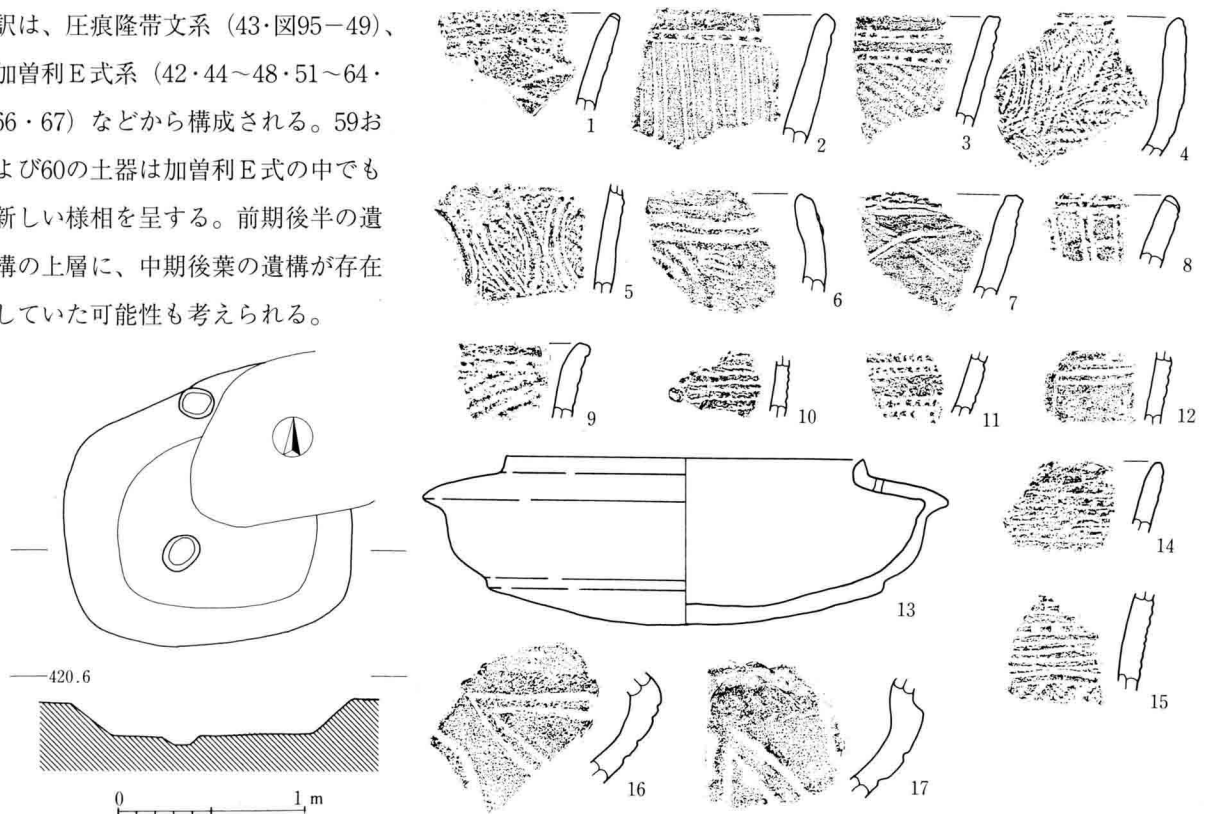


図93 第7号土壌実測図 (1:80)・出土土器実測図 (1:4) ならびに出土土器拓影① (1:3)



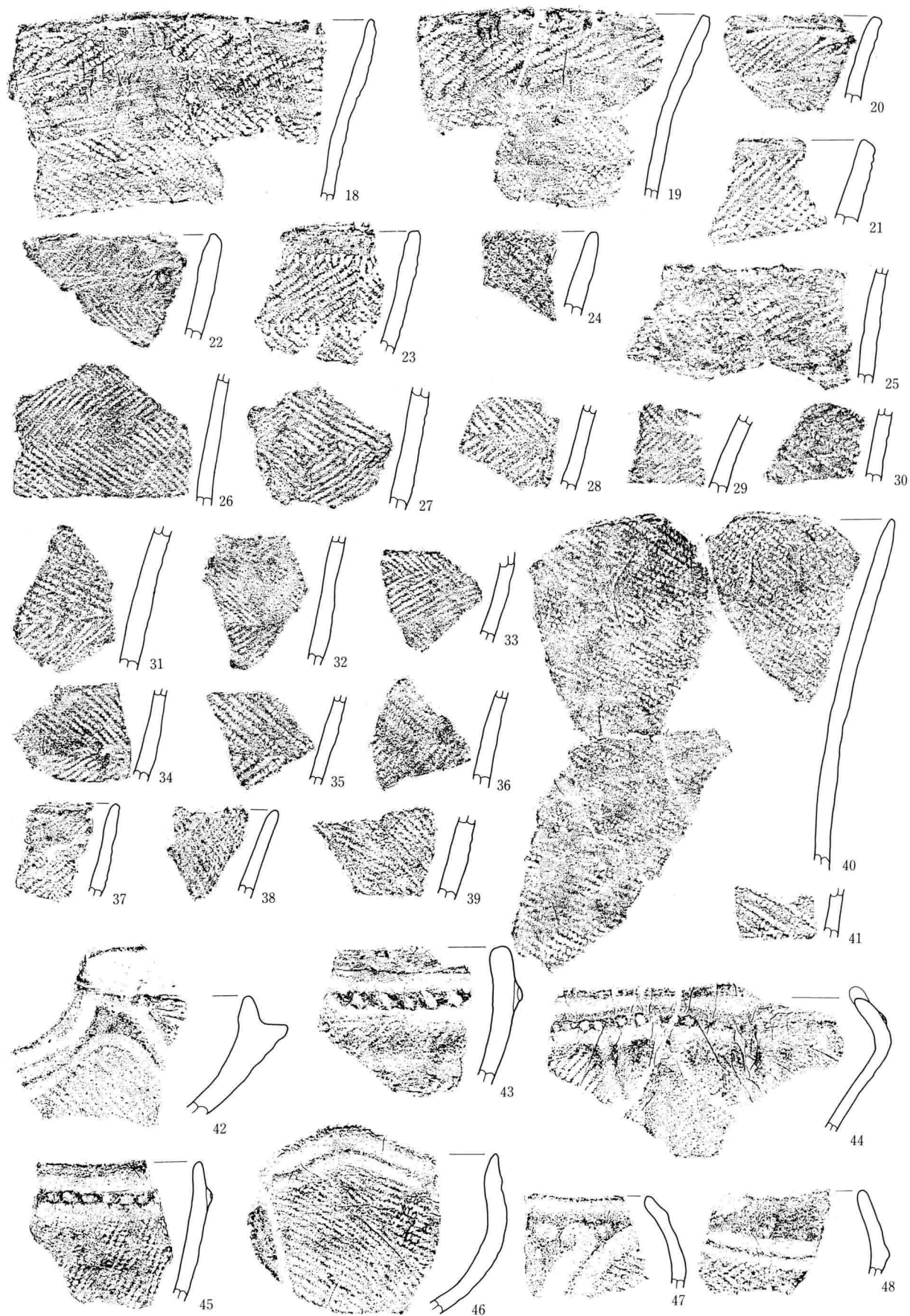


图94 第7号土壙出土土器拓影② (1:3)

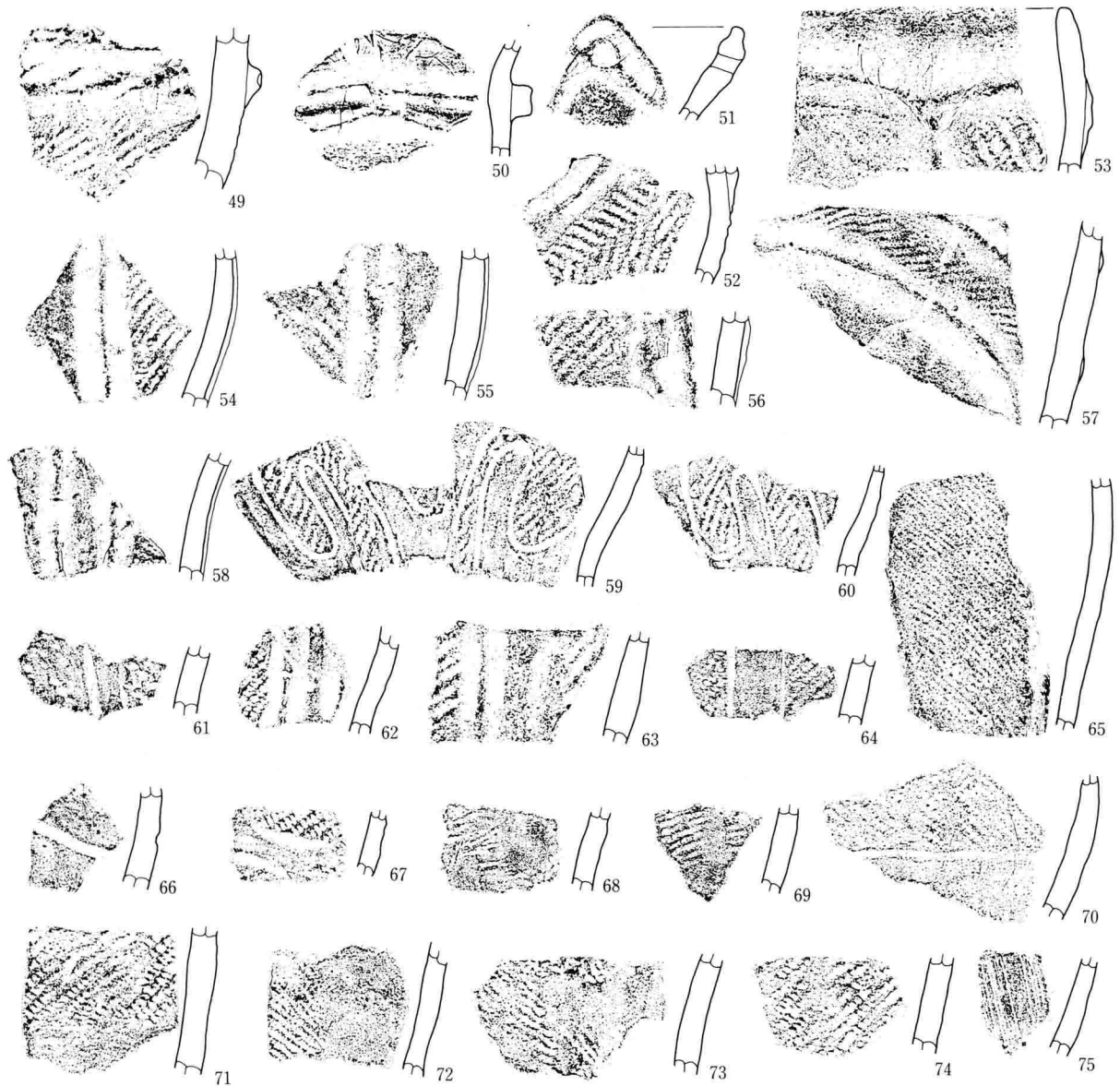


図95 第7号土壇出土土器拓影③ (1:3)

8号土壇 (図96)

調査区北側から検出されており、1.10×1.00mを測る不整形円の土壇である。確認面からの掘り込みは最深部で19cmを測り、内部には小ピットを有する。出土土器は1点のみである。1は微隆起線により縄文施文帯とナデ調整を施された無文帯に区画される中期後葉加曽利E式系の土器であると考えられる。出土土器は1点のみであり、遺構の性格およびその帰属時期などにおいて不明な点が多い。

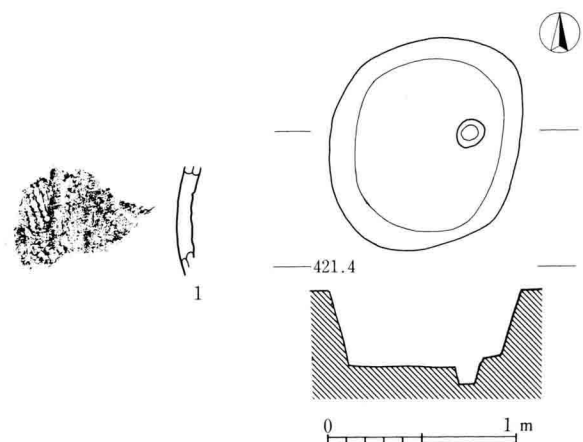


図96 第8号土壇実測図 (1:80) ならびに出土土器拓影 (1:3)

9号土壌 (図97)

調査区南側において検出されており、2.15×1.55mを測る不整円形の土壌である。確認面からの掘り込みは約20cmを測る。出土土器は諸磯a式期の肋骨文系土器 (図97-1) およびそれと同時期と考えられる縄文を施した土器 (2・4) が挙げられる。

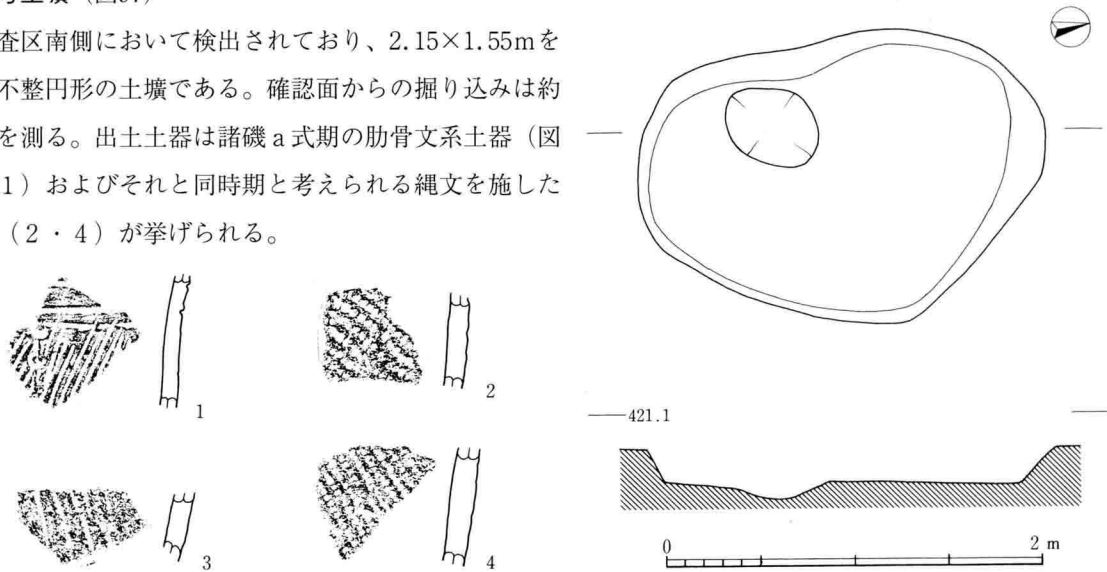


図97 第9号土壌実測図 (1:40) ならびに出土土器拓影

10号土壌 (図98・99)

調査区南側から検出されており、4.50×2.00mを測る不整長楕円形の土壌である。確認面からの掘り込みは最深部で48cmを測る。多数の土器が出土しているが、その主体となるのは中期後葉の土器である。圧痕隆帯文系 (図99-9・14)、唐草文系 (10)、加曾利E式系 (図98-4・図99-8・11~13・15・17~21・25・27)、大木系 (16・24) など多系統にわたる土器が出土している。9は圧痕隆帯文系の土器の底部である。2条の垂下する隆帯が確認できる。10は確認できた唯一の唐草文系の土器である。胴部片と考えられ、雨垂れ状の短沈線を施文している。4は今回の出土土器の中で唯一の注口土器である。胴部には垂下する条線を巡らし、胴部と頸部の境には隆帯が貼付されている。加曾利E式系の土器であると考えられる。また、2、39、42など前期の土器も出土しているが、中期後葉の土器が主体となる。

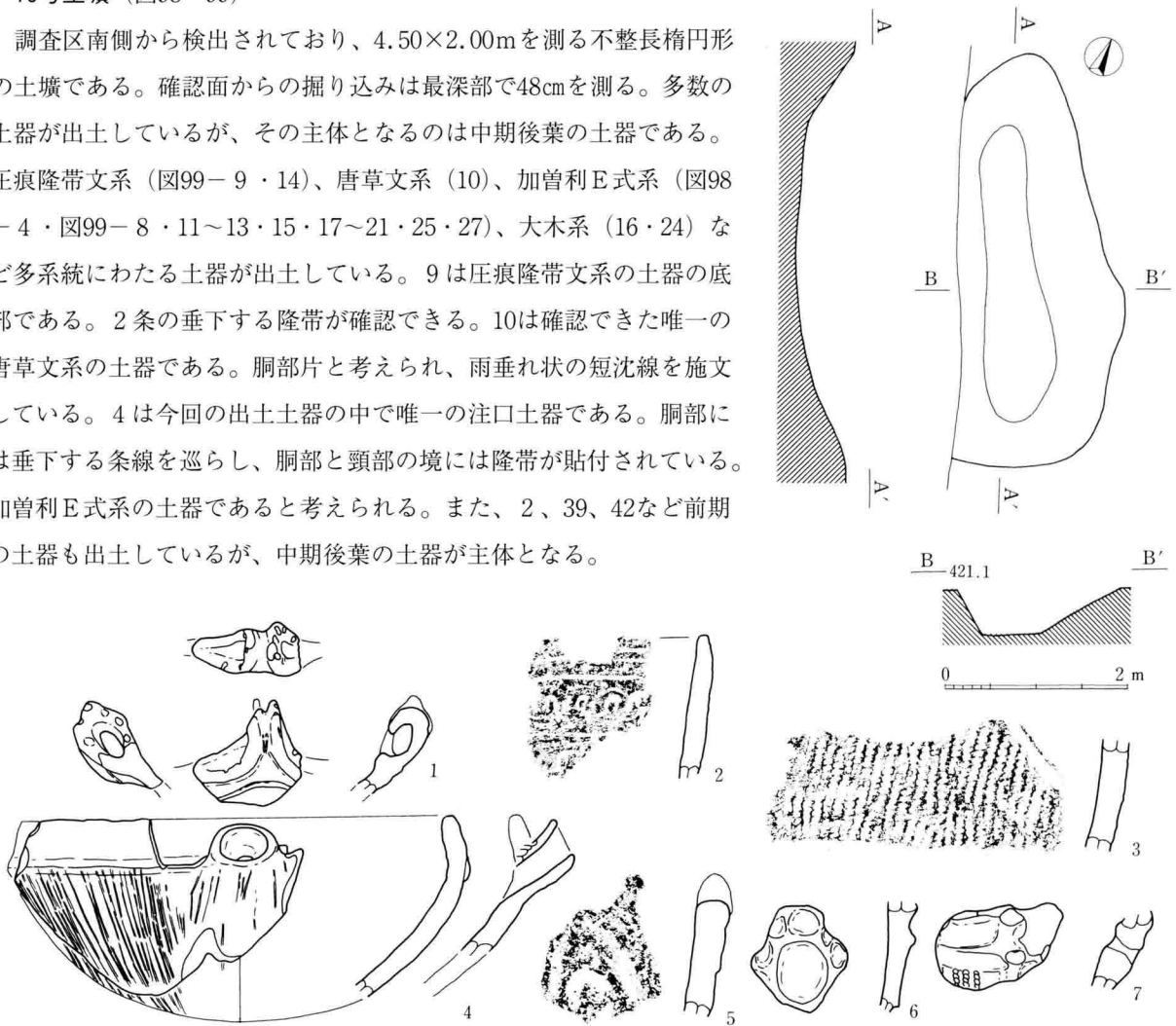


図98 第10号土壌実測図 (1:80)・出土土器実測図 (1:4) ならびに出土土器拓影① (1:3)

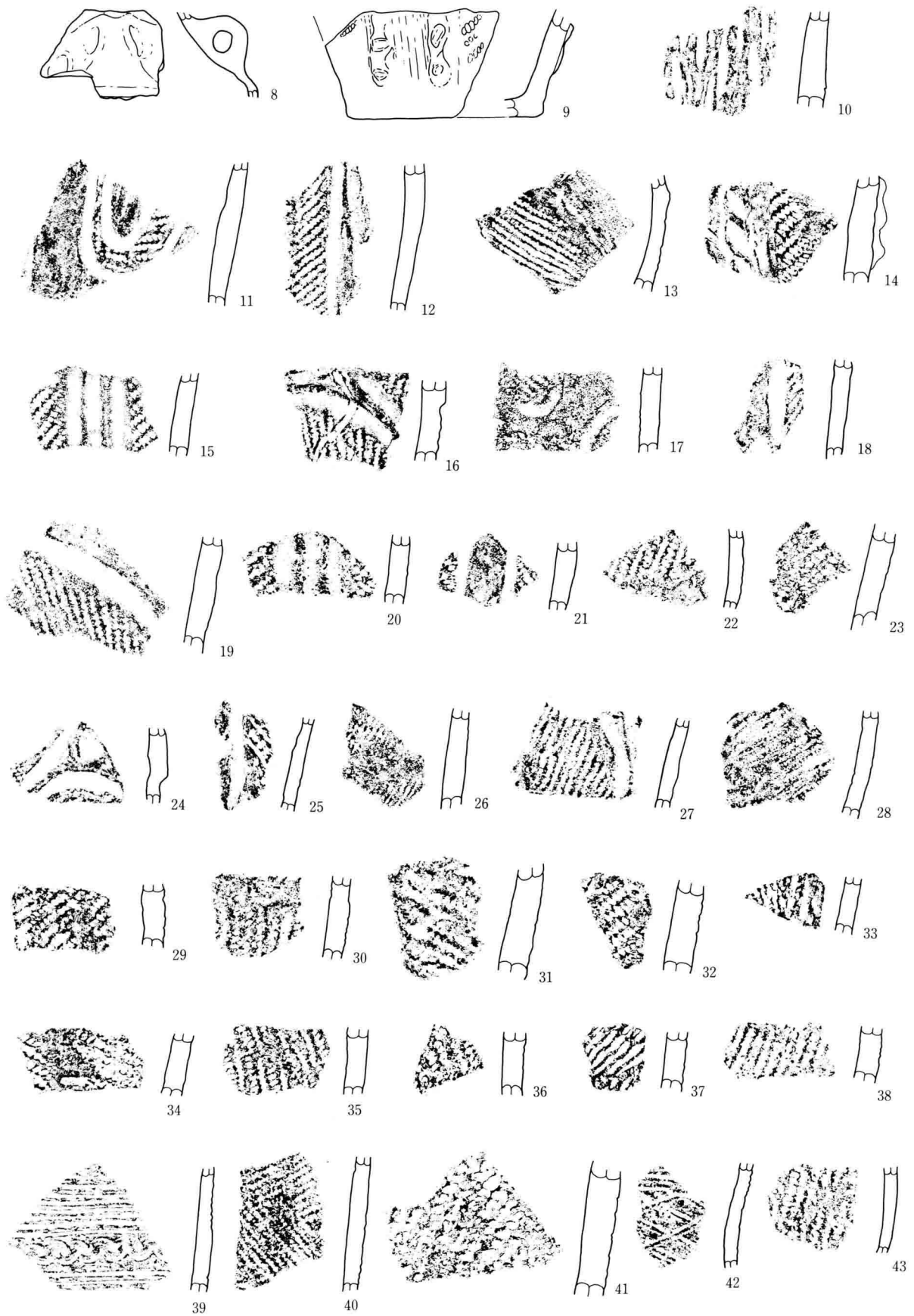


図99 第10号土壙出土土器実測図 (1 : 4) ならびに出土土器拓影② (1 : 3)



12号土壌 (図100)

調査区北側において検出されており、1.55×0.92mを測る長楕円形の土壌である。確認面からの掘り込みは20cm前後を測る。出土土器は爪形文系土器 (図100-4~7) を主体とし、格子目文土器 (1) が加わる。爪形文系の土器は全て幅広の爪形文で複雑な文様を描出する諸磯b式期の土器と考えられ、格子目文土器も同時期のものであろう。これらの土器の様相から当遺構は前期後半諸磯b式併行期の所産であると考えられる。

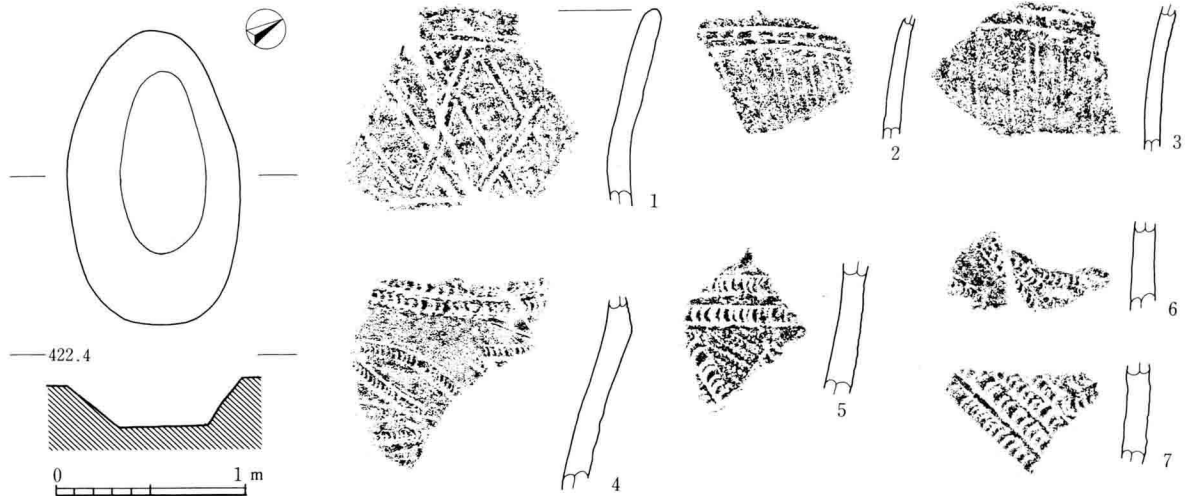


図100 第12号土壌実測図 (1:40) ならびに出土土器拓影 (1:3)

13号土壌 (図101)

調査区南側から検出されており、1.30×1.20mを測る円形の土壌である。確認面からの掘り込みは最深部で36cmを測る。前期中葉黒浜式期 (図101-3)、および前期後半諸磯b式併行期 (2) の土器の出土が認められる。土器の出土量自体が少なく、遺構同士の切り合いもないことから明確な所属時期を特定することは困難であるが、前期中葉から後葉にかけてのいずれかの時期の所産であると考えられる。

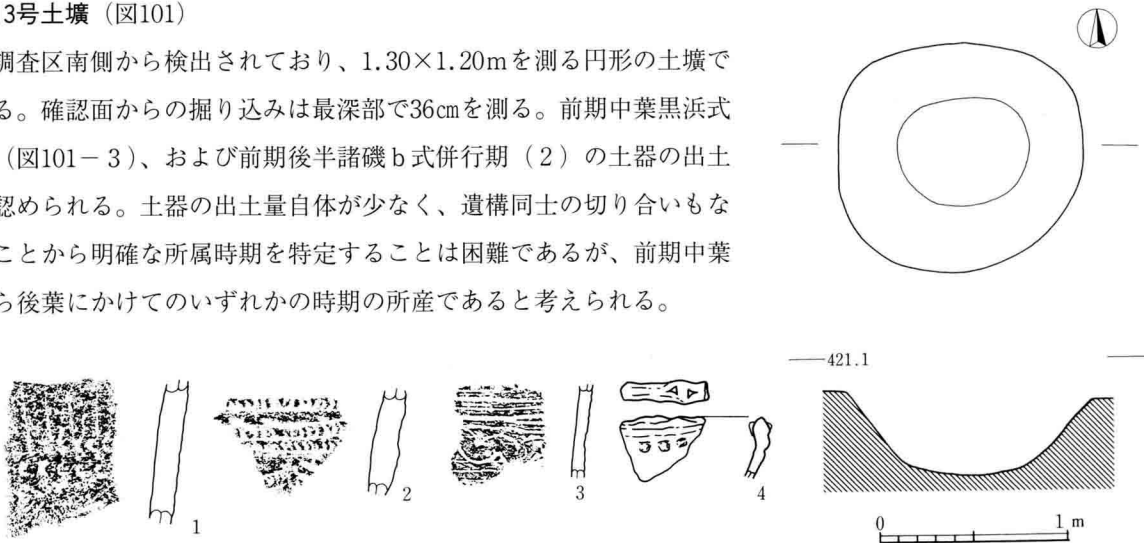


図101 第13号土壌実測図 (1:40)・出土土器実測図 (1:4) ならびに出土土器拓影 (1:3)

14号土壌 (図102)

調査区南側から検出されており、1.40×1.80mを測る不整形の土壌である。確認面からの掘り込みは最深部で48cmを測る。15号土壌に切られる。出土土器としては、図102-2および3以外は中期後葉に属するものと考えられる。2・3は前期後半の格子目文系の土器であり、それ以外は加曾利E式系 (1・4)、大木系 (7) など中期後葉の土器である。7は嘴状突起であり、大木系の土器である。出土土器には時間幅が認められるが、中期後葉の土器が主体となる。

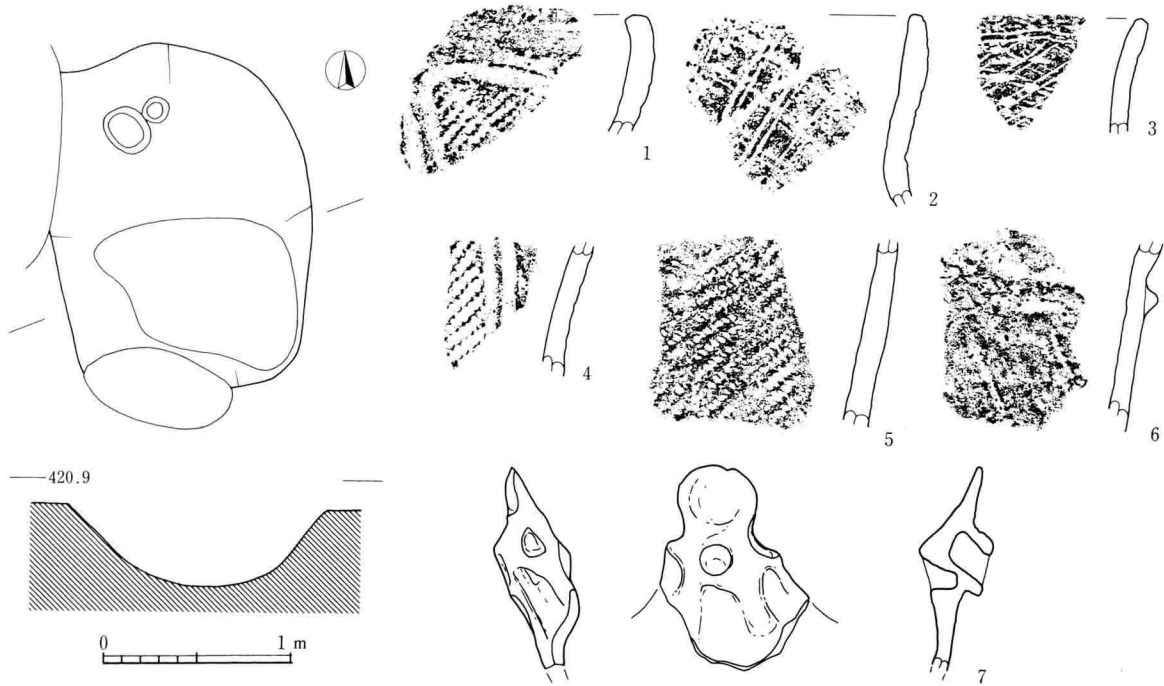


図102 第14号土坑実測図（1：40）・出土土器実測図（1：4）ならびに出土土器拓影（1：3）

15号土坑（図103・104）

調査区南側より検出されており、1.35×1.70mを測る不整形形の土坑である。確認面からの掘り込みは最深部で31cmを測る。14号土坑を切るように構築されており、出土土器の様相からほぼ同時期中期後葉の所産であると考えられる。出土土器としては、圧痕隆帯文系（図103-1）、加曾利E式系（2・図104-10・12・14・16）などが大部分を占めており、これが遺構の帰属時期を示しているようである。1の圧痕隆帯文系の土器は口縁部直下に隆帯を貼付し、それ以下には垂下する条線を全体を巡るように施文している。16は平縁の深鉢形土器であり、太い沈線により無文帯と縄文施文帯を区画している。S字状文も認められる。前期の土器（5・9）の出土量は僅少である。

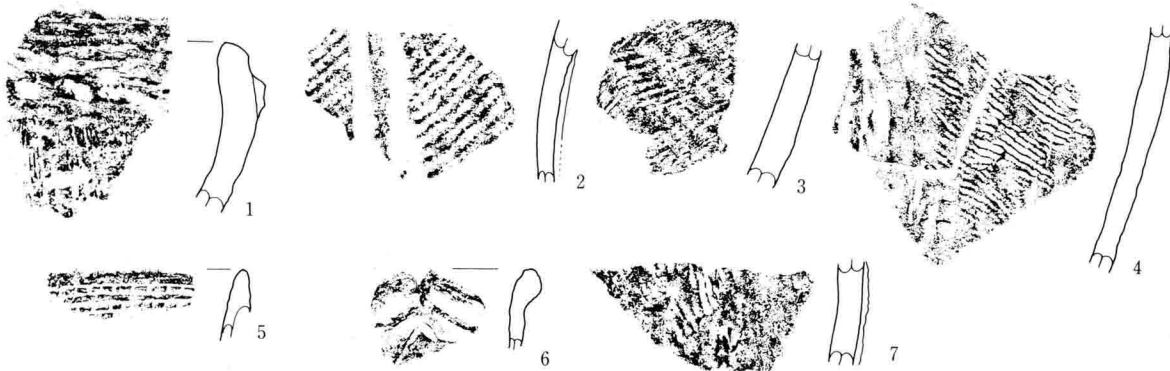
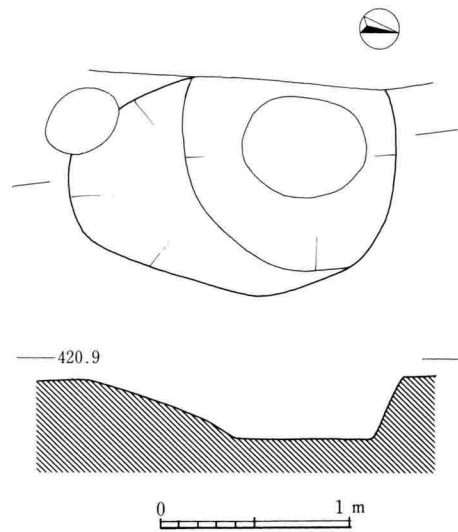


図103 第15号土坑実測図（1：40）ならびに出土土器拓影①（1：3）

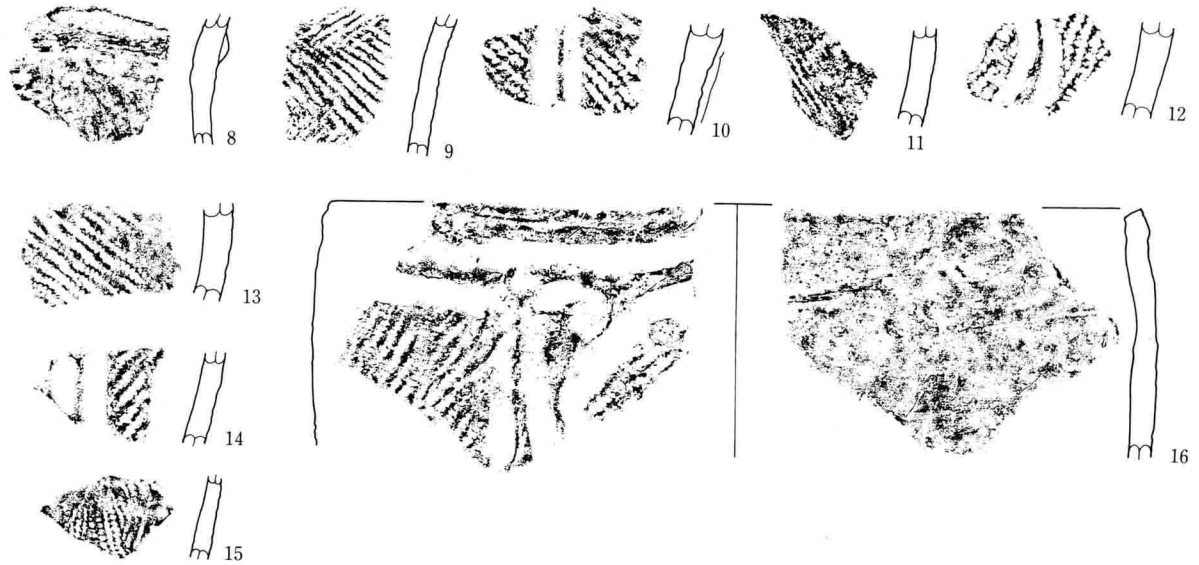


図104 第15号土壙出土土器拓影② (1:3)

16号土壙 (図105)

調査区南側から検出されており、2.15×1.35mを測る不整楕円形の土壙である。確認面からの掘り込みは浅く10cmを測るのみである。出土土器は羽状縄文および縄文を施したもの(図105-1・3・5・8)が最も多く、そこに集合沈線文系(6)、爪形文系(7)、竹管条線文系(2)が加わるという構成である。いずれの土器の胎土にも繊維は含有されていない。若干時間幅があると思われるが、これら出土土器の様相からすれば、概ね諸磯b式期に併行する時期の所産であると言えよう。

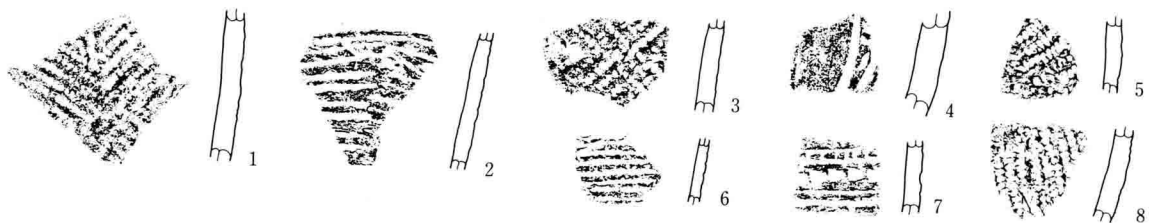
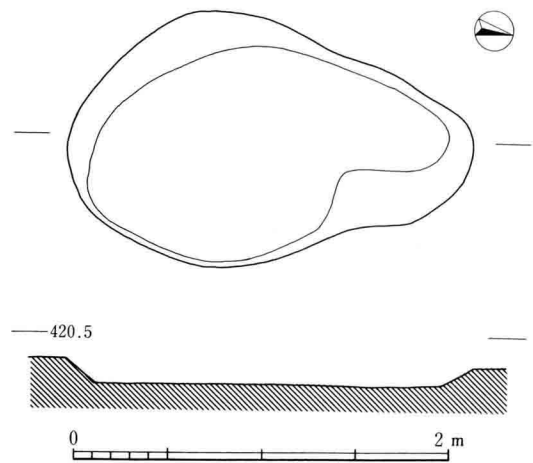


図105 第16号土壙実測図 (1:40) ならびに出土土器拓影 (1:3)

18号土壙 (図106)

調査区南側から検出されており、調査区外へ延びるため規模は不明だが、不整楕円形を呈すると考えられる土壙である。内部には小ピットを2基有する。確認面からの掘り込みは最深部で46cmを測る。出土土器は中期後葉の圧痕隆帯文系(図106-1)、加曾利E式系(3・4・6)を主体とし、そこに前期後半の土器(2・7)が加わるという様相を示す。

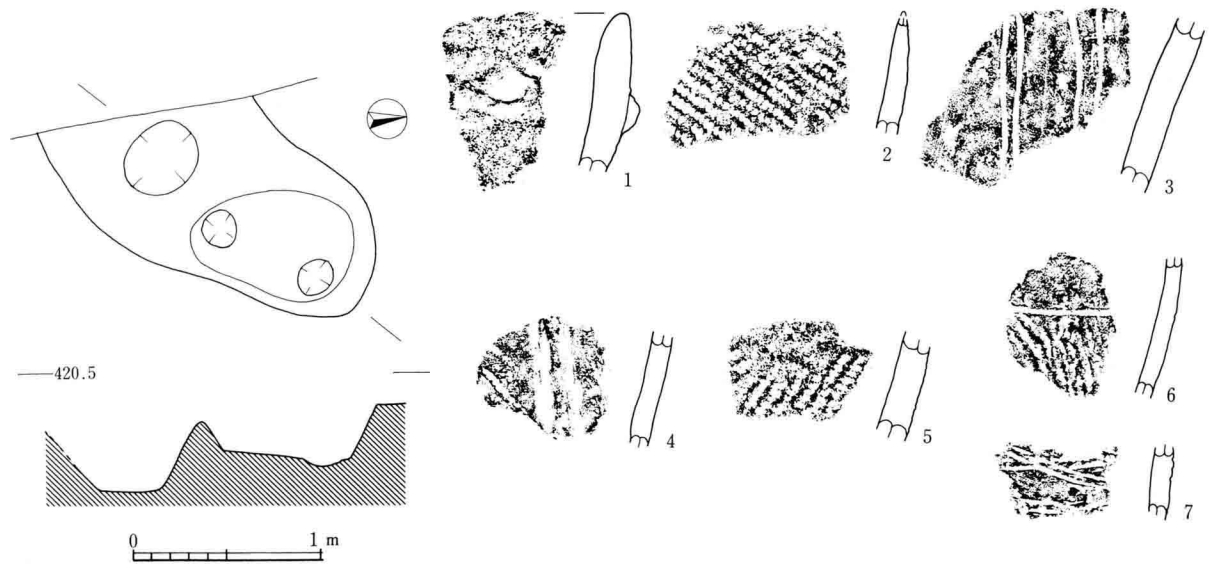


図106 第18号土壌実測図（1：40）ならびに出土土器拓影（1：3）

19号土壌（図107・108）

調査区南側から検出されており、約半分が調査区外のため規模は判然としないが、不整形を呈すると考えられる土壌で、一部掘り込みが二段になる。確認面からの掘り込みは45cm前後を測り、比較的多くの土器が出土している。図108-2・5・7・9・10・12・15・18・21・24の土器はいずれも縄文あるいは羽状縄文を施文する土器群である。9および12の胎土には繊維の含有が認められ、その他の土器は繊維を含んでいない。胎土に繊維の含有がみられない土器の多くが羽状縄文を施文していることから、諸磯b式併行期の土器群である可能性が高い。13は竹管による刺突文とコンパス文が施文されている。6の爪形文・8・11の集合沈線文は諸磯b式併行期の所産であると考えられる。14も爪形文を施文するものであるが、口縁部のみに横位に施文されており、上述の爪形文系土器とは時期を異にするものであろう。このように出土土器は黒浜式期から諸磯b式併行期の資料が見られる。しかし土器の出土量から見れば、諸磯b式併行期の土器が主体と言える。

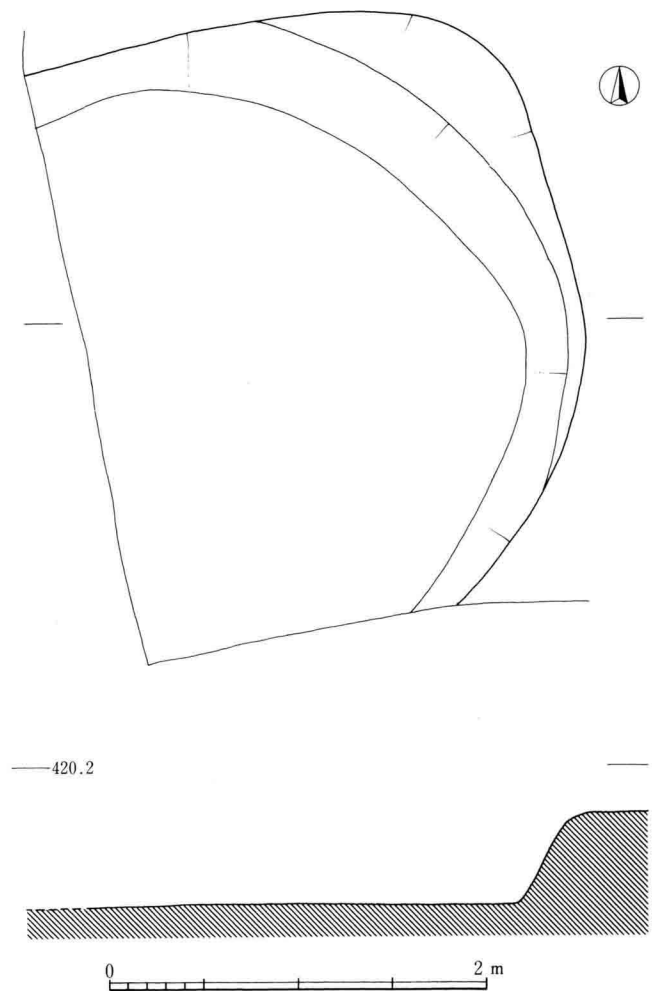


図107 第19号土壌実測図（1：40）



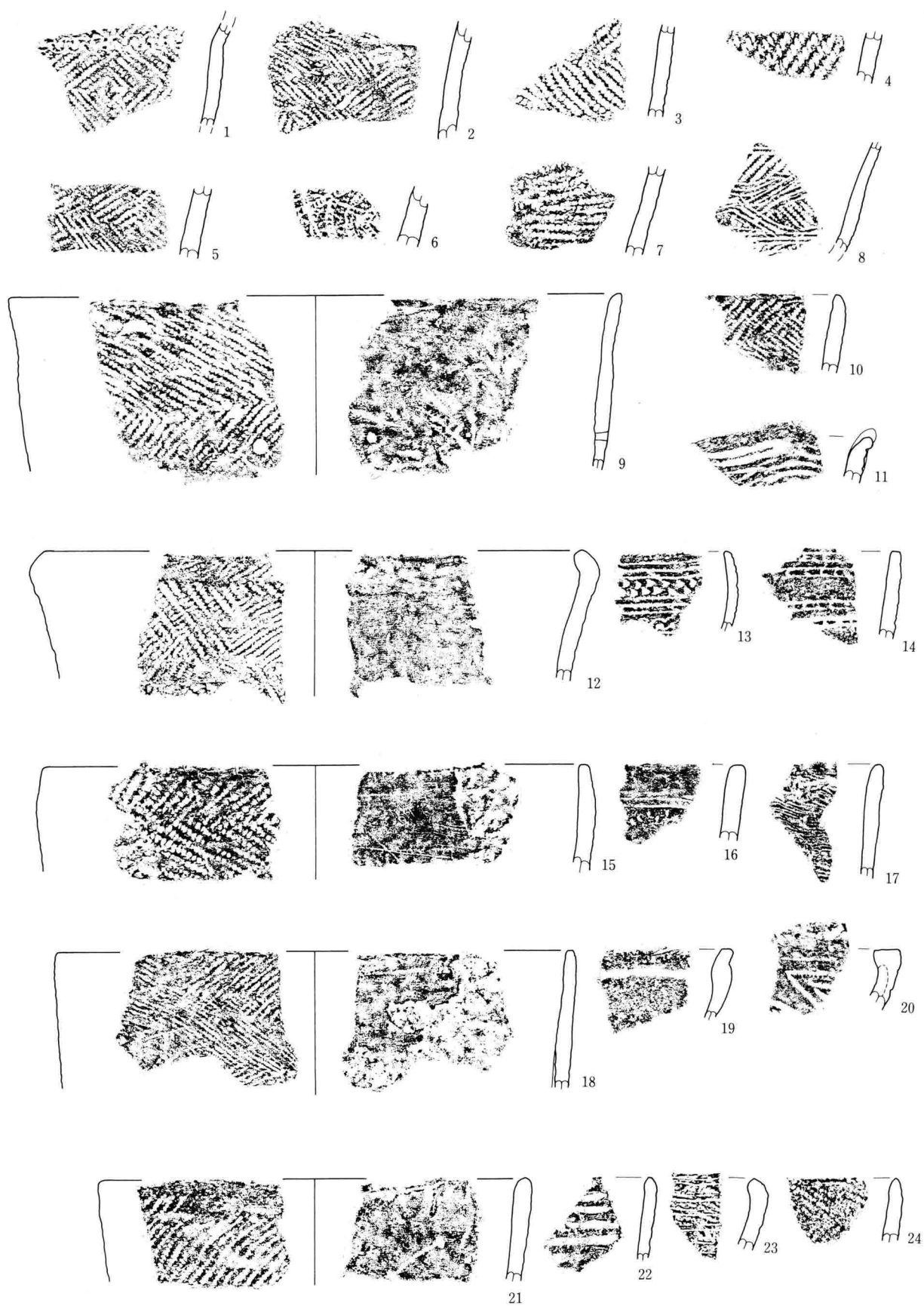


图108 第19号土坑出土土器拓影 (1 : 3)

20号土壌 (図109)

調査区南側より検出されており、長径2.10mを測る円形の土壌である。内部には小ピットを有する。確認面からの掘り込みは最深部で26cmを測る。5は原体から関山式期のもと考えられる。その他には縄文のみを施すもの(図109-1・4・6)、列点文系(2)、集合沈線文系(3)が出土している。これらの土器にはかなりの時間幅が見られ、遺構の帰属時期は判然としない。

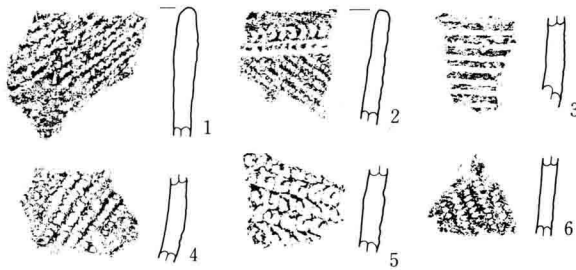
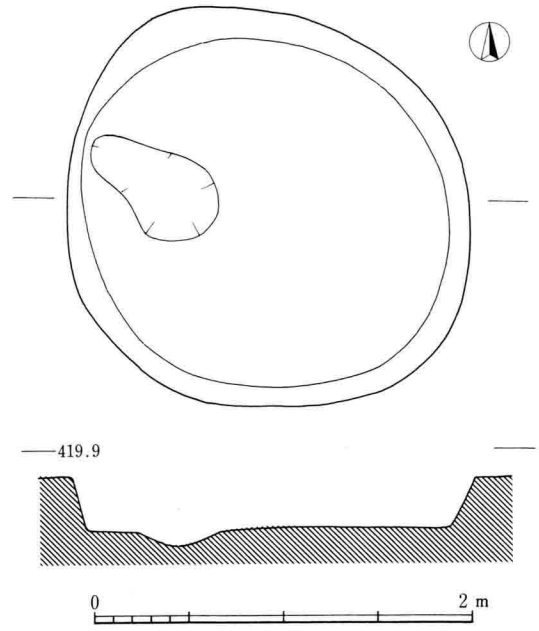


図109 第20号土壌実測図(1:40)ならびに出土土器拓影(1:3)

21号土壌 (図110・111)

調査区南側から検出されており、3.40×2.45mを測る不整形の土壌である。確認面からの掘り込みは最深部で23cmを測る。出土土器としては、図110-1~6・図111-16~21などの羽状縄文を施した土器が多く、そこに7・12・15といった格子目文系、8の爪形文系、そして10・24の平行沈線文系の土器が加わる。これらの土器には繊維は含有されない。また、浅鉢形土器(9)や無文縁孔土器(14)も出土している。これらの土器は諸磯b式併行期の所産と考えられ、遺構自体もこの時期に属するものであろう。22および23は中期後葉の土器であるが、混入の可能性が高い。

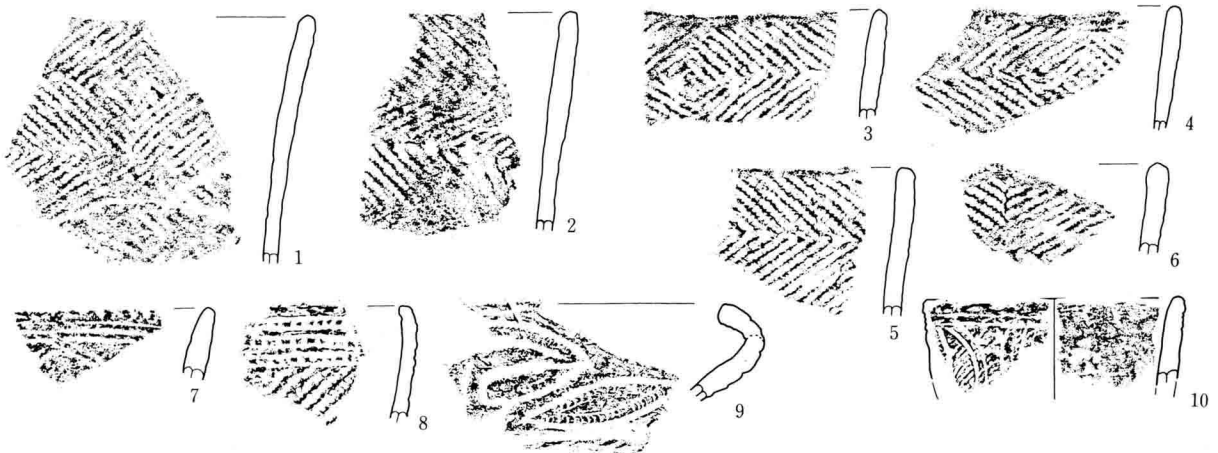
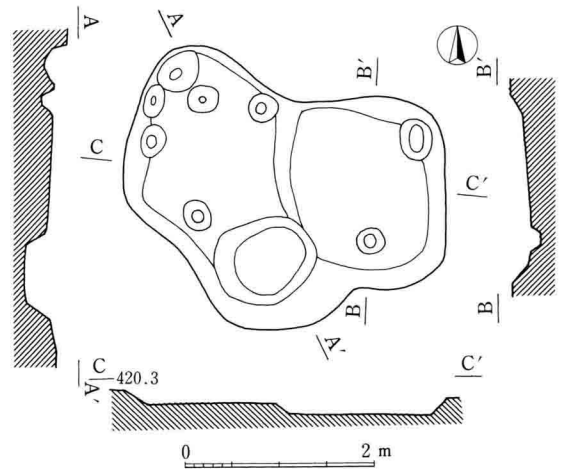


図110 第21号土壌実測図(1:80)ならびに出土土器拓影①(1:3)

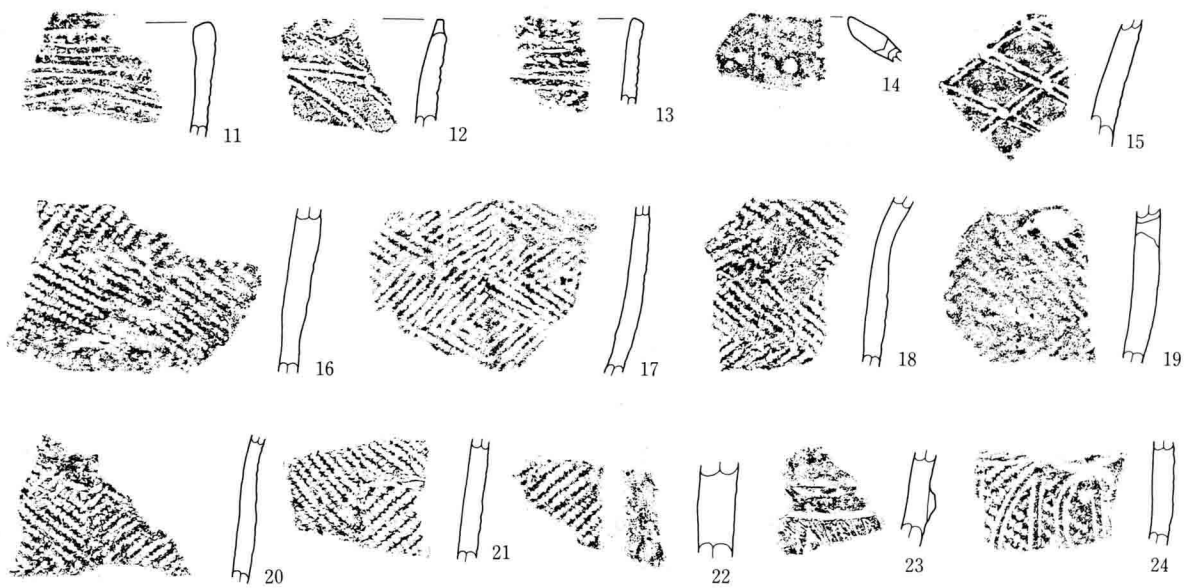


図111 第21号土壙出土土器拓影② (1:3)

22号土壙 (図112・113)

調査区北側より検出されており、4.90×3.20mを測る不整長方形の大型土壙である。確認面からの掘り込みは最深部で23cmを測る。出土土器は、図112-1～8・図113-9・14・15・19などの斜縄文のみを施したものが多い。施された斜縄文は、左撚り右傾のものが大部分を占めている。口縁部は緩く外反しながら立ち上がるものが多く、口唇部には刻み目が施されるもの(3・9)も存在している。その他には、格子目文系(13)、爪形文および変形爪形文系(17・18)、篋描沈線文系浅鉢(16・20)、集合沈線文系(21)などが出土している。いずれの土器にも繊維の含有は認められない。これらの土器群は、前期後半諸磯b式併行期の所産と考えられ、これが遺構の帰属時期を示すものと言えよう。

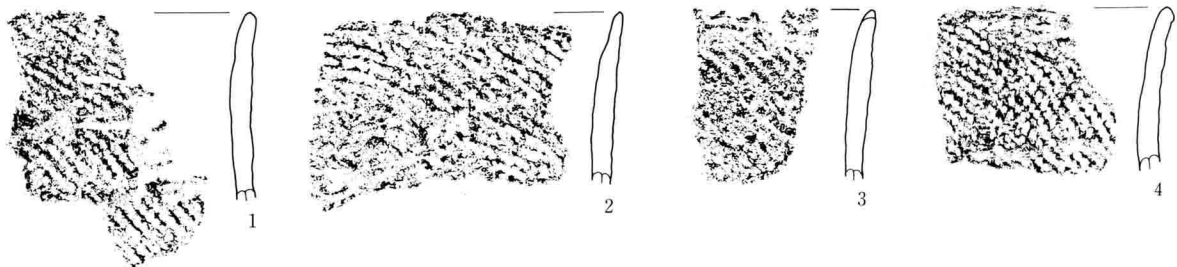
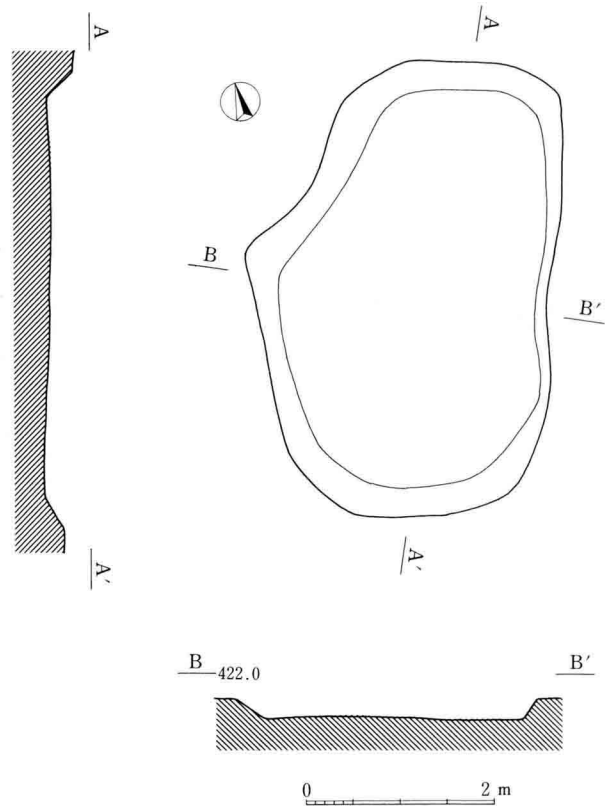


図112 第22号土壙実測図(1:80)ならびに出土土器拓影①(1:3)

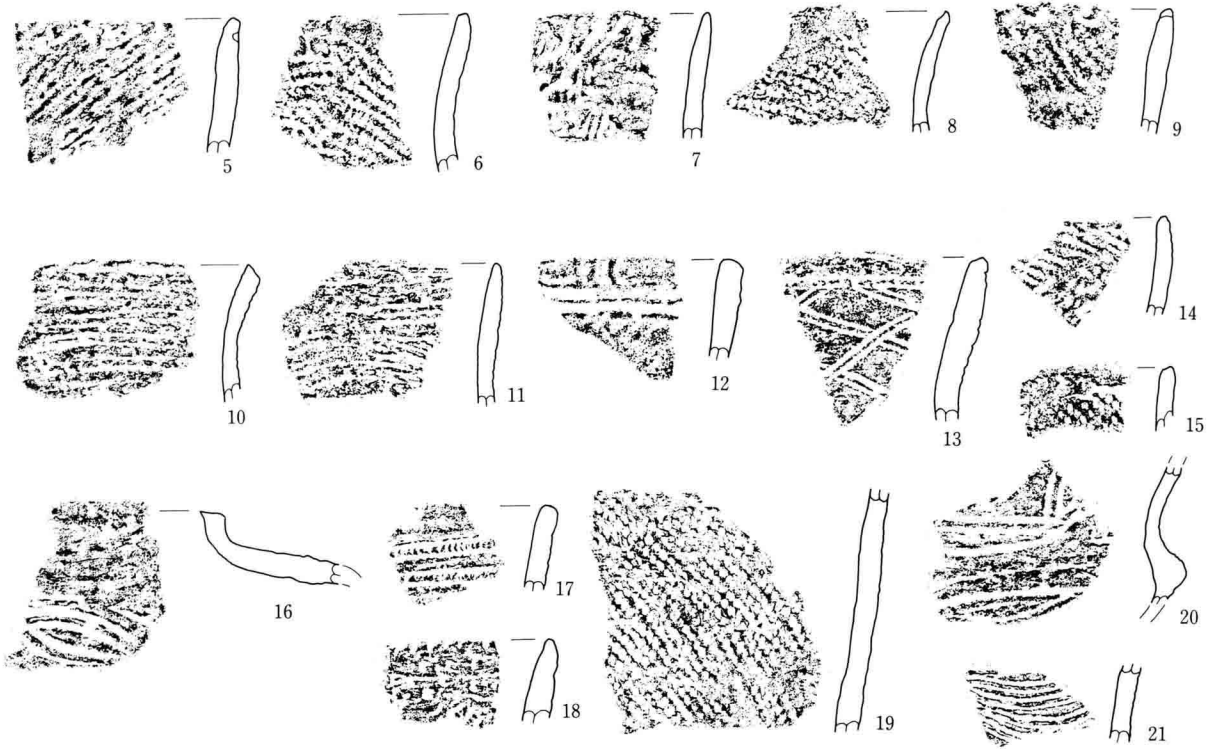


図113 第22号土壌出土土器拓影② (1:3)

23号土壌 (図114)

調査区南側から検出されており、1.65×1.25mを測る不整形円の土壌である。確認面からの掘り込みは45cm前後を測る。ここでもやはり斜縄文を施した土器 (図114-5・6・8・9) が主流となり、そこに格子目文系 (3・4・7) の土器や爪形文系 (1・2・12) の土器が加わるという構成をとる。1は浅鉢であろう。格子目文系の土器には沈線で格子目を施すもの、およびこの格子目の交点に円形刺突文を施すものの二種存在する。これらの出土土器の様相から考えると、遺構の帰属時期は前期後半諸磯b式併行期であると言えよう。

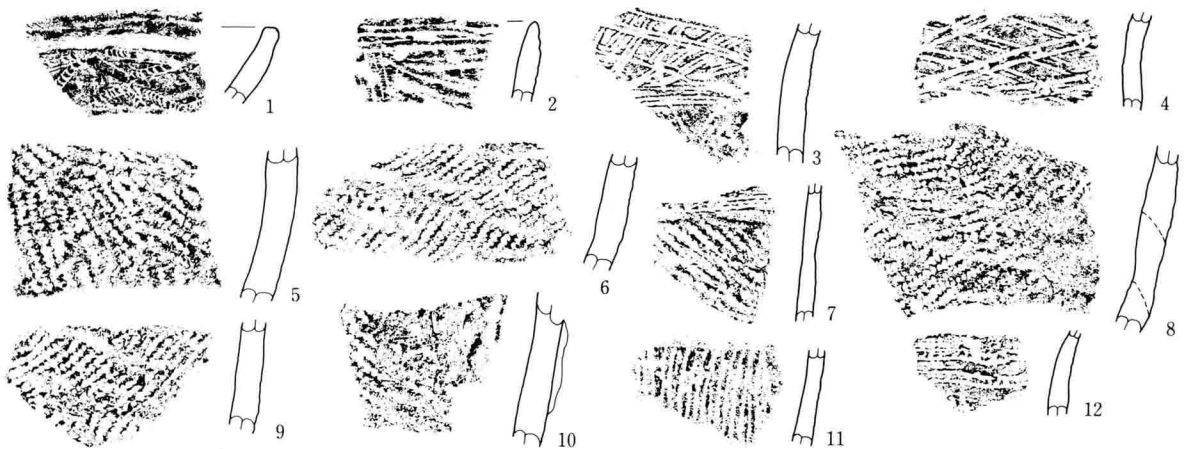
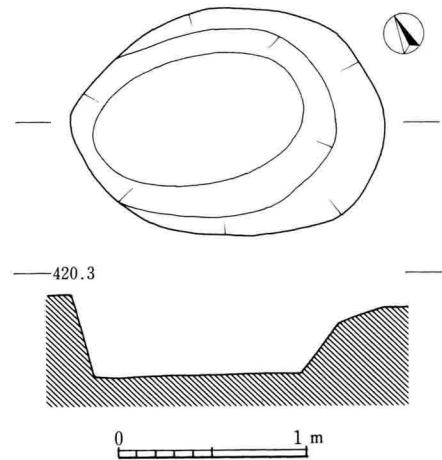


図114 第23号土壌実測図 (1:40) ならびに出土土器拓影 (1:3)



24号土壌 (図115)

調査区南側から検出されており、1.55×1.30mを測る不整形円形の土壌である。二段にわたる掘り込みを有し、確認面からの掘り込みの最深部は61cmを測る。切り合いは認められないものの、22および23号土壌に近接している。出土土器としては、羽状縄文を施したもの(図115-2・7・9)、平行沈線文系(4・5)、爪形文系(11)、浮線文系(8)および有文縁孔土器(1)などの出土が認められる。羽状縄文を施した土器には繊維は含まれておらず、その他の土器を考慮しても遺構の所属時期は諸磯b式併行期であると言えよう。

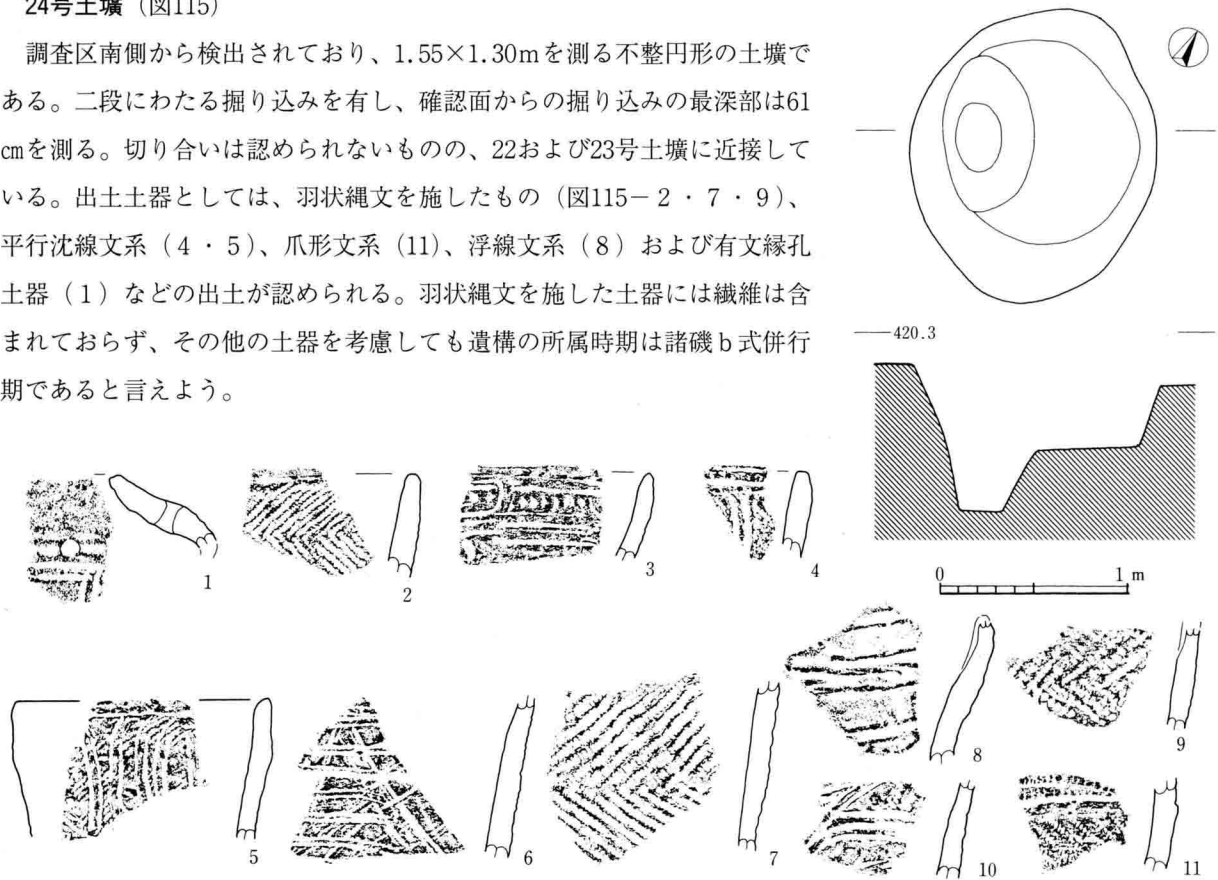


図115 第24号土壌実測図(1:40)ならびに出土土器拓影(1:3)

25号土壌 (図116)

調査区南側から検出されており、径2.80mを測る円形の土壌である。確認面からの掘り込みは50cm前後を測る。8号住居址の南側に近接して検出されている。出土土器としては竹管を使った爪形文系土器(図116-1)、縄文のみを施した土器(5)、格子目文系土器(4)、および微隆起線により縄文施文帯と無文帯を区画するもの(3)が挙げられる。爪形文系土器において、口縁部片である1は胎土に繊維を多く含有しており、その器形および文様構成からも黒浜式期の土器と言えよう。その他の土器には繊維が含まれておらず、3以外は前期後半諸磯aあるいはb式併行期の土器と考えられる。3は中期後葉加曾利E式系の土器であろう。

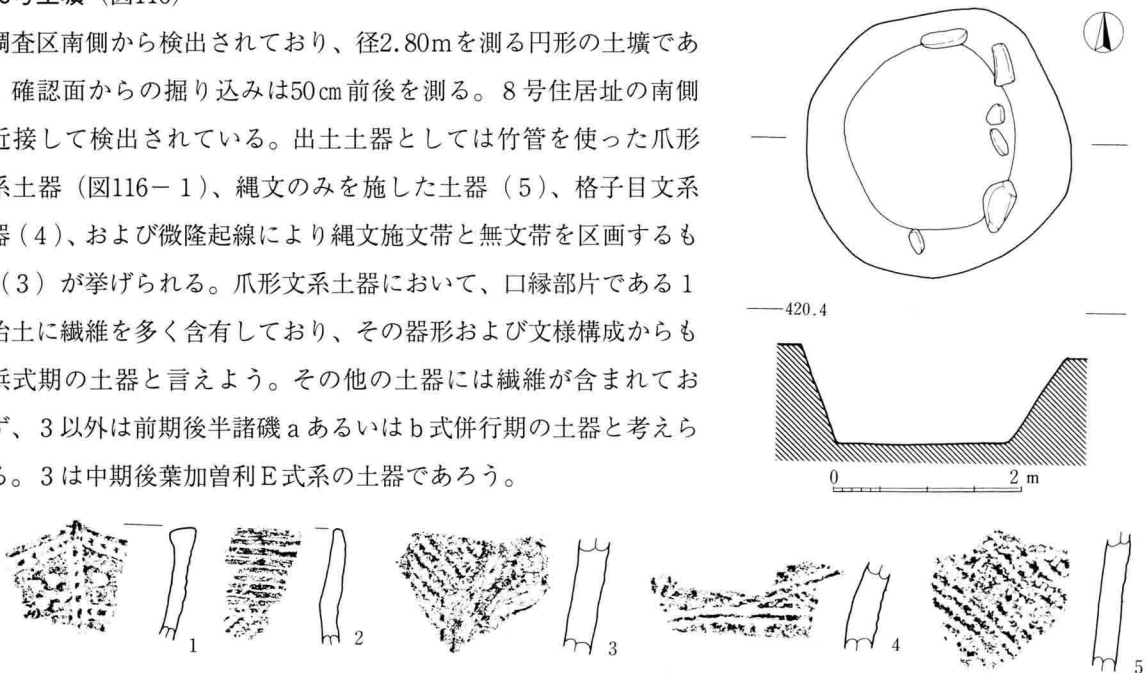


図116 第25号土壌実測図(1:80)ならびに出土土器拓影(1:3)

26号土壙 (図117)

調査区南側より検出されており、2.05×2.15mを測る不整形の土壙である。確認面からの掘り込みは18cm前後を測り、内部には小ピットを有する。出土土器をみるとキャリパー形を呈するであろう深鉢の口縁部である図117-1は浮線文を施している。無文縁孔土器(5・6)・爪形文による入組木葉文を施文した浅鉢形土器(9)も出土している。縄文のみを施しているものは3・10のみであり、胎土に繊維は含んでいない。爪形文を施すものとして2および11が挙げられる。2は浅鉢である可能性が高い。これらの土器の所属時期は若干の時間幅をもつ可能性もあるが、概ね諸磯b式併行期の中に収まるものであろう。

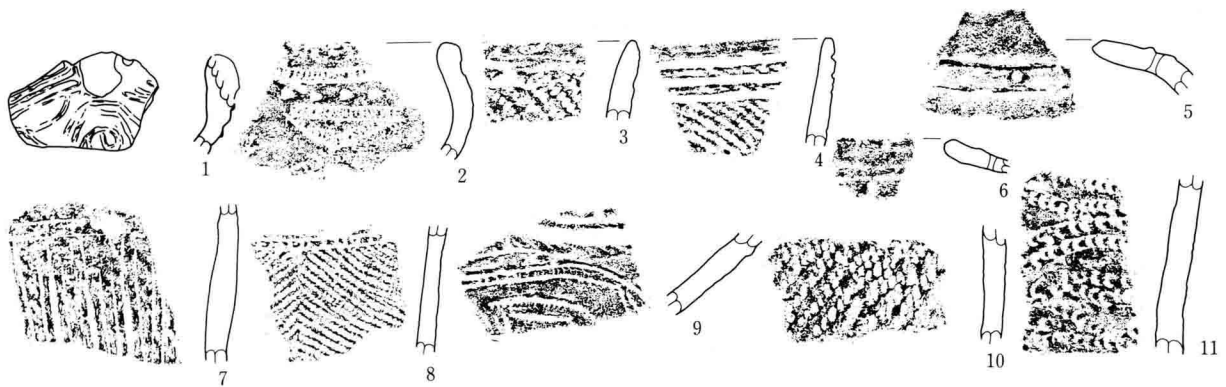
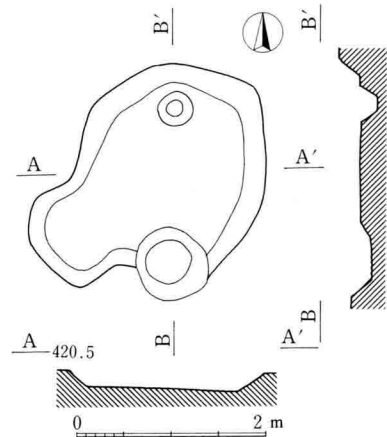


図117 第26号土壙実測図(1:80)・出土土器実測図(1:4)ならびに出土土器拓影(1:3)

27号土壙 (図118・119)

調査区南側で検出されており、4.03×3.70mを測る不整形の土壙である。確認面からの掘り込みは15cm前後を測る。出土土器は中期後葉に属するものが多数を占め、これに前期後半の土器が加わるといふ様相を呈す。中期後葉の土器は、圧痕隆帯文系(図119-1・9・10・12・19)が最も多く、その他に加曽利E式系(2・11・13~15)、縄文のみを施文しているもの(5・6・17・18)などが挙げられる。19は隆帯は認められないが、圧痕隆帯文の胴部であろう。17・18も縄文原体や胎土が19と近似することを考えると、圧痕隆帯文の胴部片であると考えられる。3は前期後半の爪形文系土器であり、諸磯b式期の土器であろう。4も同時期の格子目文系の土器である。8は諸磯a式期の肋骨文系の土器である。量的に見れば中期後葉の土器が圧倒的に多く、これが遺構の帰属時期を示すものと考えられる。

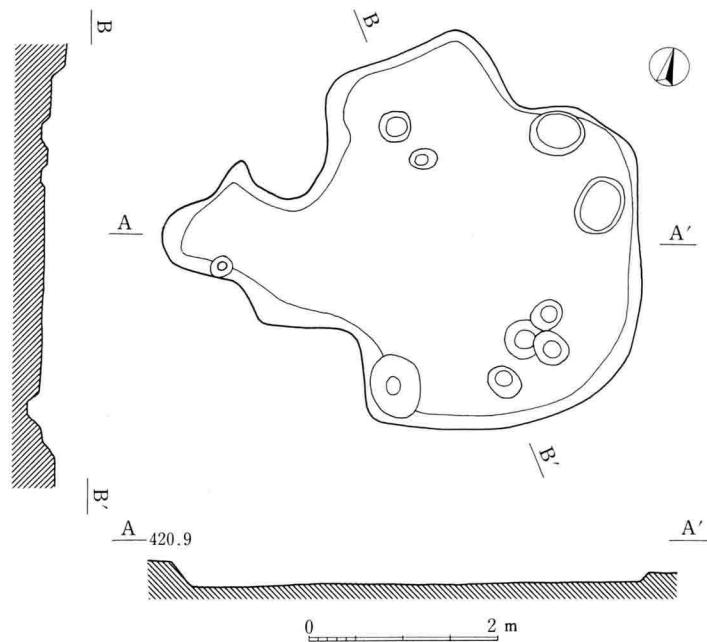


図118 第27号土壙実測図(1:80)

量的に見れば中期後葉の土器が圧倒的に多く、これが遺構の帰属時期を示すものと考えられる。

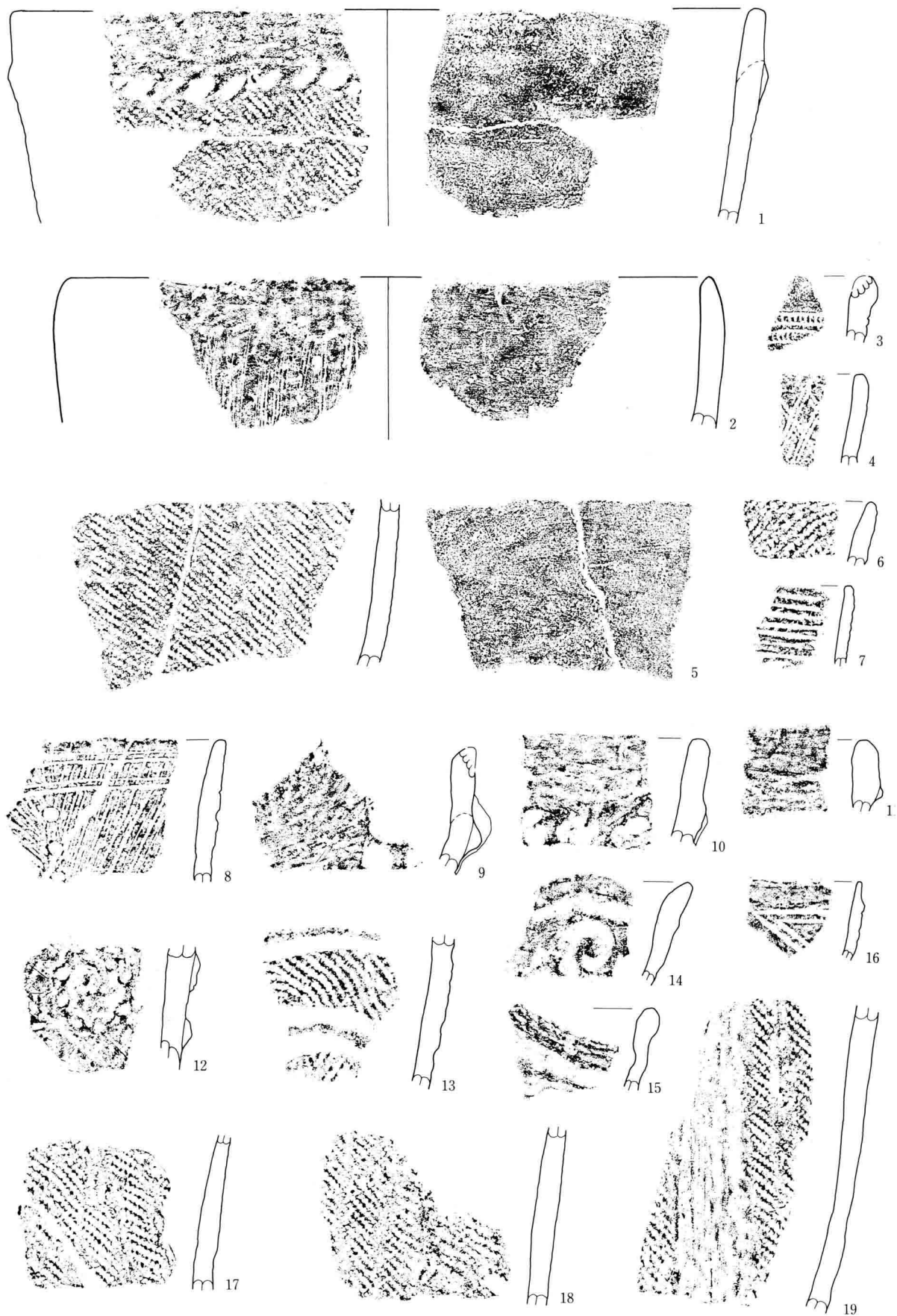


图119 第27号土坑出土土器拓影 (1 : 3)

### 30号土壌 (図120)

調査区南側から検出されており、1.10×1.05mを測る不整形の土壌である。確認面からの掘り込みは最深部で29cmを測る。出土土器は多くなく、図化できたもので4点のみである。いずれも口縁部である。図120-1は縄文のみを施しており、胎土には繊維は全く含まれていない。2は諸磯b式併行期の格子目文系土器である。3も小破片のため判然としないが、同時期の格子目文系土器であろう。4は縄文が地文として施されており、口縁部直下に一条の沈線が巡る。あるいは中期の土器かもしれない。

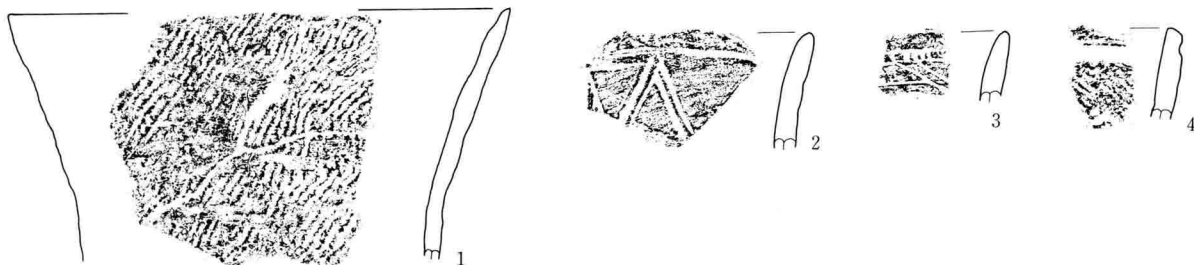


図120 第30号土壌実測図 (1:40) ならびに出土土器拓影 (1:3)

### 31号土壌 (図121)

調査区南側より検出されており、1.20×1.15mを測る不整形の土壌である。確認面からの掘り込みは40cm前後を測る。30号土壌・10号住居址に近接している。ここでも出土土器は少ないが、底部および口縁部がそれぞれ2点出土している。図121-1は浅鉢形土器の底部であり、4は底部付近ぎりぎりまで縄文が施文されている。2および3の文様構成は縄文と爪形文から成り、いずれも諸磯b式併行期のものと考えられる。遺構の帰属時期についても諸磯b式併行期であると言えよう。



図121 第31号土壌実測図 (1:40)・出土土器実測図 (1:4) ならびに出土土器拓影 (1:3)

### 32号土壌 (図122・123)

調査区南側で検出されており、3.10×2.70mを測る不整形の土壌である。確認面からの掘り込みは30cm前後を測る。出土土器は縄文あるいは羽状縄文のみが施文されるもの (図123-1~9・13・17・22~26・28・29) が最も多く、その他格子目文系 (10・12) 篋描沈線文系 (15・16・20) などが出土している。これらの土器には繊維は含有されていない。また、中期後葉加曾利E式期の土器 (18・27) もわずかではあるが出土している。このように中期の土器が数点存在しているが、その主体は前期の土器であり、諸磯b式期であると考えられる土器が大部分を占める。

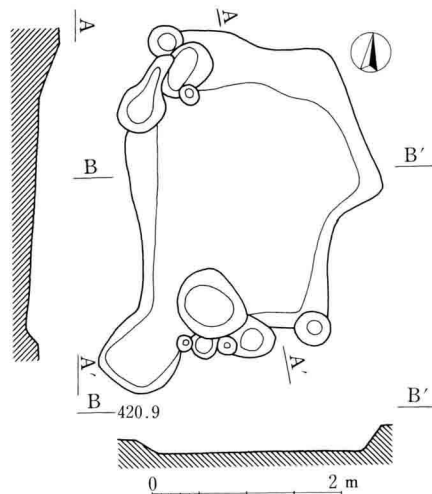


図122 第32号土壌実測図 (1:80)



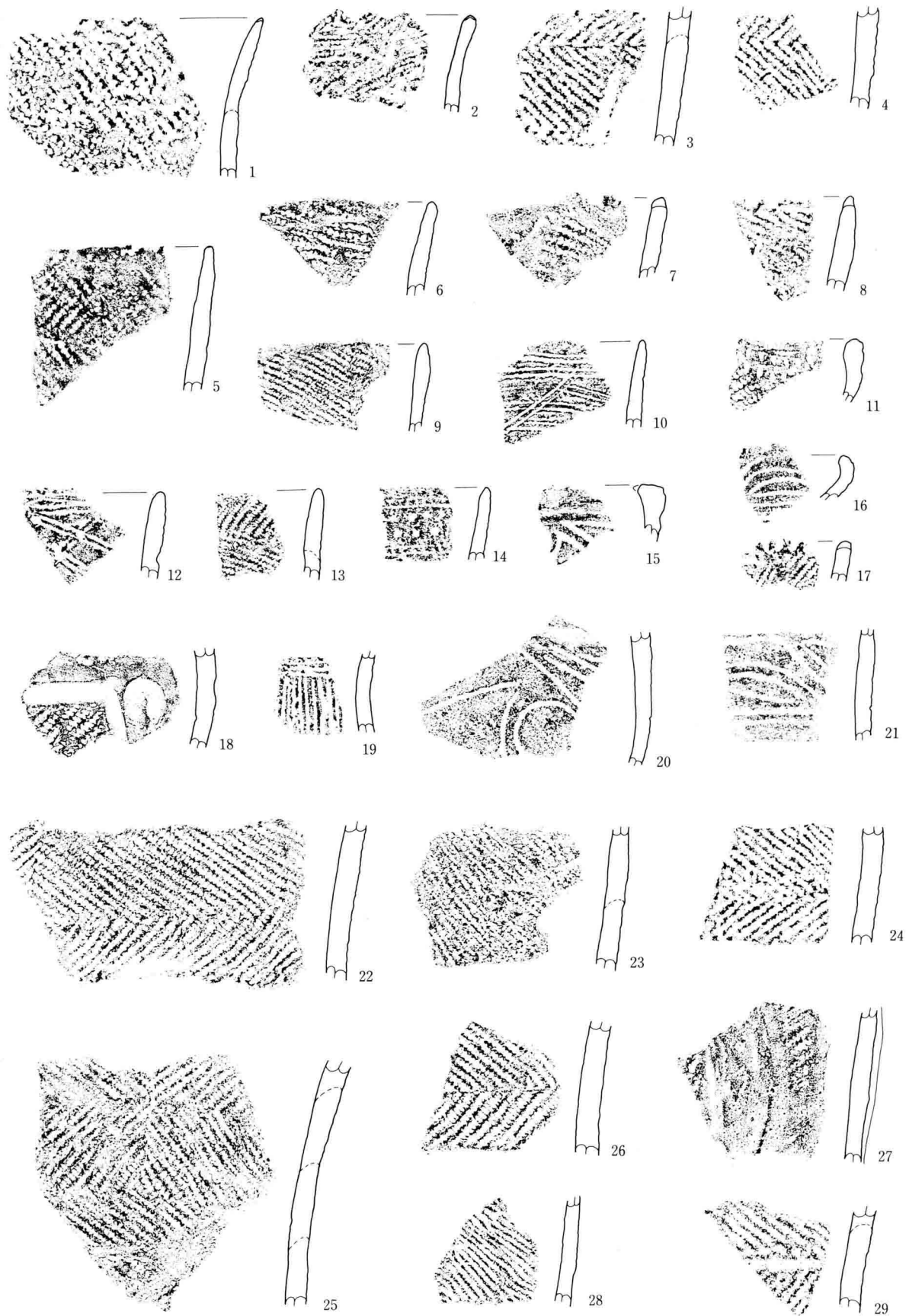


图123 第32号土坑出土土器拓影 (1 : 3)

33号土壙 (図124)

調査区南側より検出されており、32号土壙と切り合うため形状および規模は判然としないが、不整形長方形を呈すると考えられる土壙である。確認面からの掘り込みは浅く10cm前後を測るのみである。出土土器は圧痕隆帯文系 (図124-1・2)、加曽利E式系 (3~6・9・13)、縄文のみの土器 (7・8・10~12) などから構成される。これらは全て中期後葉に属する土器群である。1~4は口縁部であるが、全て内湾気味に立ち上がる器形を呈する。縄文のみが施文されている土器群も胎土および施文状態から同時期の所産であると考えられる。また、1点前期後半の格子目文系土器 (14) が出土しているが、これは混入であろう。これらの出土土器の様相からすると、中期後葉の所産であると言えよう。

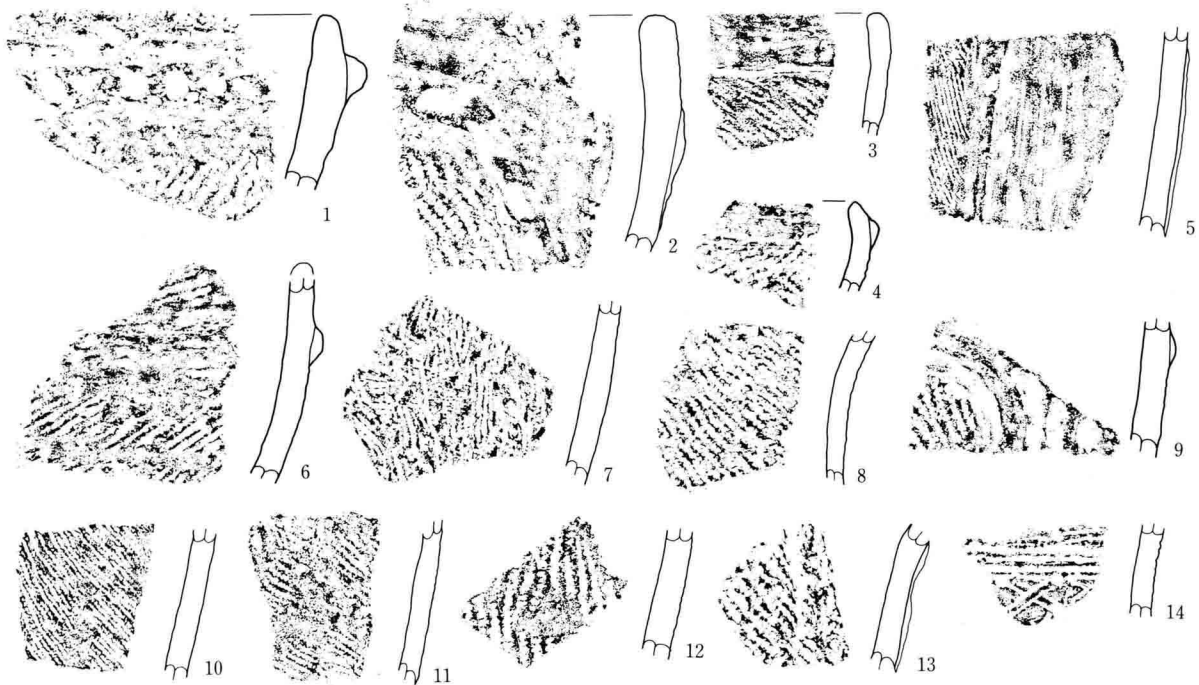
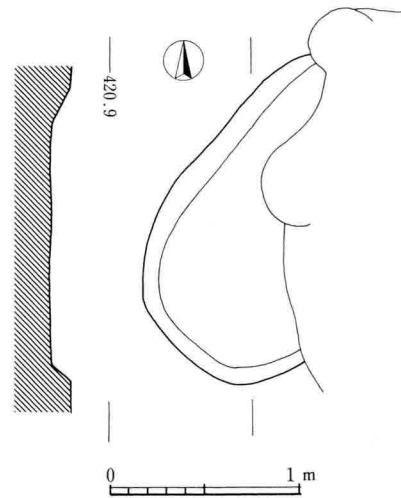


図124 第33号土壙実測図 (1:40) ならびに出土土器拓影 (1:3)

34号土壙 (図125・126)

調査区南側から検出されており、2.50×2.60mを測る円形の土壙である。確認面からの掘り込みは35cm前後を測り、内部には小ピットを有する。33号土壙同様に圧痕隆帯文系 (図126-2・3・6) および加曽利E式系 (1・5・7・8・13) の土器群が主体的に出土している。縄文あるいは付加条縄文を施文する土器 (4・9・11・12) の出土も認められる。この縄文を施文した土器のうち4のみが前期の土器であると考えられる。このような出土土器の様相を考えれば、大部分が中期後葉の所産であり、この時期が遺構の帰属時期を示唆する可能性が強いと言える。

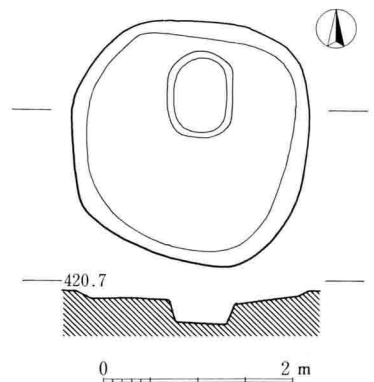


図125 第34号土壙実測図 (1:80)

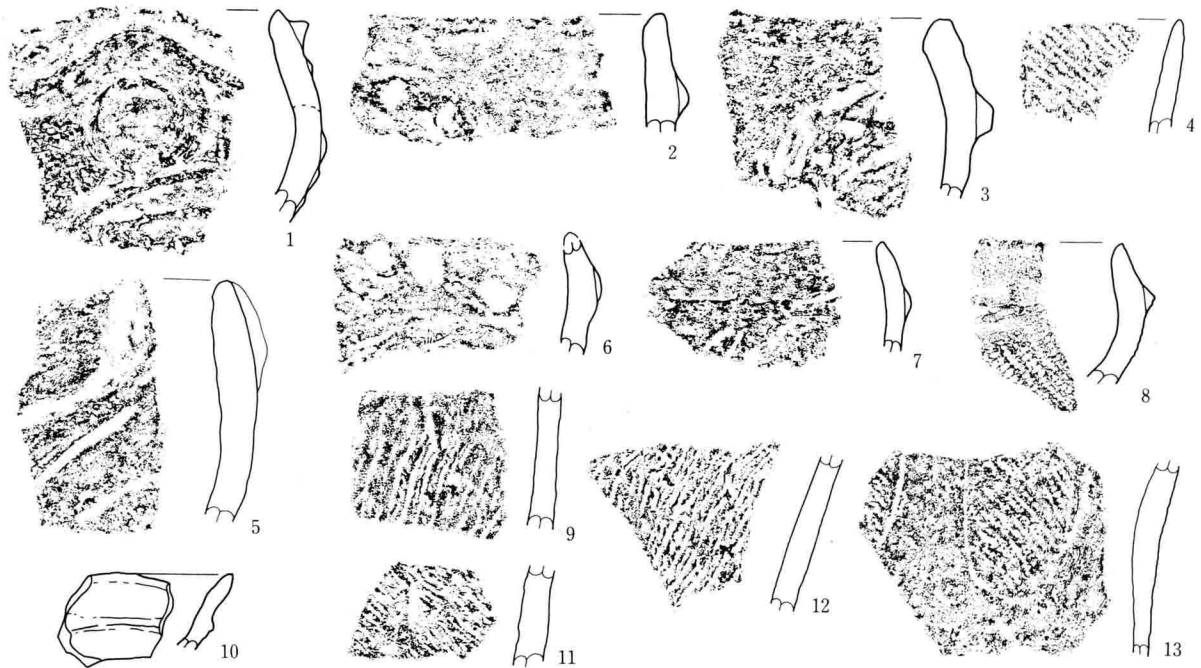


図126 第34号土壌出土土器実測図（1：4）ならびに出土土器拓影（1：3）

### 35号土壌（図127）

調査区南側より検出されており、1.45×1.00mを測る楕円形の土壌である。確認面からの掘り込みは30cm前後を測る。出土土器は少なく、その帰属時期が判然としないものが多い。図127-1は前期後半集合沈線文系のキャリパー形を呈する深鉢の口縁部である。諸磯b式中段階の土器であろう。2は文様構成および胎土から中期後葉加曾利E式系の土器であると言えよう。その他の土器はいずれも器面の摩滅が著しく、調整なども判然としない。出土土器量そのものが少ない上に、帰属時期の分かる土器にもかなりの時間幅が認められる。そのため、所属時期を明確にすることは困難であり、遺構自体の帰属時期を特定することは困難を極める。

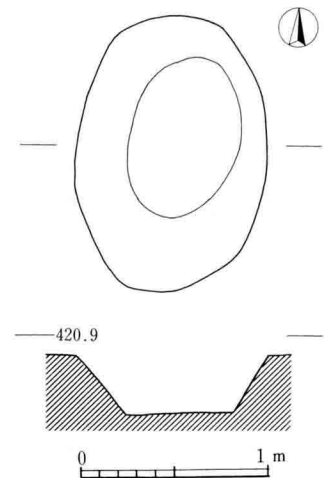


図127 第35号土壌実測図（1：40）ならびに出土土器拓影（1：3）

### 37号土壌（図128）

調査区南側より検出されており、1.90×1.35mを測る長楕円形の土壌である。確認面からの掘り込みは最深部で39cmを測る。無文の縁孔土器が出土しており（図128-1～3）、いずれも口縁部の立ち上がりから諸磯b式併行期においても新しい要素をもつものであると言えよう。その他集合沈線文系（4）、平行沈線文系（5・8）、羽状縄文を施文したもの（6・7・10・11）などが出土している。これらはいずれも前期後半に属する土器群である。1点だけ中期後葉の圧痕隆帯文系の土器（9）が出土している。また、底部片も2点出土しており、両者とも平底を呈している。これらの出土土器の様相から、本土壌は前期後半の所産であると考えられる。

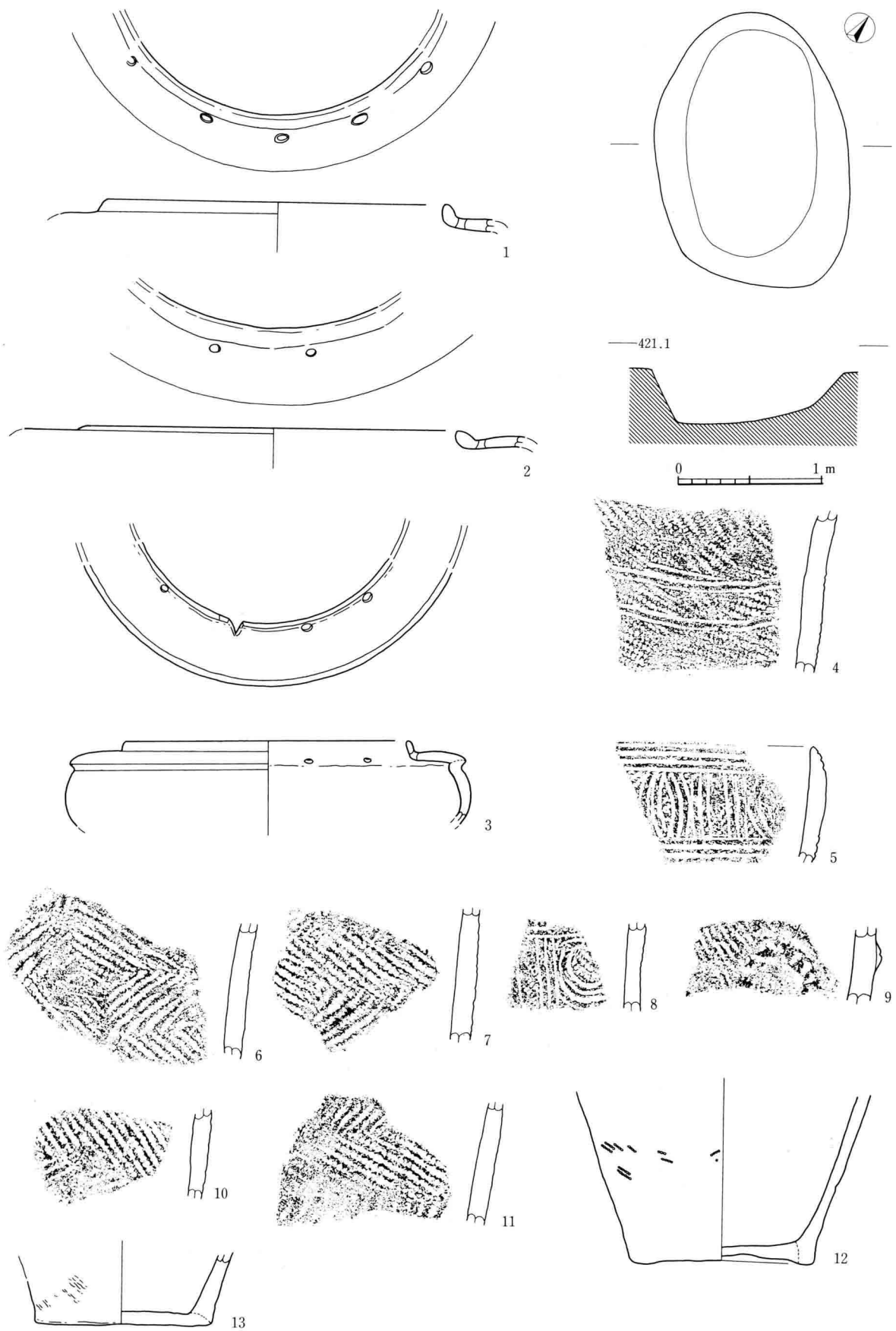


図128 第37号土壙実測図（1：40）・出土土器実測図（1：4）ならびに出土土器拓影（1：3）

41号土壙 (図129・130)

調査区南側から検出されており、一部11号住居址と切り合うため規模および形状は判然としないが、径約3.20mを測る不整円形の土壙であると思われる。確認面からの掘り込みは30cm前後を測る。出土土器は多く、その帰属時期も前期後半および中期後葉と広範である。前期後半の土器としては、格子目文系の図129-1・8・9・図130-20、篋描文系浅鉢と考えられる22などが挙げられる。中期後葉の土器は加曾利E式系の土器である3・4・10・12・15・16・18・19が挙げられる。11は圧痕隆帯文系土器の胴部片であろう。14は大木系であろう。このように出土土器の様相からは、前期後半と中期後葉という大きな時間幅が存在すると言える。量的に考えれば、中期後葉の土器が主体と言えよう。

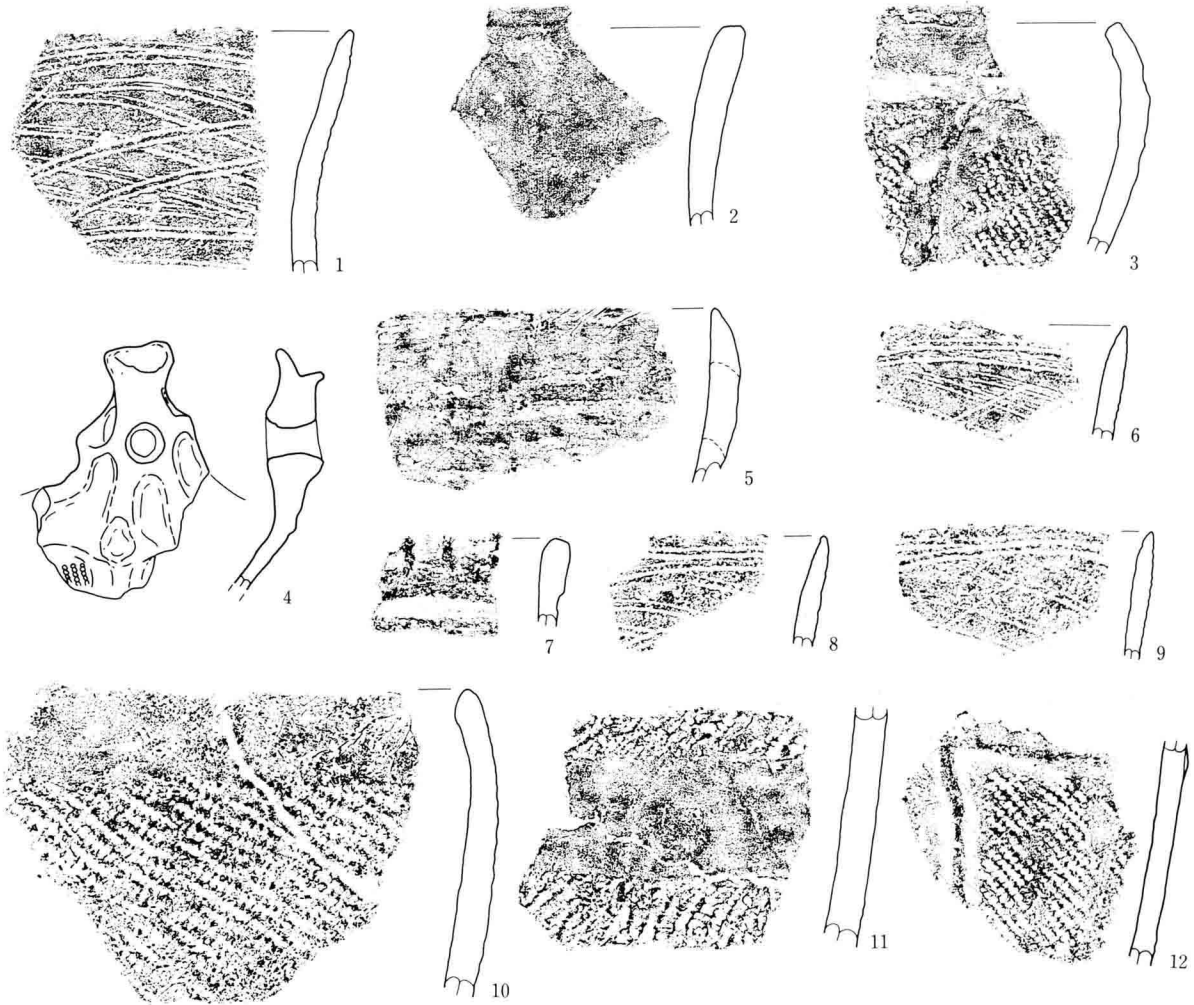
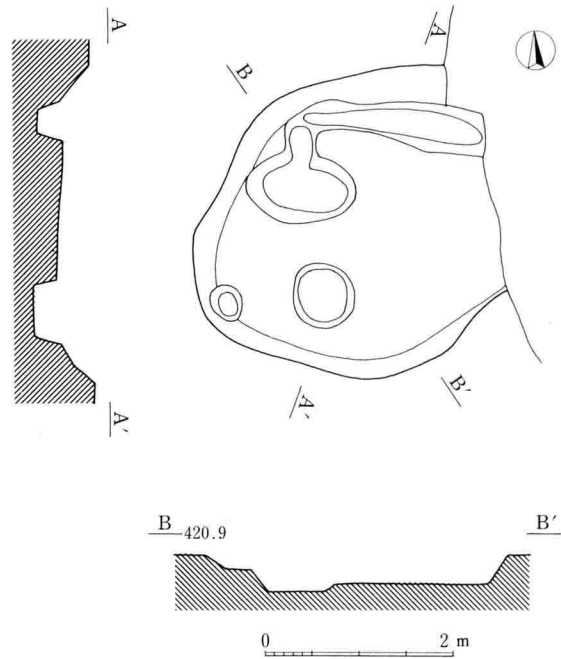


図129 第41号土壙実測図 (1:80)・出土土器実測図 (1:4) ならびに出土土器拓影① (1:3)



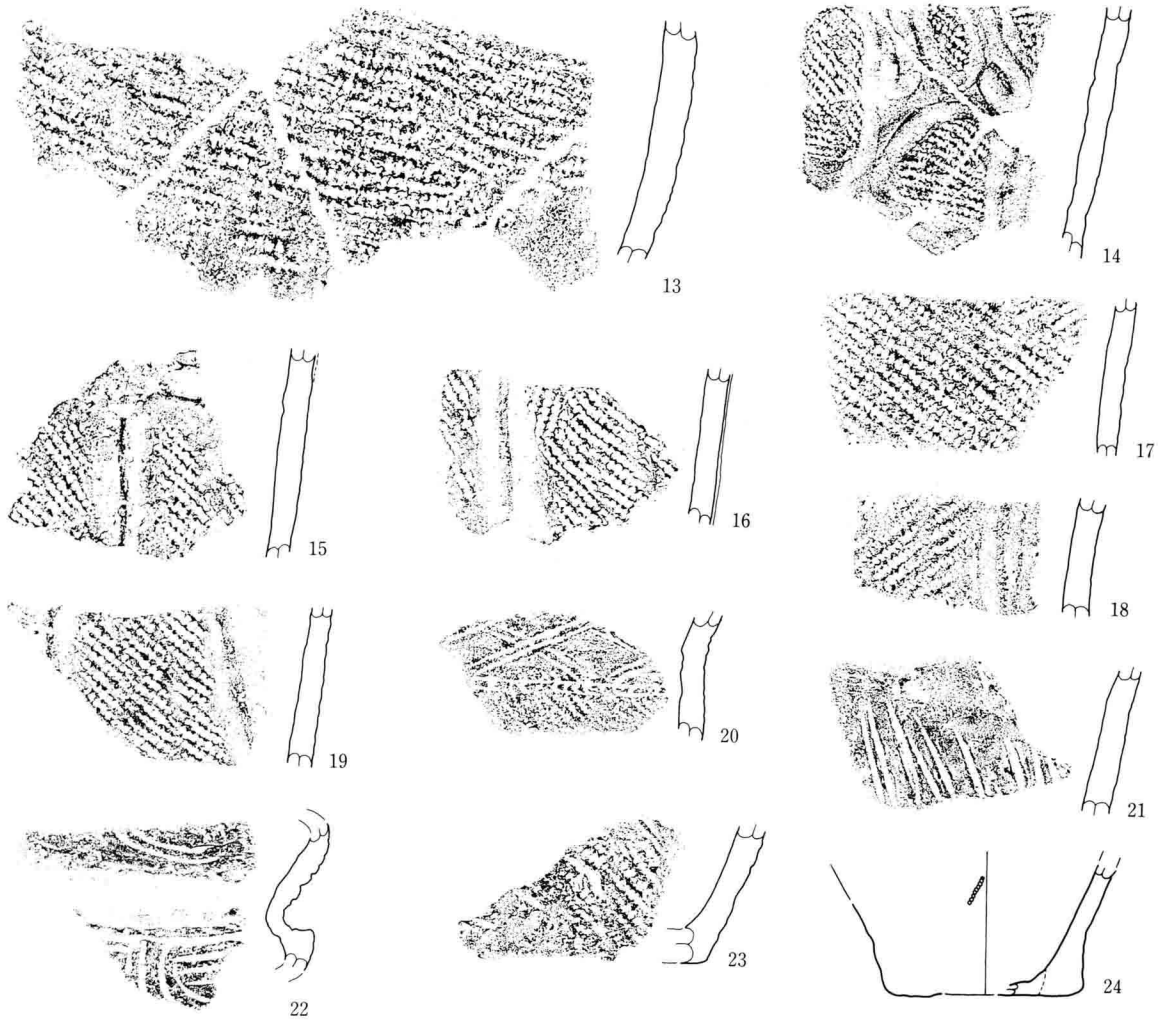


図130 第41号土壙出土土器実測図（1：4）ならびに出土土器拓影②（1：3）

42号土壙（図131）

調査区南側より検出されており、1.30×1.65mを測る不整円形の土壙である。確認面からの掘り込みは浅く13cmを測る。出土土器は全てが細片で文様構成などが判然としないものが多いが、前期後半の集合沈線を施文すると考えられる図131-1～3、縄文のみの4、中期後葉加曾利E式期の5・6が確認されている。

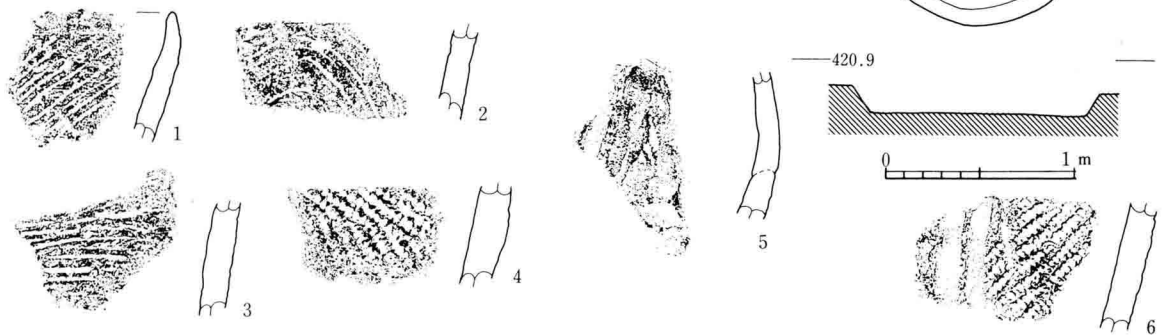


図131 第42号土壙実測図（1：40）ならびに出土土器拓影（1：3）

43号土壙 (図132・133)

調査区南側より検出されており、規模は判然としませんが不整長楕円形を呈する土壙であると考えられる。確認面からの掘り込みは60cmを測る。出土土器は若干前期後半の土器 (図132-9・10・27・図133-29・30・34) がみられるが、ほとんどが中期後葉加曾利E式期のものである。数点だけ同時期の圧痕隆帯文系土器の口縁部が出土している (1・2)。加曾利E式土器の胴部片と考えられるものが数多く出土しており (11~26)、いずれも曲線的な沈線により文様帯を区画し、その中に縄文を充填する手法を用いて施文している。破片のみで器形全体は判然としませんが、文様構成および施文方法を考えると、加曾利E式においても最も新しい段階である加曾利E IV式期の所産であると言える。このような出土土器の様相から本遺構は中期末葉の所産と考えられる。

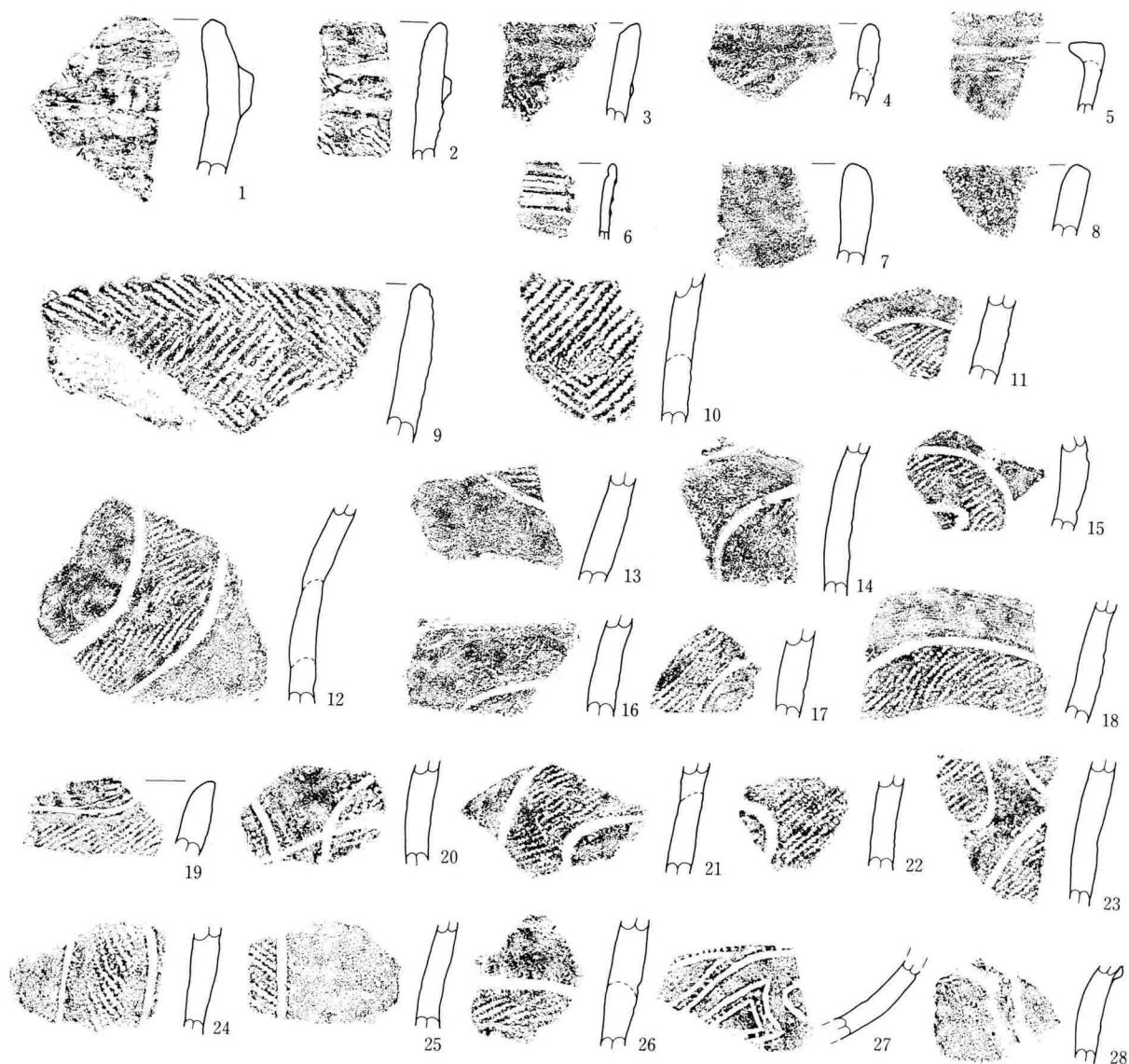
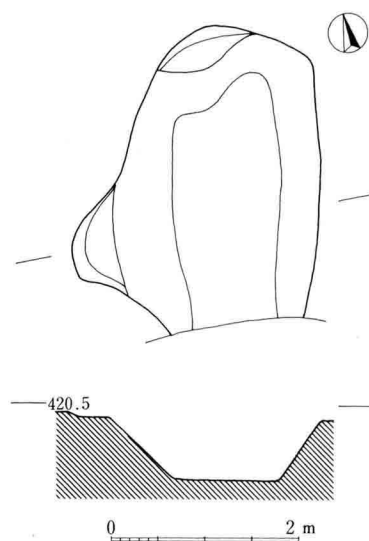


図132 第43号土壙実測図 (1:80) ならびに出土土器拓影① (1:3)

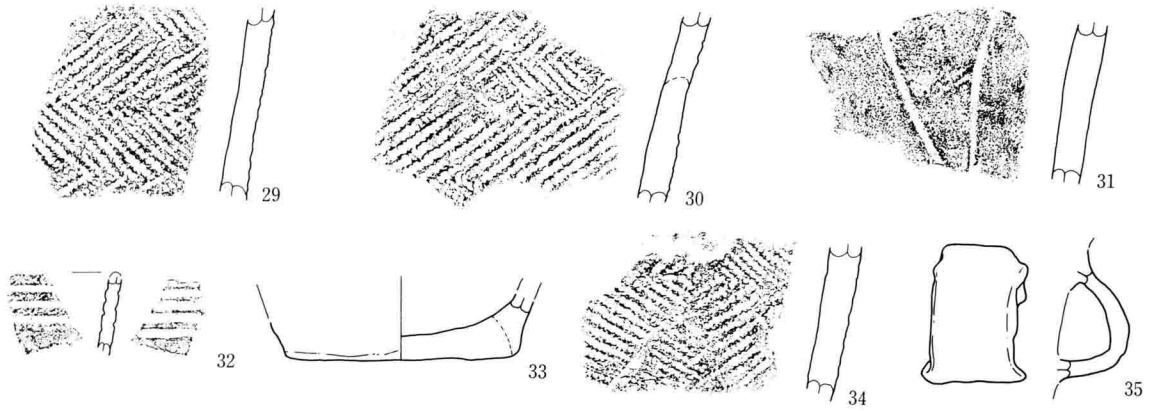


図133 第43号土壙出土土器実測図(1:4)ならびに出土土器拓影②(1:3)

48号土壙(図134・135)

調査区北側より検出されており、1.95×2.00mを測る不整形形の土壙である。確認面からの掘り込みは50cm前後を測る。46号土壙と切り合う。出土土器に関しては胎土および原体の観察から時期の異なるものも含まれている可能性を指摘できるが、そのほとんどは前期後半の土器である。その内容は縄文あるいは羽状縄文のみを施文するもの(図134-3・4・図135-8~10・13・14)、篋描沈線文系(6・7・11)、爪形文あるいは変形爪形文系(12・16・18)、格子目文系(15)などから構成される。6・7・11は浅鉢形土器であろう。1は摩滅が著しく文様構成は不明である。2は付加条縄文を施す土器である。これらの土器片の中で胎土に繊維を含有するものは認められない。このように、出土土器の様相から考えると前期後半の所産であると言えよう。

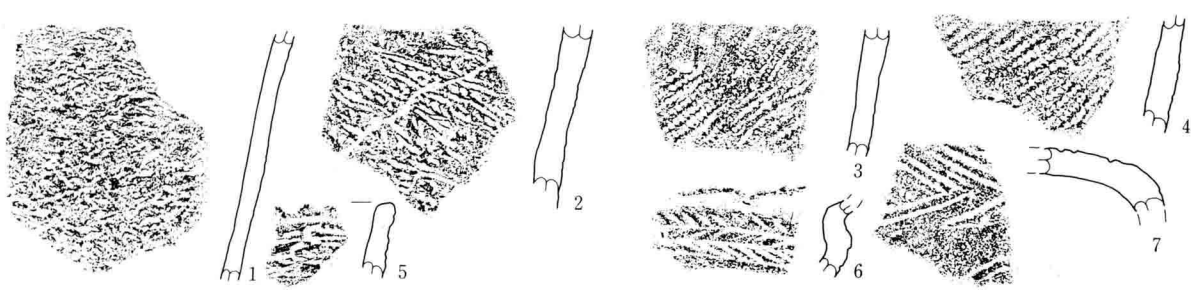
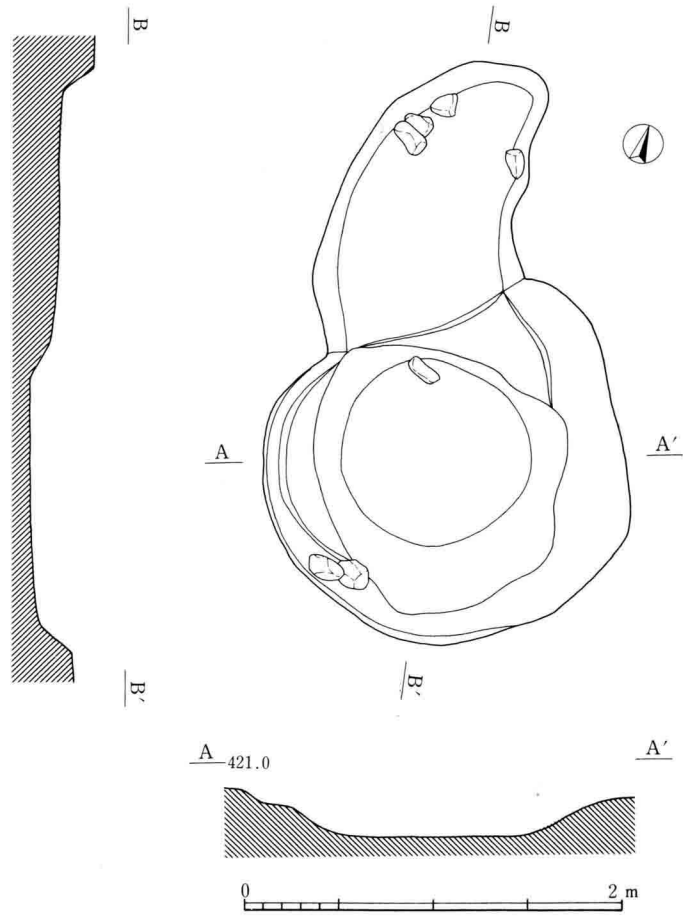


図134 第48号土壙実測図(1:40)ならびに出土土器拓影①(1:3)

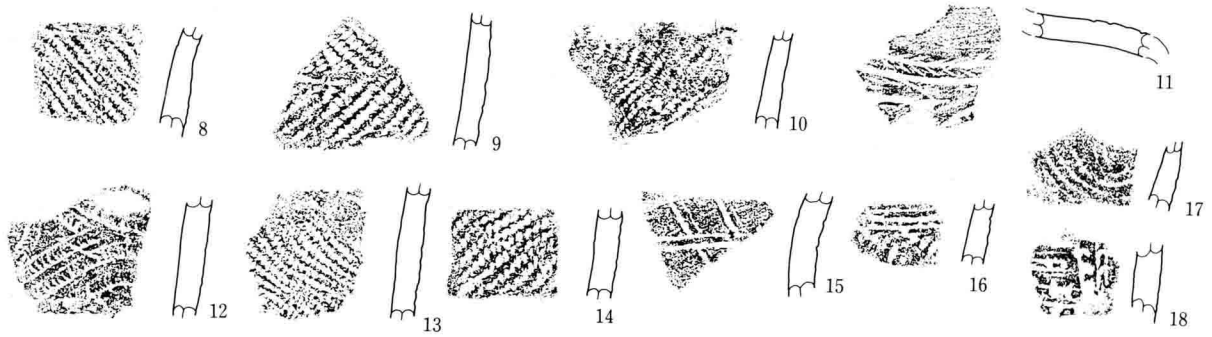


図135 第48号土壌出土土器拓影② (1:3)

49号土壌 (図136)

調査区北側において検出されており、2.30m×1.40mを測る不整長方形の土壌である。掘り込みは一部が二段にわたり、確認面からの最深部で50cmを測る。出土土器は極めて少量であり、その全てが前期後半諸磯b式期の土器であると考えられる。図136-1はキャリパー形を呈する深鉢の胴部片であり、縄文地に浮線を貼付している。諸磯b式中段階の土器であろう。2は縄文のみを施文したもので、胎土に繊維は含まれていない。3は篋描沈線文系、4は爪形文により幾何学文様を描出し、数条の浮線が貼付されるもので両者共に浅鉢である。

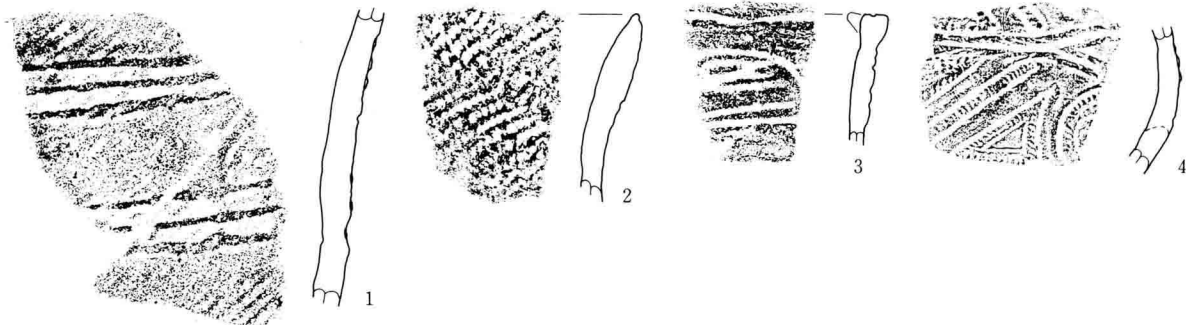
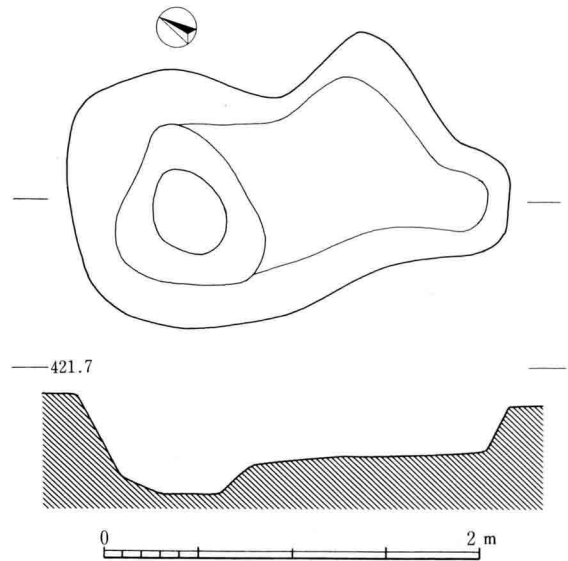


図136 第49号土壌実測図 (1:40) ならびに出土土器拓影 (1:3)

52号土壌 (図137)

調査区北側より検出されており、4.00×2.20mを測る不整長方形の土壌である。確認面からの掘り込みは浅く、10cm前後を測る。出土土器は極めて少量である。3点の出土が認められるが、いずれも小破片の上摩滅が著しく、その帰属時期は判然としない。

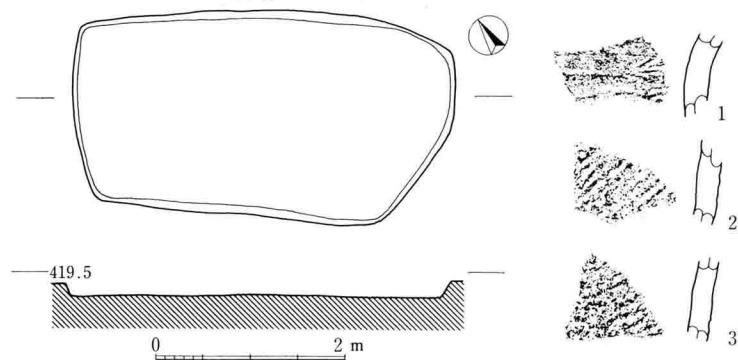


図137 第52号土壌実測図 (1:80) ならびに出土土器拓影 (1:3)

## 第4章 出土遺物の様相

### 第1節 土器の様相

今回の発掘調査において整理箱約100箱分もの土器が出土した。これらの多くは縄文時代前期後半に属するものであり、そこに中期後葉の土器が加わるという様相を呈している。本節では住居址および土壌より出土した土器群を、主に器形および判別可能な文様構成要素から分類を試みた。まず、大きく時期別に分類し、その中でさらに系統別に細分をした。なお、それぞれの類型において説明を加えた資料は煩雑になるのを防ぐため、出土量の多いものに関しては最もその類型を反映する代表的なものを抽出した。

#### I群 関山式期の土器

当該期の土器の出土量はきわめて僅少である。図化し得たものは数点のみである。胎土に繊維を含有しており、文様原体からも関山式期の土器であると考えられる。

1類 縄文(41-130、42-156、109-5) 胎土に繊維を含み、羽状縄文を施し、ループ文がみられる。原体を深く強く押捺している。繊維を含んでいるためか胎土は脆く部分的に剥離する。

#### II群 黒浜式(大木式)期の土器

この時期の土器の出土量は限られており、コンパス文を施した土器と網目状撚糸文の土器・爪形文系の土器がいくらか確認できるだけである。なお、縄文のみを施文した土器群の中に繊維を含有するものが僅かに認められる。繊維を全く含んでいないかあるいは少含量のため、繊維混入の有無を確認するのが困難なものが大半である。そのためこの土器群のほとんどは後続する時期のものと考え一括して諸磯式期に含めた。

1類 コンパス文(18-26~32) 胎土に繊維を含み、無文地にコンパス文を施文する。コンパス文を挟むように、その上下には数条の沈線文または爪形文を施す。

2類 網目状撚糸文(39-16~21) 胎土に繊維を含む。破片資料で全体の器形はわからないが、口縁部は軽く開きながら立ち上がる。器面全体に網目状撚糸文が施され、内面は繊維束状のナゲ痕が顕著に残る。

3類 爪形文(40-34・35・37~43) 器形が若干開き気味に立ち上がる深鉢形土器と考えられる。胎土に繊維を含むものが多い。縄文・羽状縄文を地文とし、口縁部に横位で幅狭の文様帯をもつ。全般的に諸磯式の爪形文よりもシャープであり、施文の間隔も狭く、施文方法も押し引きに近いものが多い。また、直線的な爪形文を数条施し、その間に横長のD字状の連続刺突文を施文するもの(40-35、65-19、94-7)もみられる。

#### III群 諸磯a式期の土器

当該期の土器群は肋骨文・格子目文・波状文の三系統のものがある。これらの出土量そのものはそれほど多くはなく、当遺跡では次の諸磯b式期に盛行するものと考えられる。なお、縄文のみを施した土器群については諸磯式期のものとして一括したが、さらに諸磯a式期とb式期のものを分離することが困難であるため、諸磯b式期に一括して含めた。

1類 肋骨文(17-16~21、119-8) 器形は底部から口縁部にかけて緩やかに外反する朝顔形の深鉢であると考えられる。文様構成は口縁部付近から頸部まで縦方向に施された円形刺突文または沈線文を中心とし、半截竹管により平行沈線文を矢羽状に施文するものである。胴部には縄文が施文される。器形・施文方法・文様構成等から格子目文系の土器との関連性が推測されている(樋口他 1976)。

2類 格子目文(17-8、39-1、69-7) 本遺跡出土の縄文前期土器の中で主体的な出土量がみられる系統である。格子目文土器の細分を試みその変遷案を提示された寺崎氏によれば、この系統の土器群は諸磯a式から



c式の土器と概ね併行するものであるという（寺崎 1991）。明確に変遷段階と時期細分とを対比することができないようである<sup>(注1)</sup>。施文方法が簡素化に向かうことを考慮すれば、当該期文様構成要素として格子目を竹管による爪形文により描出するものも該期の土器として挙げられる。器形は胴部が僅かに張り、口縁部に向かい緩やかに外反していくものと考えられる。文様施文帯は頸部を境に二分され、上半には格子目文を、下半には縄文が施文される。今回諸磯a式併行期として分類した資料は数点のみであるが、格子目を竹管による爪形文により描出す土器（17-8、69-7）、および格子目を爪形文により描出し空白部に円形刺突文を施す土器（39-1）の出土も認められる。これらは寺崎氏の分類によるとBⅠ・BⅡ型の土器である（寺崎 1991）。

3類 波状文（34-41・42、53-91~94） 破片資料のみで器形全体を知ることのできる資料は出土していない。口縁部から頸部にかけての文様帯に横位の沈線文を数段にわたり施文し、その間に櫛歯状工具あるいは棒状工具による波状文を施す。中には横位の沈線文が太くなり凹線状を呈し、その中間には幅広の一条の波状文が施文されているもの（53-93）もある。このような文様構成のバリエーションは時間差を示すものと考えられる。

#### Ⅳ群 諸磯b式期（刈羽式）の土器

本遺跡出土土器群の主体を成すものであり、複数の系統が認められる土器群である。一般的に本型式は大きく古・中・新の三段階、さらに中段階において古・新に二分される（谷口 1989）。これと他地域の土器との併行関係を捉える研究も多くなされている。新潟県西部から長野県の北信地域にかけて分布すると考えられる刈羽式土器もその一つである。刈羽式は諸磯b式に概ね併行すると考えられている（中野 1997・1999）。本節でも諸磯b式系統の土器群と共に本群に含めた。器種構成は口縁部の開く深鉢形土器が多く、他にキャリパー形深鉢・縁孔土器・浅鉢形土器がある。これらはさらに文様構成から複数の系統が認められる。

1類 爪形文（11-45・46、18-54、28-70~74、35-56、40-22~33、45-11、52-84~86、77-15、78-13、100-4~7） 諸磯a式の爪形文の系統を引くものであるが、施文具が粗大化し、文様構成も曲線化の方向に向かうことが特徴とされる。器形は前段階同様に口縁部が開き気味に立ち上がる朝顔形を呈するものと思われる。口縁部形態は波状口縁を呈するものもみられる。曲線的な爪形文と共に円形刺突文を施すもの（28-74、78-13）も出土している。また、出土量は少ないものの口縁部から頸部にかけての文様帯に爪形文で鋸歯状のモチーフを描出すもの（11-45・46）も認められる。これらの諸磯b式古段階的な様相を呈するものに加え、後出するであろう爪形文間が隆起し、そこに繊細な刻み目を施すもの（18-54、45-11）もみられる。時間的にも若干の幅が認められる。また、全体的に爪形文が大型化・複雑化する中で前段階的な繊細な爪形文を施文するものも存在する。これらの土器は羽状縄文地の口縁部から頸部にかけて、2条1単位の幅狭の爪形文を直線的または弧状に施文するもの（40-22~33、52-84~86）である。この土器は長野県飯山市大倉崎遺跡に類例がみられる（金井 1999）。

2類 変形爪形文（135-5・18） 爪形文同様に半截竹管により施文するものであるが、竹管の両端を強調して押捺するためハ字状を呈する。本遺跡からの出土量は多くない。

3類 列点文（41-98、109-2） 数点が確認されており、刈羽式土器を構成する土器群であると考えられる（中野 1997）。全て破片資料のため全体の器形をうかがい知ることができない。文様構成は地文に縄文を施し、口縁部文様帯には横位の沈線文および棒状工具による横長楕円列点文を施文したもの（41-98）や竹管状工具により逆C字の刺突がなされるもの（109-2）がある。

4類 沈線文（40-36、117-4） ここで沈線文として分類したものは地文に縄文を施し、口縁部直下の僅かの文様帯に横位の沈線文を数条巡らすものを指す。後述する平行沈線文や集合沈線文とは系統を異にすると考えられる土器群である。本遺跡からの出土量は極めて少ない。Ⅱ群3類爪形文系土器群と共に刈羽式における沈線

文類（中野 1997）を構成する土器であると考えられる<sup>(注2)</sup>。

5類 格子目文（10-1～13、11-14～24、17-1～7、27-1～23、33-1～5、34-6～14、39-2～15、59-1、69-1～14、84-1～12）長野県において格子目文系の土器群の多くは、諸磯 a 式期の所産であるとされていた（樋口他 1976等）。しかし、格子目文土器の細分を試みその変遷過程を考察された寺崎氏の編年案（寺崎 1991）に従えば、当遺跡出土の格子目文系土器群には諸磯 b 式期のものと考えられる資料が数多く存在している。諸磯 b 式併行期の格子目文土器の文様構成は、竹管により格子目文を施し、その上下に同原体による平行沈線文を施すもの（27-1～6）または爪形文を施文するもの（17-1、27-7・8、33-7、34-13）が挙げられる。また、これらの平行沈線文による格子目文の描出に加え、一段階古い様相を呈する円形竹管等による平行沈線文の交差点または格子目文の空白部に円形刺突文を押捺するもの（17-2、27-15、39-9）もこの時期の特徴として挙げられる<sup>(注3)</sup>。これらの土器は寺崎氏の分類でいう A Ⅲ・A V・C Ⅱ・C Ⅲ 類型の土器群である（寺崎 1991）。これらの土器の中には口縁端部に 2 基 1 単位の乳房状突起が付くもの（69-1）や、口縁部付近に環状で刻み目を持つ浮線を張り付けてあるもの（84-2）等がみられる。また、これらの多くは口唇部に刻み目を有する。

6類 竹管条線文（41-103・104、52-78・79、83-23～26）器形は胴部が緩く張り、口縁部に向かい外反しながら立ち上がる深鉢形土器と考えられる。文様構成は口縁部から頸部屈曲部にかけて半截竹管により横位の沈線文を幾重にも施し、胴部には縄文を施すものと考えられる。口縁端部には刻み目が施されるもの、乳房状突起が付くものなどが出土している。本遺跡からの出土量は多くない。器形・文様帯の区画・施文具等の点で格子目文土器と垂直条線文系土器との類似点が認められる。しかし、口縁部文様帯における文様は前者が横位であり、後者が縦位であるという相違点がある。時間的に併行するものではない可能性が強い。

7類 垂直条線文（27-24～43、60-1・24・25・28～30、69-15～19、81-5～9）器形は格子目文土器や竹管条線文土器と同様の器形を呈するものと思われる。文様構成は格子目文土器に近似しており、格子目を竹管による直線的に垂下する沈線文に置き換えたものといえる。大倉崎遺跡等に類例がある。口縁部直下と頸部には横位の沈線文あるいは爪形文が施され、口縁には刻み目を施すもの（27-30～32、60-28～30）もある。垂下する沈線文間の幅にもバラエティーが認められ、間隔をあけて施文するもの（27-25、81-8・9）、間隔をほとんどあけず細密に施文するもの（27-24、69-15）などがある。これらの土器群とⅢ群の土器群は器形・文様構成・施文具・胎土等に多くの共通する要素が認められ、相互の連関性が想定される。同時期・同系統の中でのバラエティーとして認識できるものなのか、それとも同一系統における時間差によるものなのか再検討する必要がある。格子目文系土器群の中には左傾または右傾するどちらかの一方の沈線文が垂直になり、いびつな格子目を呈するもの（27-2、84-3）が認められる。また、垂直条線文を施文後、一条の横位の沈線文を巡らして格子目が長方形を呈すもの（27-26）などが少ないながらも存在する。これらの土器は格子目文土器における施文方法の簡略化に伴って生じた土器の可能性が考えられる。

8類 浮線文（16-4・5、18-58～73、28-79～81、53-107～114、85-29～33）諸磯 b 式中段階のメルクマールとなる文様要素である。器形はキャリパー形を呈するようになる。斜縄文または羽状縄文地に浮線文を施す例が多いようである。浮線文には細かい沈線文が描かれる場合もあり、本遺跡では矢羽状の沈線文が浮線上に施文されている。器形全体を窺知できるような資料は認められないが、第 3 号住居址からは靴先状を呈する口縁部付近の破片が出土している（16-4）。また、同住居址からはキャリパー形の浮線文系深鉢形土器の口縁部に獣面把手を張り付けてあるもの（16-5）も出土している。

9類 集合沈線文（61-55～63、81-15・18、128-4）本遺跡において出土した本類の土器は口縁部に向け

朝顔形に外反し、その後口縁部付近で極端に内屈する器形を呈するものが多い。また、4単位の波状口縁になると思われる土器がある(81-15)。集合沈線文系の土器としては新しい部類に入るものであろう。縄文地に平行沈線文を多数並列するもの(61-61~63、128-4)や器面全体に細かい沈線文を施すもの(61-55~60、81-15-18)が出土している。

10類 平行沈線文(19-78~90、41-96・97、51-28~37、59-3、89-7・8、110-10、111-24、115-5) 縄文および羽状縄文地に平行沈線により文様帯を区画し、さらに区画内にも沈線文により文様を施す。器形全体を窺知することはできないが、おそらく頸部から口縁部にかけて直線的または緩く外反して深鉢と考えられる。また、口縁部片を図上復元した土器(110-10、115-5)から口径が小さく比較的小型な土器が多く存在していたと思われる。文様構成は縄文または羽状縄文を地文とし、口縁部と頸部付近に横位の沈線文で文様帯を区画し、その区画内を沈線文で上下に向き合う対弧状文を施すもの(19-78~90、59-3)と凸レンズ状の曲線を縦位に施文するもの(41-96・97、51-28~37、89-7・8、110-10、111-24、115-5)の二種がある。後者は大倉崎遺跡で特徴的な土器群である。

11類 縁孔土器(9-3、16-6、32-4、50-1、51-10~13、59-6・8・9、68-2、93-13、128-1~3) ここで言う縁孔土器とは一般に有孔浅鉢あるいは特殊浅鉢形土器とよばれるものである。無頸壺を圧縮して平たくしたような器形で、口縁部付近を全周するように小穴を穿孔する。さらに有文ものと無文のものに細分した。

a種 有文縁孔土器(50-1、51-10) 当遺跡からこの種の良い資料が出土しており、全体の器形および文様構成をほぼ知ることができるもの(50-1、51-10)も数個体ある。器形は底部から胴部にかけて外反しながら立ち上がり腰部で屈曲した後、再び外反して最後に口縁部が内屈する。文様構成は器面全体に爪形文による幾何学文や三角文などを施し、縁孔および体部の屈折部付近に刻み目を持つ浮線を張り付けるもの(21-182・184・185、37-142~144、50-1)が多い。篋描沈線文のみ施されるもの(51-10、63-138)もある。口縁部付近の破片は多数出土しているが、胴部片では縁孔を施さない有文浅鉢形土器との判別が困難である。

b種 無文縁孔土器(9-3、16-6、32-4、51-11~13、59-6・8・9、68-2、93-13、128-1~3) 完形土器はないが、図上でほぼ完形に復元可能なものがいくつか出土している。器形は有文のものと同様であるが、口縁部がほぼ垂直に立ち上がり肩に張り出しがある器形(16-6、51-11、128-3)は、無文縁孔土器のみに認められる特徴的なものである。口縁部付近は全周する穿孔を施し、それを挟むように上下に浮線を貼り付けるもの(51-13、59-6・8)も多くみられる。口縁端部が内屈するものと直立屈曲するものがある。この形態の差異は時間差を示すものと考えられている(谷口1989)。この前期後葉諸磯式期の縁孔土器は中期に盛行する有孔罌付土器の祖形になるものとして以前から注目されてきた(武藤1970)。

12類 浅鉢形土器(9-4、26-2、32-1・3、51-9、59-5・10、68-3) 一般的に縁孔土器と縁孔を持たない土器を区別せず両者をもって当該期の浅鉢とすることが多い。本遺跡からは縁孔文土器と器形や文様構成を共有しつつも、口縁部付近に縁孔をもたないものが出土している。両者が系統を同じくするものか否かの問題については保留しておくが、機能においては一線を画することが想定される。この点を重視して縁孔土器と縁孔をもたないその他の浅鉢形土器とは区別しておく。当系統の土器として第5号住居址出土の土器(26-2)を抽出する。器形は底部から胴部にかけて強く外反しながら立ち上がり、頸部において内側に屈曲し、さらに口縁部にかけて外反しながら立ち上がる。口縁部はほぼ垂直に内面に向かって折れるように屈曲する。二段にわたる屈曲が認められる点では縁孔土器と同じだが、縁孔を持たない浅鉢形土器においては器形のシルエットがより直線的で、縁孔土器のように丸味を帯びていない。屈曲する口縁部には細いみみず腫れ状の浮線が直線的あるいは

ハ字状に描出されている。それ以外の部分は無文である。これと同様な器形を呈し、文様が有文縁孔文土器と同様の爪形文による入組木葉文が施文された浅鉢(32-1)も出土している。この土器は器形および文様構成において縁孔土器と酷似しており、縁孔を持たない点のみが相違点である。また、縁孔土器とは異なり腰部の屈曲がなくボウル状を呈するもの(32-3、59-5)、口縁部が外反し内側に屈曲しない器形になるもの(51-9)も出土している。器形が二段階に屈曲するものうち内屈する口縁部が厚く肥厚するもの(9-4)もある。

13類 縄文および羽状縄文のみを施文した土器(9-1・5、16-1~3、59-2・4、72-1、108-9・12・15・18・21、120-1) 縄文土器の中で量的に多くを占めたのが縄文または羽状縄文のみを施文した土器群である。胎土に繊維を含有するものは少なく、他系統の土器の出土量を鑑みても本遺跡では諸磯a式期以前の土器は少量であると推測される。また、住居址出土の土器群は時間幅があるものが多く、一括資料として抽出することができなかつたし、器形や文様構成要素からさらに細分することが困難であった。そのため便宜的に最も出土量の多い諸磯b式期に一括して含めた。なお、これらの土器群は格子目文や垂直条線文等と胴部下半に縄文を施す系統の土器も含んでいるものと考えられる。これが本類の土器の出土量が最も多い一つの要因であろう。出土量に比して器形を窺知できるものは少ない。図上復元できた資料からは頸部から口縁部にかけて内湾して立ち上がるもの(9-1)、胴部が緩く張り短い頸部を経て口縁部が外反するもの(16-1)、口縁部が朝顔形に外反するもの(9-5)等バリエーションに富む。口縁部をみても乳房状突起を有するもの(59-4)、刻み目が施されるもの(9-1)、棒状工具により矢羽状文が施文されるもの(16-2)、波状を呈するもの(55-177)等がある。文様構成は単節縄文・無節縄文・羽状縄文等が施文されているが、結節または綾絡状文が確認できるものは存在していない。縄文のみという比較的単調な文様構成をもちながらも、器形や施文方法および文様原体等にはバリエーションがあり、ある程度の時間幅が存在することを示唆する。層位的に確認できなかったこと、器形全体を窺知できるものが少ないことなどが惜しまれる。

#### V群 中期後葉の土器群

当遺跡においては大きく分けて前期後葉と中期後葉という二つの時期の土器が出土している。出土量からみれば前期後葉の土器が大部分を占めるが、中期後葉の土器も少なからず出土している。しかも複数の系統の土器型式が混在するという様相を呈しており、縄文時代中期の北信地方において地域間交流が頻繁かつ積極的に展開されていたことを示唆する。中期後葉の土器を大きく第V群の土器として捉え、さらに文様構成上の特徴からいくつかの系統に細別した。

1類 圧痕隆帯文(47-1、89-1、91-1、99-9、103-1、106-1、119-1・10・12、124-1・2、126-2・3) 全体を窺知できるものは第9号住居址の石囲炉より出土した土器(47-1)のみである。この土器は炉内から破砕して敷きつめられた状態で検出されており、復元すると緩く内湾する口縁部になる。縄文を地文とし、口縁部には下向きの隆帯渦巻文が巡り、その逆側の先端も渦巻状を呈する文様を胴部下半まで垂下する。隆帯は極めて低いものである。この他多くの土器も縄文地に刻み目を施した隆帯を貼付している。口縁部は若干開き気味に立ち上がるもの(106-1、119-1・10、126-2)と内湾するもの(47-1、89-1、91-1、103-1、124-1・2、126-3)の二種類の形態が認められる。

2類 加曾利E式系(47-2、89-2~6、91-6~8、94-42~48、95-51~70、98-4、99-11~13・15~28、104-16、132-11~26) 全体の器形および文様構成を窺知できる資料はほとんどない。細片から推定すると施文方法は隆起線文あるいは沈線文により無文帯と縄文施文帯とに区画され、これによりU字状文や逆U字状文を描出するものが数多く存在するものと想定される(89-2・3)。器形はおそらく胴部の張りが弱いキャリパー形を呈するものが多いと思われる。全体の器形を窺知できる資料は第9号住居址出土の埋甕(41-1)があ

る。緩やかなキャリパー形を呈し、器面にはわずかに縄文が残る。口縁部には1個の把手が付く。中期末の加曽利EⅣ式期のものであろう。注口土器(98-4)が1点出土している。図上復元すると口径は23.4cmを測る。頸部には隆帯が貼付され、これを境に口縁に向かい内湾する器形になる。隆帯以下は底部付近まで条線文が器面を全周するように施文されている。

3類 大木式系(47-3、102-7、130-14) 本類の土器群は加曽利E式系の土器群と同様に、文様構成は隆起線文または沈線文を用いて文様帯を区画し、区画内には縄文を施文するものが多いと考えられる。幅広の沈線S字文または蕨手文を施文するもの(47-1、130-14)もわずかであるが確認される。これらの土器群は加曽利E式系の土器との文様要素の共有が予測されるものの、細片資料に関しては型式の判別が困難であった。そのため本類の土器は嘴状突起等大木式の特徴を保有する土器(102-7)を抽出した。本来は大木式系統とすべき土器も加曽利E式系統の土器に含めてしまった可能性も否定できない。

4類 曾利式系(99-10) 1点のみの出土である。雨垂れ状の短沈線文が施文されているが、細片のため器形および全体の文様構成をうかがうことは困難である。

これまで松ノ木田遺跡の出土資料を基に細分し、すでに組み立てられている編年に沿って資料の帰属時期について検討を加えてきた。相対的にみれば縄文・羽状縄文のみの土器の出土量が圧倒的に多い。しかし、格子目文系土器・有文縁孔土器等は検出された住居址全てから出土しており、出土土器は多系統にわたる。住居址に確実に伴う一括資料の抽出や層位論的な検討はできなかったものの、土器という媒体を通じて北信地域における縄文時代前期の地域間交流の様相について一端を垣間見ることができると考える。この点に関して本遺跡より出土した土器を分類し、編年の位置づけを検討した際に明確になった特徴・問題点等を記してまとめたい。

近年精力的に細分・編年案が議論されている北陸地方海岸部に分布の中心を置く刈羽式土器の内容を検討すると、本遺跡出土の資料と多くの類似点が存在することがわかる(中野 1997・1999)。しかし、同時に本遺跡では刈羽式の主要な構成要素である隆起線類の土器が欠落している。列点文類は数点のみで、沈線文類・爪形文は一定量出土しているにすぎない。このように刈羽式の一部の土器が認められるものの、完全にその型式内容と一致するものではない。この点は大倉崎遺跡においても指摘できる特徴である。一方、刈羽式を構成する系統の一つである格子目文系の土器は、本遺跡でも主体的に出土している。一時期における土器の多さに加え前期後半刈羽式期を通じて通時的に存在していたことが推測される。出土資料を検討しても格子目文土器に関しては数段階の変遷過程想定することが可能なようである。ここでは大きく諸磯a式期のものとb式期のものに分類したが、格子目の施文方法等を鑑みればb式期の中でもさらに数段階の変遷が認められるようである。

刈羽式を構成すると考えられる土器群が確実に存在しているが、各系統の土器を全て採用しているわけではない。つまり格子目文系・沈線文類の一部・大倉崎類型(中野 1999、注4)とよばれる土器群等は、本遺跡における土器の構成要素として存在している。その他の刈羽式の各系統は土器群構成要素ではなかったとよいだろう。その代わりに相対的出土量は少ないが、諸磯b式土器を構成する浮線文・爪形文・集合沈線文等を積極的に取り入れたようである。しかし、これらの各系統の土器は必ずしも諸磯b式土器を通じて変遷過程を把握できるものではなく、断片的な資料にとどまっている。つまり刈羽式土器圏内に位置しているものの、諸磯式期の直接的影響が強かった当該地域では、両者の土器文化をその都度選択しながら独自の土器文化を形成していたものと考えられる。この点は同一土器文化圏内における小地域性・土器圏内の縁辺部における情報伝達の度合い・型式間交渉の実態等に関して重要な問題を提起するものと考えられる。同じ北信地域である大倉崎遺跡では集合沈線文は存在しているものの浮線文・爪形文ともに主要な土器群の構成要素として存立していたとは考え難い。一言



に北信地域といっても他地域との相関関係およびその影響の度合いは大きく異なる。このことも当該地が近隣地域からの複数の土器型式の影響下にあり、まさに土器文化の折衝地帯にあったことを物語るものであろう。

本遺跡出土土器の様相でもう一つ大きな特徴としてあげられるのが、縁孔土器・浅鉢形土器の出土量の多さである。有文縁孔土器にいたっては全ての前期住居址から出土している。これらの土器のバリエーションも複数存在していたようであり、縁孔土器・浅鉢形土器においてそれぞれの系統が存在していて可能性が高い。これらの系統別変遷過程および編年の位置づけに関しては今後の課題としたい。ここでは本遺跡出土の縁孔土器・浅鉢形土器の特徴について再度述べておきたい。まず、①出土量が多く、完形およびほぼ完形にまで復元できる資料が多数存在している。②同様の器形および文様構成をもちながらも縁孔を施すものと施されないものが存在している。③縁孔土器・浅鉢形土器は住居址から出土し、ほぼ完形にまで復元できた資料の中でその大部分を占める。①に関しては前期後半の全ての住居址から少なからず出土をみており、小破片を含めれば遺跡全体においても主体的に出土している系統の一つといえる。これが単に長期的にわたる人間の生活活動の産物であるのか、それとも土器あるいは遺跡自体が特殊な機能をもっていたためなのかは更なる詳細な検討が必要である。この点において良好な縁孔土器・浅鉢形土器を出土している住居址からは挾状耳飾をはじめ、玉類等の特殊な遺物が出土する傾向にあることに注目したい。現時点では推測にすぎないが、この点を留意すると縁孔土器・浅鉢形土器の出土量の多さは後者の理由で説明される可能性が高い。②については系統論および機能論の両視点から検討していく必要がある。本遺跡においても口縁部片から推測する限り縁孔をもたない浅鉢形土器は有文縁孔土器に比べその出土量は多いとはいえない。しかも、出土状況等からはこれらの土器が異なる機能を有していたのかそれとも単なる文様要素のバリエーションの一つなのかを判断することはできない。そのためこの問題に関しては結論を急がず同様の類例を集め、それらの資料も含めて検討する必要がある。③に関しては出土量からみれば縄文・羽状縄文のみの土器が多いにもかかわらず、図上復元し器形の大部分を窺知した資料は縁孔土器・浅鉢形土器が最も多い。しかもこれらの資料の中には住居址よりまとまって出土したものが多く存在している。これはその他の出土遺物の特性にも関連して、その機能について何か実用的な使用方法以外の用途の可能性を示唆する。

また、本遺跡において出土した土器群の中で、他地域との交渉の中で発展した北信地域の独自の土器として抽出すべき土器群が存在していた可能性も否定できない。垂直条線文や竹管条線文として分類した土器群については、その系統論的位置づけは明確にすることができなかった。今後の課題としたい。

以上、本遺跡の諸磯b式期における土器の様相について述べてきた。これらの土器群の分類と編年の位置づけの検討の過程で格子目文土器の出自、垂直条線文・竹管条線文の編年の・系統論的位置づけ、長野県下における縁孔土器・浅鉢形土器の層位による変遷過程の検討、周辺地域との土器文化における交流の実態等をはじめ解明すべき多くの問題が残っていることを再確認した。今後再度検討すべき課題を多く残した形となったが、今回報告した資料および情報が縄文時代前期後半の土器研究の一助なれば幸いである。 (山下大輔)

注1 寺崎氏は「この段階設定はただ単に文様の変化における段階設定であり、時期細分を表すための段階設定ではない。」(寺崎 1991)と述べられている。ここで述べられている変遷の段階と時期細分の段階が必ずしも対比されるものではないことは留意せねばならない。

注2 中野氏はここで爪形文土器とした土器群も含めて沈線文土器として分類している(中野 1997)。爪形文を施す土器群は凹線文および平行沈線文を施すものと同様に沈線文類の一つのバリエーションとして捉えられている。断定はされていないものの、これらのバリエーションは系統内の時間差に起因するものであると推測されている。

注3 寺崎氏のいうAⅢ類はその帰属時期において諸磯a～b式古段階までと広範にわたる(寺崎 1991)。しかし、氏

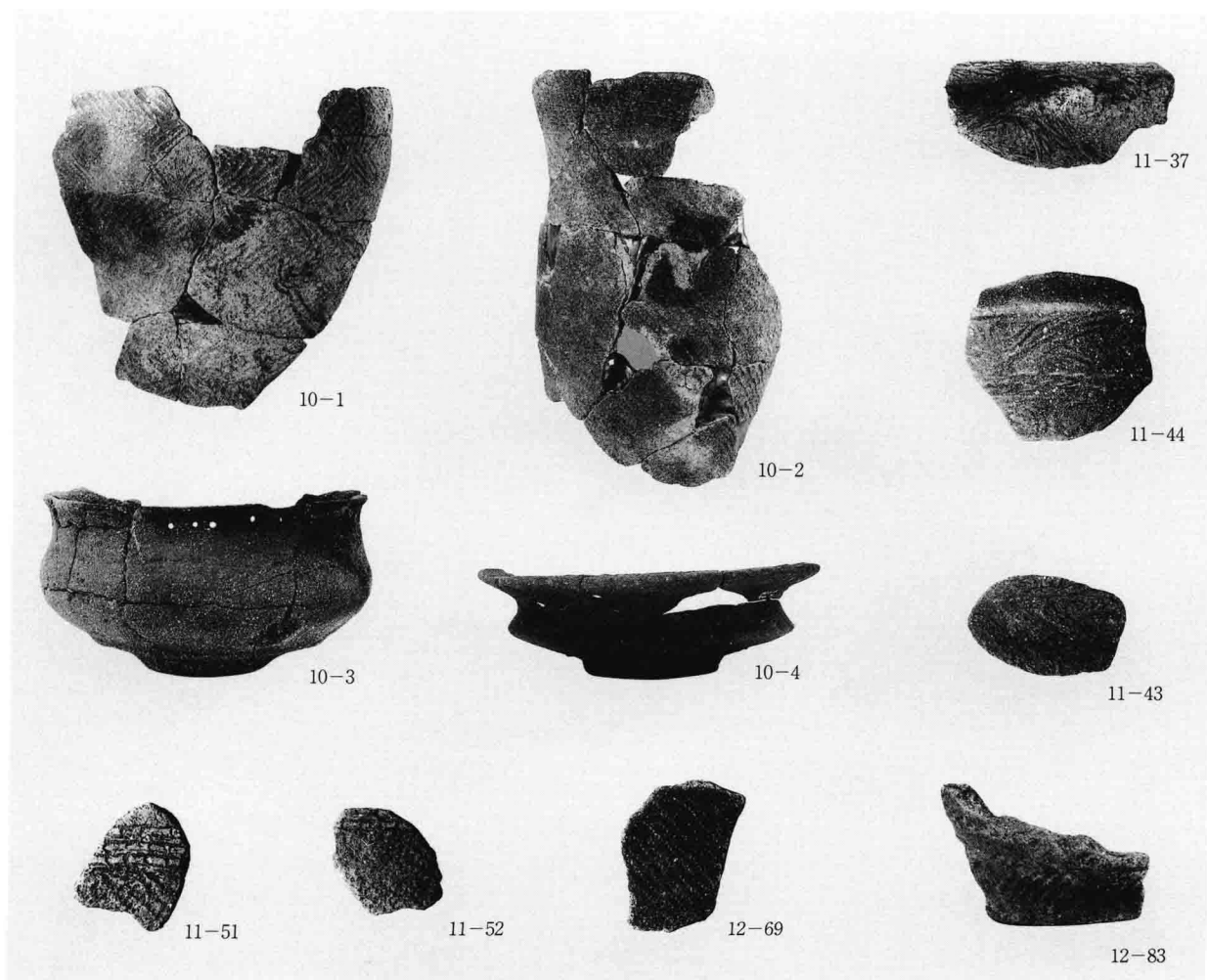
も指摘しているように、この類型の土器群に関して諸磯 a 式との共伴関係が想定されているのは新潟県豊原遺跡のみであり、他の遺跡においては諸磯 b 式古段階に共伴している。さらに本遺跡における各時期の土器の出土量をみても、その主体となるのは諸磯 b 式期のものである。これらのことから当類型は諸磯 b 式のもものと理解した。

注4 ここていう大倉崎類型とは本遺跡出土土器のうち10類に分類した土器の中で、大倉崎遺跡で出土した縦位の弧線を用いた凸レンズ状文を施文する土器群を指す。今回10類として分類した平行沈線文系土器群の中には、この大倉崎類型に加え横位の沈線文により文様帯を区画し、その中に横位・縦位の対弧条文を施文するものも含まれている。しかし、この土器群は類例が少なく新潟県古町B遺跡27号住居址出土土器の中に1点認められるようである(寺崎 1997)。そのため同類として分類しているもの大倉崎類型に含まれるものではない。

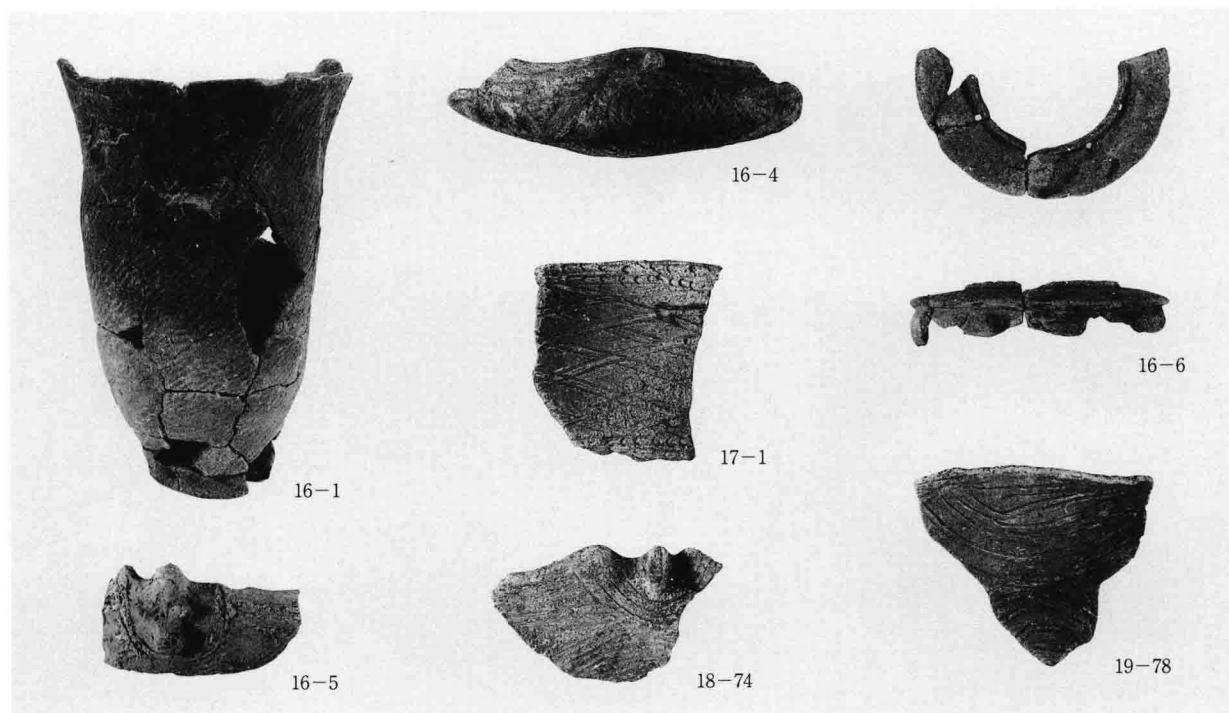
#### [引用・参考文献]

- 赤塩 仁 1996「諸磯 b・c 土器の変遷過程」『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 大場磐雄 1956『信濃史料』1 巻上・下 信濃史料刊行会
- 金井正三・太田文雄 1978『牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書』牟礼村教育委員会
- 金井正三 1979「縄文時代前期の特殊浅鉢形土器について」『信濃』31-4
- 金井正三 1999「信州の土器と大倉崎遺跡出土の土器」『第12回縄文セミナー 前期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 神田五六 1951「長野県下水内郡豊井村南大原縄文諸磯式遺跡概報」『信濃』3-8
- 鈴木敏昭 1980「諸磯 b 式土器の構造とその変遷」『土曜考古』2
- 鈴木徳雄 1996「諸磯 b 式の変化と型式間交渉—文様変化の継起的累積性と型式間関係の諸相—」『縄文時代』7
- 高橋 桂・中島庄一・金井正三 1976「北信濃大倉崎遺跡発掘調査報告」『信濃』28-4
- 谷口康浩 1989「諸磯式土器様式」『縄文土器大観 1 草創期・早期・前期』小学館
- 檀原長則他 1991『立ヶ花遺跡』中野市教育委員会
- 寺崎祐介 1991「縄文時代前期後半の格子目土器について」『新潟考古学談話会会報』8
- 寺崎祐介 1997「吉川町古町B遺跡について—長野県大倉崎遺跡との比較検討」『新潟考古学談話会報』17
- 寺崎祐介 1999「新潟県における縄文時代前期の土器—その標識資料と編年—」『縄文土器論集—縄文セミナー 10周年記念論文集』
- 中野 純 1997「刈羽式土器の再検討—型式間交渉の分析による試論—」『新潟考古学談話会会報』17
- 中野 純 1999「新潟県における縄文時代前期の後半の土器群」『第12回縄文セミナー 前期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 樋口昇一他 1976『上原』長野県教育委員会
- 武藤雄六 1970「有孔罎付土器の再検討」『信濃』22-7
- 百瀬新治 1982「阿久遺跡をめぐる問題」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村その5』
- 百瀬新治 1988 a 「縄文前期の土器」『長野県史 考古資料編』全1 巻(4)長野県史刊行会
- 百瀬新治 1998 b 「長野県内の諸磯 b 式土器—新資料の整理と編年の検討—」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
- 綿田弘実 1988「北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2

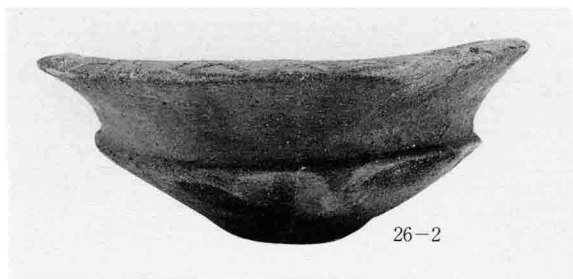
1号住居址



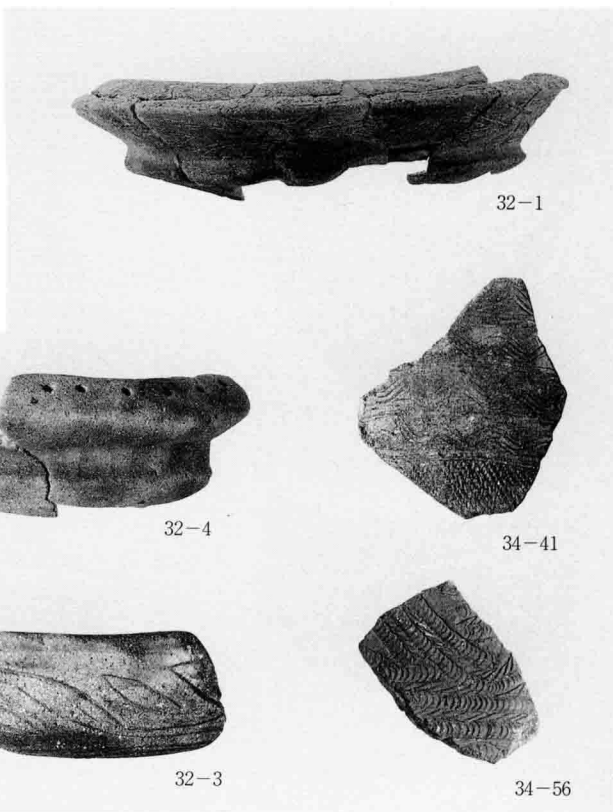
3号住居址



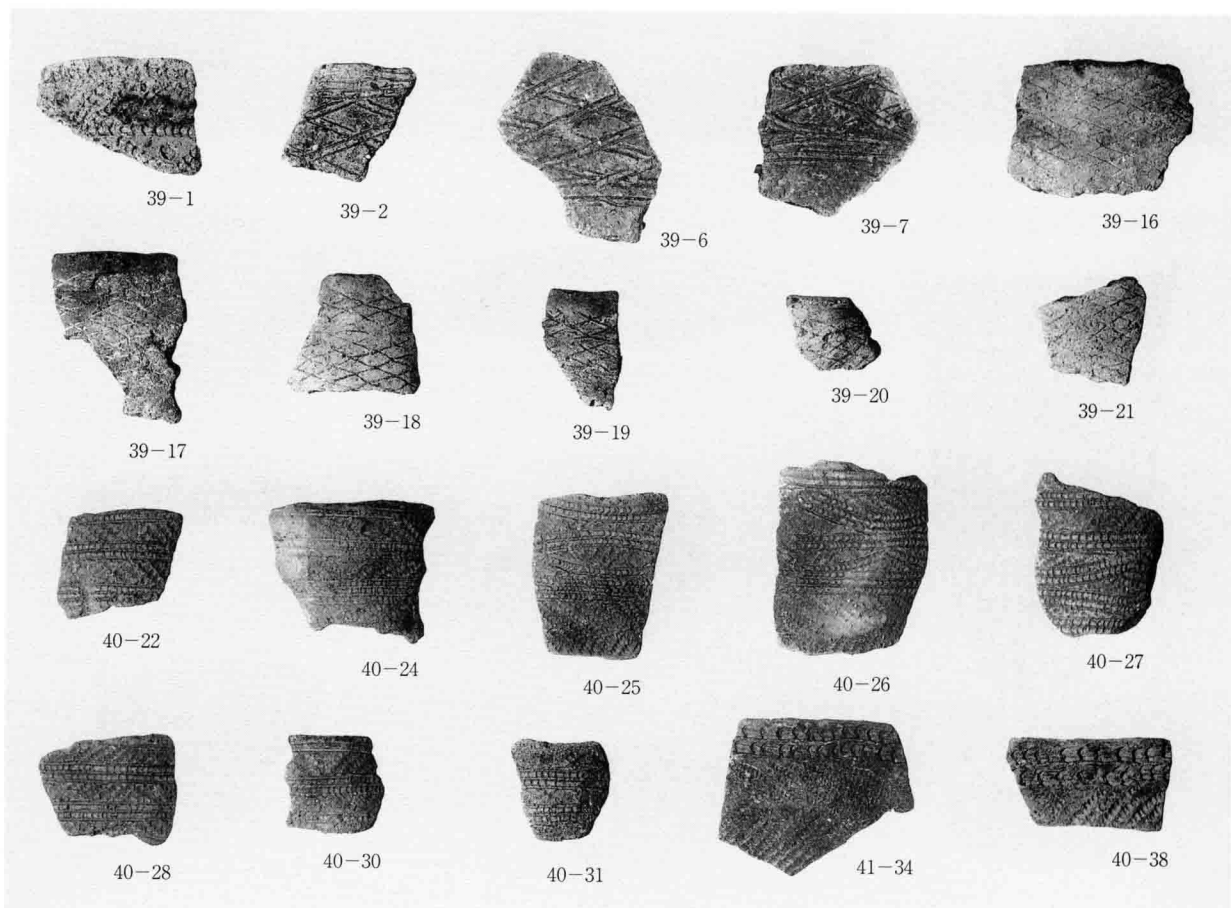
5号住居址



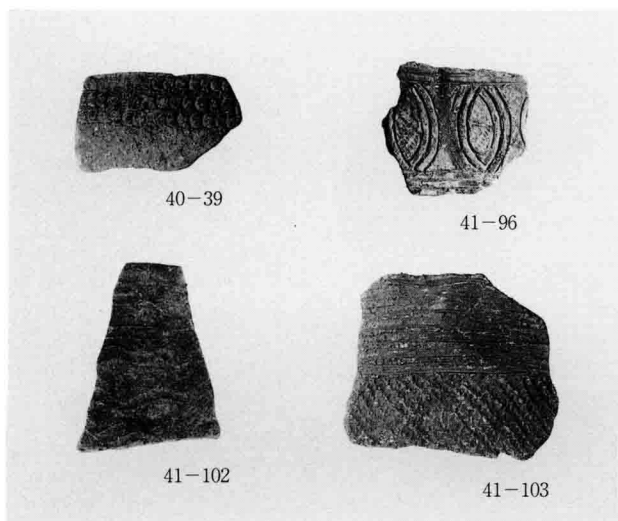
6号住居址



7号住居址



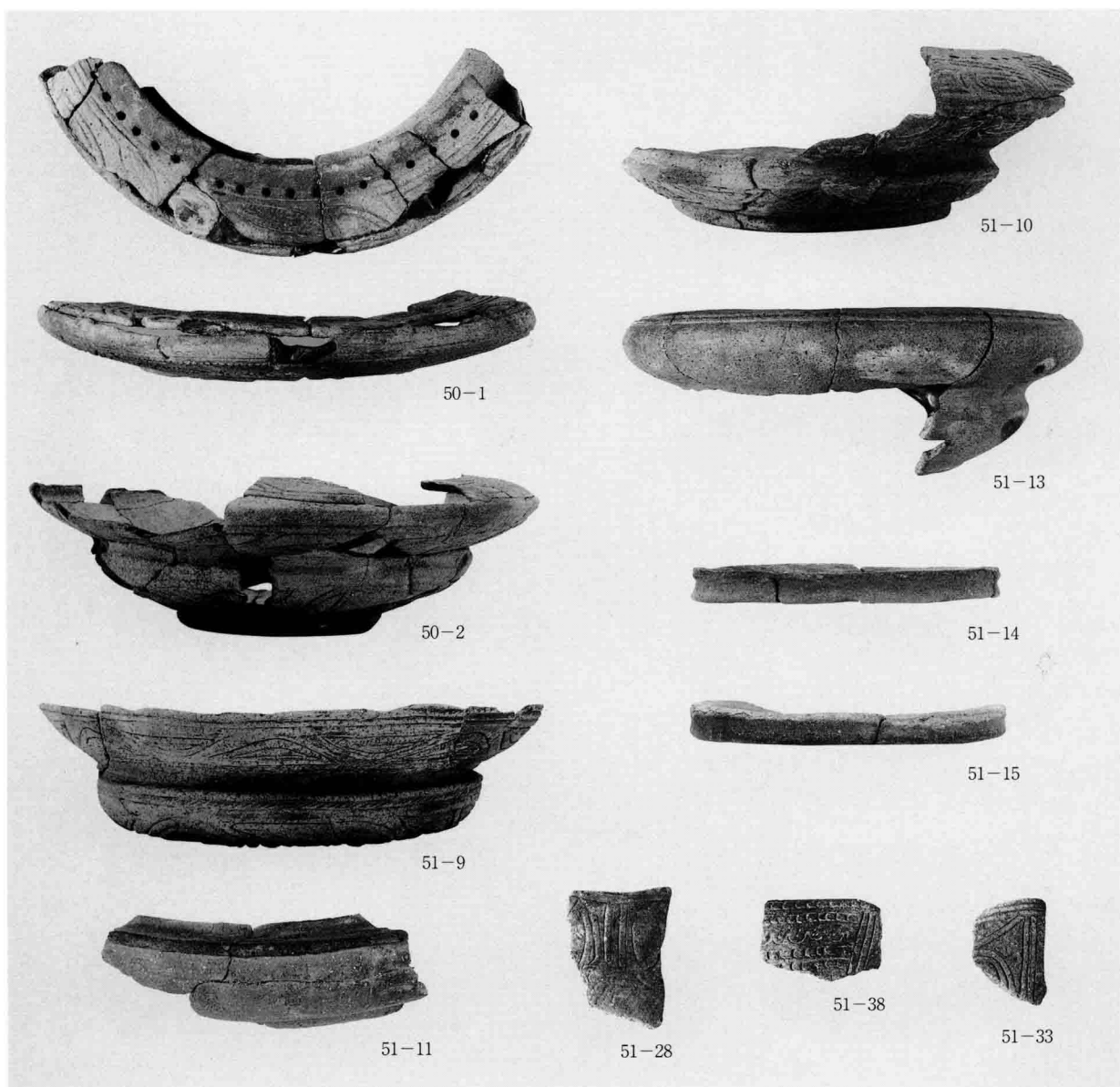
7号住居址



9号住居址

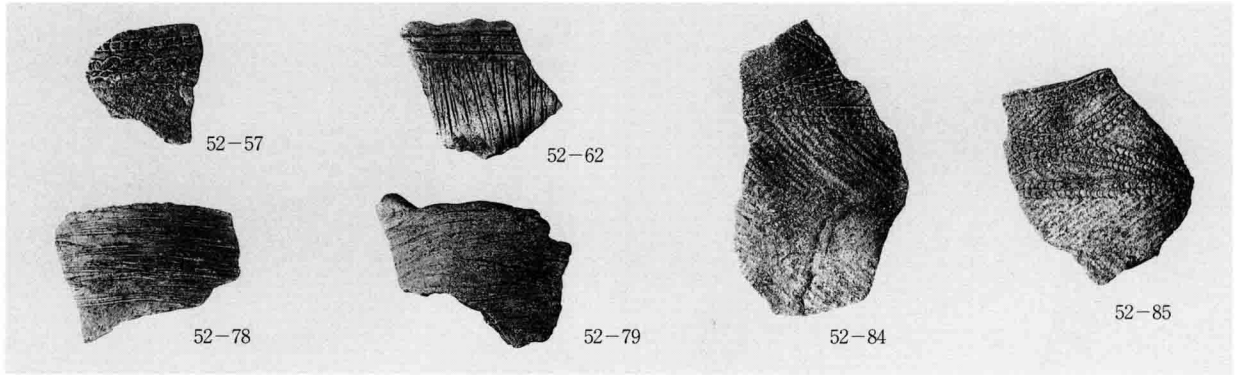


10号住居址

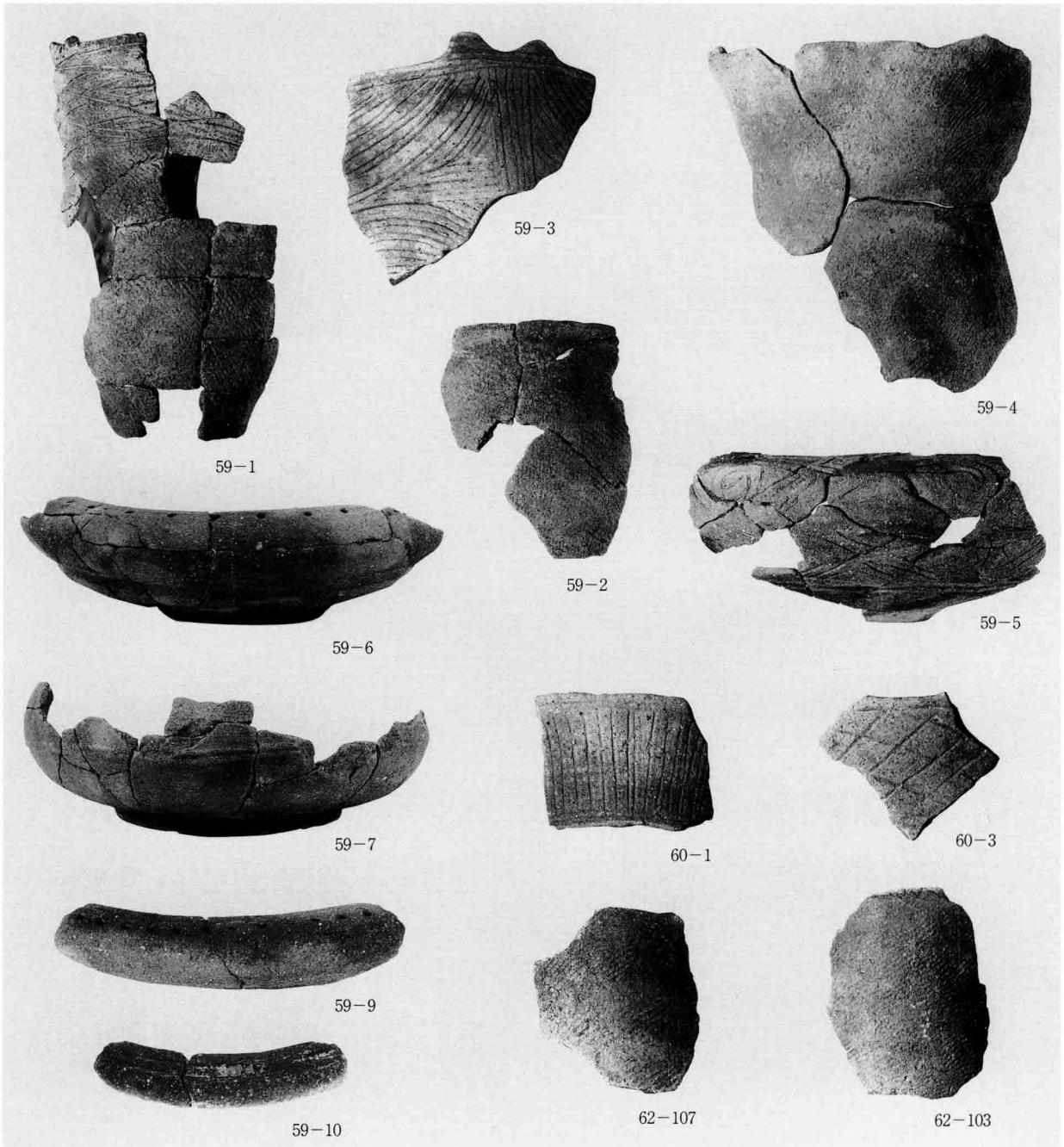




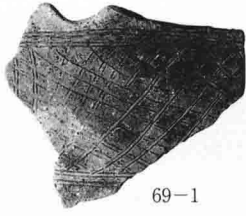
10号住居址



11号住居址



13号住居址



69-1



69-2



69-3



69-14

19号住居址

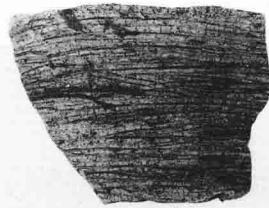


85-15



81-19

20号住居址



85-23

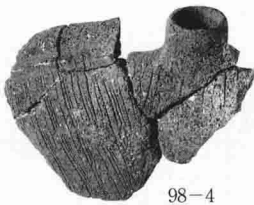


84-1



85-29

10号土壙



98-4



99-8



99-9



99-10



94-15

27号土壙



119-1



119-2



119-5



119-19



119-10

37号土壙



128-1



128-3



128-2



128-5



128-4

## 第2節 石器の様相

出土した石器群は石鏃252点、石鏃未製品100点、尖頭器7点、石錐74点、石匙134点、削器93点、三脚石器4点、異形石器3点、打製石斧187点、磨製石斧59点、磨石・凹石・敲石8点、石皿54点、石棒1点、砥石5点、多孔石2点である。石核・剥片の点数は正確に把握していないが、大形の石核15点、小形の石核32点と多数の剥片が確認され、遺跡内で剥片剥離を行っていることが確認できる(表2)。これらの石器群は、伴出した土器により、縄文時代前期諸磯b式と中期庄痕隆帯文土器に伴うものが混在している。しかしながら、主体となる土器が前期諸磯b式併行期のものであることから、石器の多くも前期に属するものと考えられる。また、器種別の石材組成を3表に示した。

### (1)石 鏃 (1~118)

252点出土した。有茎石鏃は図示した6点(113~118)のみで、多くは無茎石鏃である。無茎石鏃の多くは凹基鏃であり、平基鏃は112などわずかである。図示していないもので平基のものも見られるが、石鏃未製品とすべき不整形なものがほとんどである。安山岩103点、黒曜石70点、チャート48点、珪質頁岩8点、玉髓4点、凝灰岩1点、不明18点である。また、(勲)長野県埋蔵文化財センターの協力により、沼津高等専門学校の望月明彦氏に依頼し、蛍光X線分析による黒曜石産地推定を行ったところ、和田鷹山群40点、諏訪星ヶ台群16点、和田芙蓉ライト群4点、和田土屋橋西群1点という結果を得た。

写真図版には比較的整った形で、全体の形状が想定できるものを掲載した。未掲載のものは大きく欠損したものや不整形で石鏃未製品との区別が困難なものが含まれる。1~54・115は安山岩、55~73・117は黒曜石、74~98・102・106・113・114・116はチャート、99・100・は玉髓、101・103~105・118は珪質頁岩、107~110は石材不明である。石材不明の中には石鏃未製品、石匙などに同じ石材のものがある。

有茎石鏃は長野県北部では後期に一般化する形態であり、共伴する土器型式の検討が必要である。114は第18号住居址、115は第45号土壌より出土しており、これらは前期の土器のみが出土している遺構である。他の4点は中期の土器が出土する遺構または包含層の遺物であり、中期以降の石鏃である可能性が高い。

### (2)石鏃未製品 (119~155)

100点出土した。いずれも両面加工が施されており、不整形のもの、長楕円形に加工されたもの、先端を作り出したものなどのいくつかの形態が認められる。すべてが石鏃の未製品ではなく、別個の器種を含む可能性があり、器種認定を再検討する必要がある。チャート40点、安山岩29点、黒曜石21点、珪質頁岩2点、流紋岩3点、凝灰岩1点、不明4点である。石材組成は石鏃とほぼ一致する。

第5号住居址(7点)、第10号住居址(8点)、第11号住居址(8点)、第12号住居址(7点)、第13号住居址(6点)、第19号住居址(5点)で点数が多い。いずれも前期諸磯b式併行期であり、石鏃未製品としたものの多くは前期に属する石器であると判断できる。119~137がチャート、138~144・146~149が安山岩、145が珪質頁岩、

表1 石鏃の黒曜石産地推定

出土地点	和田鷹山群	和田土屋橋西群	和田芙蓉ライト群	諏訪星ヶ台群	推定不可	非黒曜石	合計
S B01	2						2
S B03	4			1			5
S B05	2			1			3
S B05・06	1						1
S B06		1	1				2
S B07	4						4
S B08			1				1
S B11	6		1	4			11
S B12	1			2			3
S B15				1			1
S B16	1						1
S B17	5						5
S B19				1			1
S K22				1			1
S K5			1				1
S K8	1					1	2
遺構外	13			5	1		19
合計	40	1	4	16	1	1	63

150・151が不明、152～155は黒曜石とおおむね石材別に掲載した。

### (3)尖頭器 (156～162)

7点出土した。159は黒曜石、160は頁岩、他はすべて安山岩である。156は基部の形態により、旧石器時代から縄文時代草創期の尖頭器とは異なった形態である。157は安山岩製の有茎尖頭器で厚さ12.6mmと厚く、156に比べ雑な作りである。158・160は大形、162は中形、159・161は小形で旧石器時代から縄文時代草創期の尖頭器と区別することが困難であるが、160以外は縄文時代前期の遺構内より出土しており、これらの尖頭器が縄文時代の遺物である蓋然性が高い。

### (4)三脚石器・異形石器 (163～169)

163～166が三脚石器、167～169は異形石器である。163～165・167がチャート、166・169が黒曜石、168が安山岩である。169以外はすべて前期の竪穴住居址より出土しており、特に三脚石器は諸磯b式期の遺物であると判断できる。168は欠損しており原形が不明である。

### (5)石 錐 (170～212)

74点が出土した。石匙の一部に錐部を作り出した特殊な形態の石器が3点出土したが、これらは石匙に分類した(246～248)。安山岩36点、チャート23点、珪質頁岩7点、黒曜石3点、玉髓2点、石材不明2点である。

170～183・212が安山岩、184～198がチャート、199～205が珪質頁岩、206～208が黒曜石、209・210が玉髓、211は石材不明である。これらの石材はすべて前期の住居址から出土しており、上記の石材組成が前期諸磯b式併行期の石材利用の特徴を示していると考えられる。石錐は以下の4形態に分類できる。すべての形態が前期諸磯b式併行期の竪穴住居址から出土している。

I類：頭部と錐部が明瞭に区分され、長い棒状の錐部があるもの。14点出土(170～173・188～190・199他)。

II類：頭部と錐部に区分され、錐部がI類に比べ短く、棒状ではないもの。27点出土(175・177～179・191～198・203・204・206他)。

III類：全体が棒状の形態で、頭部が明確に区別されないもの。16点出土(174・176・184～187・200・202・207～209他)。

IV類：素材剥片の形状を残し、頭部と錐部の区分が明確でなく、先端部のみを作り出し錐部としたもの。13点出土(182・205・212他)。

この他に分類不能が4点出土した。また、上記分類各類の中間的な形態もあり、明瞭には区分されないものも存在する。

201は石匙のような抉りのあるつまみ部が作り出された特異な形態である。176・182は錐部先端に磨耗痕が認められる。

### (6)石 匙 (213～280)

4点出土。安山岩87点、珪質頁岩23点、チャート14点、頁岩3点、下呂石1点、石材不明7点である。安山岩としたものは、表面が風化して変色したものを含む。内部は緻密な黒色の石材で、打製石斧で黒色の頁岩としたものに類似するものも含んでいる。安山岩と頁岩の分類はあいまいな部分があり、打製石斧など大形剥片石器と一部共通した石材を用いていると思われるが、安山岩と頁岩の区別が明確にできなかったのであいまいなものはすべて安山岩とした。213～223がチャート、224・225・255が頁岩、226～228が石材不明、229～248が珪質頁岩、249～254・256～258・260～280が安山岩、259が下呂石である。下呂石以外の石材はすべて諸磯b式併行期の竪穴住居址から出土している。石匙は平面形から以下の10形態に分類した。また、刃部の断面形には、片面加工の片刃(a種)、両面加工の両刃(b種)、両面加工の片刃(c種)、剥片の縁辺をそのまま刃部としたもの(d種)の

4種類が認められる。a種の片刃の中には搔器的な刃角のもの(242・245)が認められる。

I類：平面形が左右対称な三角形を呈し、刃部が直線的なもの。42点出土(213～215・224・226・229～233・235・264～267・269～273・275～278・280)。刃部形態はa～dのすべてがみられるが、a種が30点、b種が5点、c種が5点、d種が1点である。

II類：平面形が左右非対称な三角形を呈し、刃部が直線的なもの。18点出土(216・217・237・242・243・252・253)。刃部形態は、a種が16点、b種とd種が各1点である。

III類：平面形が左右対称な三角形を呈し、刃部が外湾するもの。28点出土(218～220・225・227・241・257～263・274・279)。刃部形態はa種が20点、b種が6点、c種が2点である。

IV類：平面形が左右非対称な三角形を呈し、刃部が外湾するもの。14点出土(222・223・249・250・254・255)。刃部形態はa種13点、b種1点である。

V類：縦長のもの。3点出土(244)。刃部形態はa種が2点、b種が1点である。

VI類：刃部と肩部がほぼ並行し、平面形が方形または楕円形を呈するもの。6点出土(221・234・251・256)。刃部形態はa種が5点、b種が1点である。

VII類：極端に小型のもの。3点出土(268)。刃部形態はa種が1点、b種が2点である。

VIII類：棒状の錐部を有するもの。3点出土(246～248)。刃部形態はすべてa種であるが、錐部は両面加工により作出されている。

IX類：剥片の形状をそのまま利用し、平面形が不定形なもの。7点出土(228・236・238～240・245)。刃部形態はすべてa種である。

X類：つまみの挟りが不明瞭なもの。6点出土。刃部形態はa種が4点、b種とc種が各1点である。

上記のすべての形態が諸磯b式並行期の竪穴住居址より出土しており、これらのすべての形態が前期の所産であることが確認できる。

#### (7)打製石斧(281～316)

187点出土。石材、素材の形状、石器の形態、欠損状況、刃部の磨耗について観察し結果を示す。

**石材**：183点が頁岩、安山岩2点、石材不明1点である。頁岩は表面が灰色に風化したものとあまり風化せず黒色のものが混在するが、いずれも内部は黒色である。表面が灰色に風化したもの162点、黒色のもの20点であり、表面が風化し変色しているものが大半を占める。

**素材の形状**：多くのものが横長もしくは大形の貝殻状の剥片を素材としているが、扁平な楕円礫を素材としたものも認められる。また、自然面があるものは11点と少なく、原石の大きさと形状を復元できる資料を得ることはできなかった。自然面は滑らかな面を有しており、河原から採取されたものと思われる。この他に節理面を有するものが13点みとめられ、河原礫ではなく、岩山から直接採取した可能性も考慮したい。石器の形態・形状と大きさにより以下の3形態に分類する。

I類：いわゆる短冊形と撥形のもので、幅が4cm～5cm以上の相対的に幅広で大型のもの。145点出土(281～304・314～316)。

II類：いわゆる短冊形と撥形のもので、幅が4cm～5cm以下の相対的に細長く小型のもの。25点出土(305～309)。

III類：胴部に挟りが認められるもの。8点出土(310～313)。

なお、欠損により形態分類が不能なものが、9点出土している。

**欠損状況**：欠損状態を、以下の5種に大別した。完形のもの44点、基部を欠損するもの66点、刃部を欠損する



もの45点、胴部のみのももの20点、その他の破片12点である。

**刃部の磨耗：**磨耗痕はⅠ類～Ⅲ類のすべての形態に見られる。長軸の端部に磨耗が認められるものが87点ありそのうち両端部に磨耗痕が認められるもの(291・299・309)が4点存在する。完形品の44点中、30点に磨耗が確認され、大半はどちらか一端に磨耗痕が認められる。磨耗痕跡は剥片剥離によるくぼんだ部分にも及んでいるが表裏両面が均等に磨耗したものと、どちらか一面が特に顕著に磨耗したものがある(刃部拡大写真)。顕著な磨耗痕には長軸方向の線状痕が見られる。また、磨耗痕を切る剥離が認められるものが53点認められ、頻繁に刃部再生が行われていたことが伺われる。なお、磨耗としたものの中に例外的に突出部のみが磨耗しており、平坦な砥石で研磨したと判断できるものもある(309)。これなどは局部磨製石斧である可能性がある。刃部の他に側縁部に磨耗痕が認められるものがある。側縁部の稜の磨滅は刃部付近に限られるものから、基部の側縁に及ぶものまでさまざま、柄の装着方法や使用法の違いが想定できる。

**出土状況：**187点中遺構内より35点出土している。他の石器に比べ遺構内の出土率が低く、中期以降の打製石斧が多く含まれている可能性がある。遺構内出土35点のなかには中期の竪穴住居址や土坑が含まれており、前期の竪穴住居址から出土したものは11点(302)である。この11点の形態はⅠ類が8点、Ⅱ類が1点、分類不能が2点である。出土状況からは前期の打製石斧は非常に少なく、中期の打製石斧が多数含まれていると考えられる。

#### (8) 削 器

93点出土。剥片縁辺の連続的な調整加工により刃部を作り出しているものをスクレイパーとした。安山岩製のスクレイパーの中には、いわゆる横刃型石器に分類しうる大形の石器も10数点含まれている。

安山岩69点、チャート15点、珪質頁岩2点、黒曜石2点、流紋岩1点、石材不明4点である。安山岩としたものには、黒色の頁岩が含まれていると思われるが、明確に区分できない。打製石斧の黒色の頁岩と類似した石材も含まれており、打製石斧と石材が共有されるものが含まれている。

#### (9) 二次加工がある剥片

定形的な石器ではないが、加工が認められる剥片である。不定形の石器、未製品・失敗品などが含まれる。石器の抽出が不十分であるため、石器組成の集計はしていない。剥片と石器の分類を十分おこなった第3号住居址では22点が確認されており、遺跡全体では多量の二次加工がある剥片が含まれていることが想定される。

#### (10) 磨製石斧 (317～347)

小破片を含めて59点出土した。蛇紋岩40点、凝灰岩3点、安山岩1点、玉髓1点、砂岩1点、石材不明13点である。完形品が14点、基部欠損が18点、刃部欠損が18点、その他の破片などが9点である。刃部は両刃のものが多いが、Ⅰ・Ⅲ類の中に片刃のものが認められる(317・321・322・327・328)。大きさと形状により以下の8類に分類した。

**Ⅰ類：**長さ5cm、幅1.5cm以下の小型の磨製石斧。6点出土(317～322)。側面が平坦になるもの(317～320)と平坦面を持たないもの(321・322)がある。317～319は擦り切り技法の痕跡が確認される。

**Ⅱ類：**長さ5～7cm、幅2～2.5cmの小形で、基部が尖った形態のもの。3点出土(323～325)。側面が平坦になる定角式(324・325)と側面に平坦部がないもの(323)がある。

**Ⅲ類：**長さ7cm前後、幅2.5～3cm程度で、二側縁が並行に近い形態のもの。4点出土(326～328)。いずれも側面が平坦になる小型の定角式である。

**Ⅳ類：**長さ6.5～9cm、幅3～4cm程度、厚さ1.0cm前後の中形で薄手のもの。7点出土(329～333)。いずれも側面に平坦部が認められる中型の定角式である。331には磨り切り技法の痕跡が認められる。330は基部端部に研磨による平坦面が作出されている。

V類：欠損品のみで長さは不明であるが10cm以上と推定され、幅4～5cm、厚さ2～3cm程度の大型の定角式石斧で、基部端部に平坦面が作出されているもの。2点出土（342・343）。343の基部端部は顕著な敲打痕が認められる。342が中期の土器が出土した土坑（SK6）、343は検出面から出土しており、これらは中期の石器である蓋然性が高い。

VI類：長さ9cm以上、幅4cm～5cm、厚さ2～3cm程度の大型の定角式石斧で、基部の平坦面が作り出されないもの。21点出土（334～339・341）。334は磨り切り技法の痕跡が認められる。

VII類：長さ15cm以上、幅6cm以上、厚さ3cm前後の特に大型の定角式石斧。5点出土（345～347）。

VIII類：乳房状磨製石斧。2点出土（340・344）。344は基部のみである。石材は不明であるが、乳房状磨製石斧に多くみられる緑色岩である。340も同じ石材であり、乳房状磨製石斧である可能性がある。340は前期の第18号住居址から出土しており、VIII類が前期に属する可能性がある。

上記の分類でV類以外は、諸磯b式併行期の遺構より出土しており、いずれも前期の石器と考えられる。

#### (1)石核

47点出土した。拳大以上のものを大型、鶏卵大以下のものを小形とした。小形の石核はすべて抽出しきれないので、実際にはさらに多数の石核が出土したと考えられる。

#### (2)剥片

剥片の観察・集計は一部の住居址のみで実施し、全体の観察・集計が行えなかった。多量の剥片が出土しており、遺跡内での石器製作の痕跡が伺える。石鏃・石錐・石匙などの小形剥片石器の石材である安山岩・黒曜石・チャート・珪質頁岩の剥片が認められ、打製石斧・大型の削器などの石材である頁岩の剥片も認められる。これらの石器が遺跡内で製作されていることが確認できる。但し、打製石斧については素材剥片の獲得から遺跡内でおこなっているかどうかは確認できなかった。

磨製石斧については主体となる蛇紋岩の剥片が確認されず、砥石のみが出土していることから、研磨のみを遺跡内でおこなっていた可能性が高い。磨製石斧の製作場所については、すべての剥片を確認していないので前述の仮説の域をでないが、磨製石斧の砥石を出土する遺跡は長野県内では希少であり、松ノ木田遺跡内での磨製石斧生産の可能性を再検討、すなわち、磨製石斧製作に関わる剥片が存在するの否かを確認する必要がある。すべての剥片資料を確認していないが、竪穴住居址内の剥片には、磨製石斧の生産に関わる資料は見られない。磨製石斧の流通の仕方を解明するための重要な資料である。

#### (3)凹石・磨石・敲石（348～355）

磨石1点（348）、凹石3点（349～351）、特殊磨石1点（352）、敲石3点（353～355）が出土した。調査担当者によると、遺跡では地山に円礫が多数含まれており、発掘段階で石器と認識したもののみ取り上げてきた、とのことである。自然礫と石器の分別が明確になされた状況ではないようなので、実際にはさらに多くの磨石などの礫石器が存在していたと推定されるが、遺跡から出土したすべての礫は採取していないので確認できない。石材は、敲石・特殊磨石には砂岩・頁岩が用いられ、凹石には安山岩が用いられている。礫石器に用いられる安山岩は、剥片石器の安山岩とは石質が異なるものである。

348は表面が剥離した磨石。349・350は両面に凹痕が認められ、351は片面のみに窪みがある。352は断面楕円形の特殊磨石で図の右側縁部に幅約9mmの機能面がある。353～355は図の矢印部分に敲打痕が認められる。353・354は棒状の礫、355は扁平な長楕円礫を用いている。351・352・354が前期諸磯b式併行期の竪穴住居址より出土したものである。他は遺構外および中期の竪穴住居跡から出土した。

#### (14)石 棒 (356)

緑色片岩製の石棒の先端部が1点出土した。遺構外より出土したものである。

#### (15)砥 石 (357・383～385)

有溝砥石3点(357・383)、砥石2点(384・385)が出土した。石材は砂岩または安山岩を用いている。357は表面に2条、裏面に1条の断面U字状の溝が認められる。溝の幅は7.3～7.5mmである。3片に割れているがすべて第13号住居址の覆土より出土した。383は断面V字状の溝が2条認められ、裏面中央部には敲打痕が認められる。溝底面はU字状になるところが認められ、いわゆる玉砥石の範疇に入る。この他に、幅広の研磨面と断面U字状の溝を有する置き砥石が第19号住居址覆土より出土した。384・385は幅広の研磨面が認められ、磨製石斧の砥石と推定した。いずれも石材は安山岩と観察したが、再検討を要する。384は第45号土壌床面、385は第13号住居址床面から出土し、いずれも諸磯b式併行期の遺構である。

#### (16)石 皿 (358～380)

54点が出土した。完形品は8点で、残存率1/4以下の小破片が16点含まれている。なお、同一個体と思われる破片であっても接合しないものは、別個体としてカウントした。安山岩49点、花崗岩4点、緑色片岩?1点である。機能面の形状により以下の4類に大別し、素材礫の形状などによりさらに細別した。

I類：中央部に機能面と思われる窪みがあり、機能面とならない周縁部の縁があるもの。楕円礫を素材としたものをI a類(358～371)、扁平な板状礫を素材としたものをI b類(372～376)とする。I a類が31点、I b類が7点である。諸磯b式併行期の遺構から出土したものが多。

II類：扁平な礫を素材とし、縁がなく機能面が平坦なもの(377)。9点出土。楕円礫を素材としたもの(1点)、板状礫を素材としたもの(3点)、縁がないが機能面全体が窪むもの(5点)などがある。377を除きすべて諸磯b式併行期の堅穴住居址覆土もしくは床面から出土した。

III類：切り立った縁が作り出されているもの(379・380)。2点出土した。379は第32号土壌の覆土から、380は第5号住居址の覆土から出土しており、いずれも前期の石皿と考えられる。

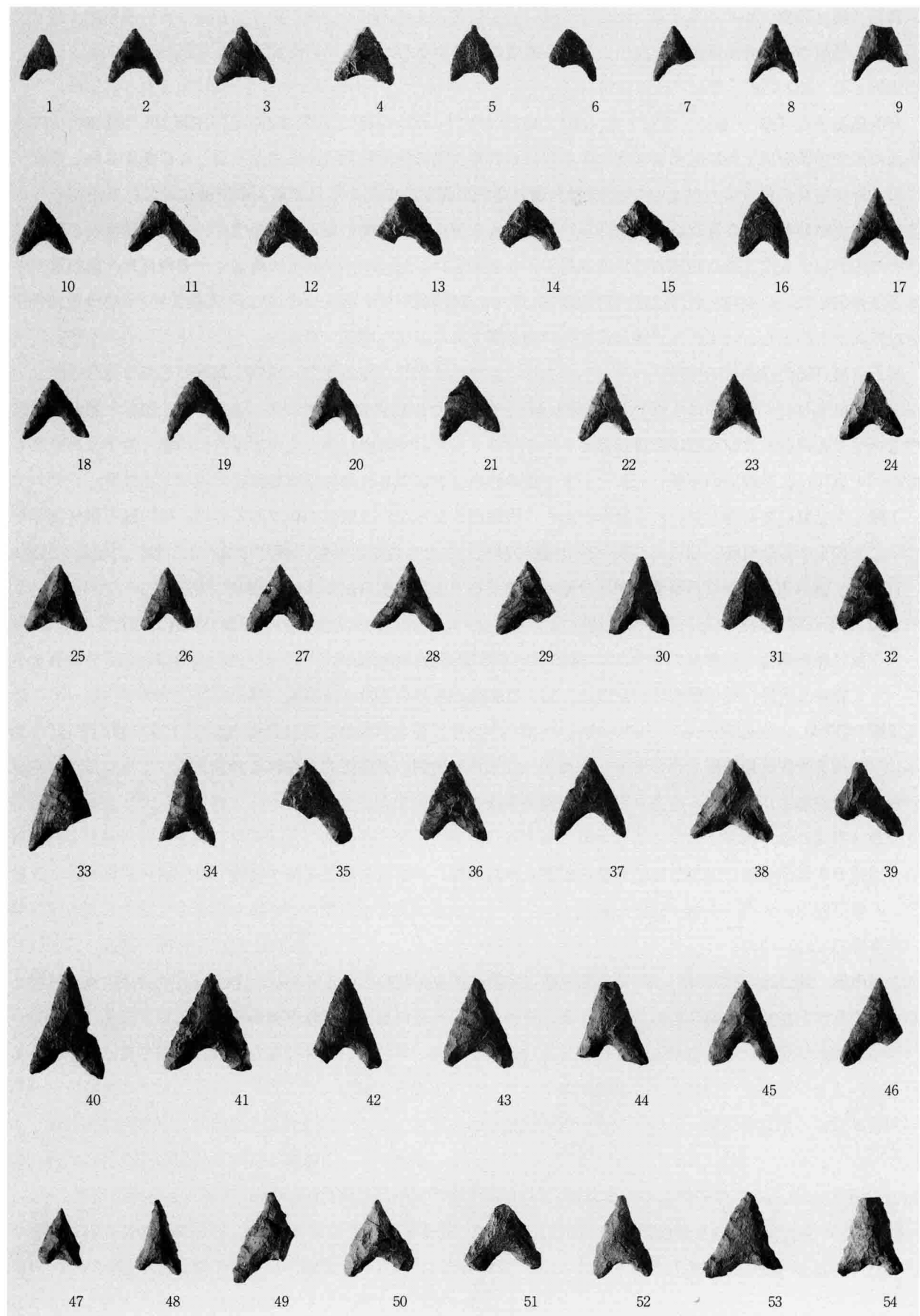
IV類：縁がなく、内湾する曲面をもった機能面を持つもの。3点出土。

#### (17)台 石 (378)

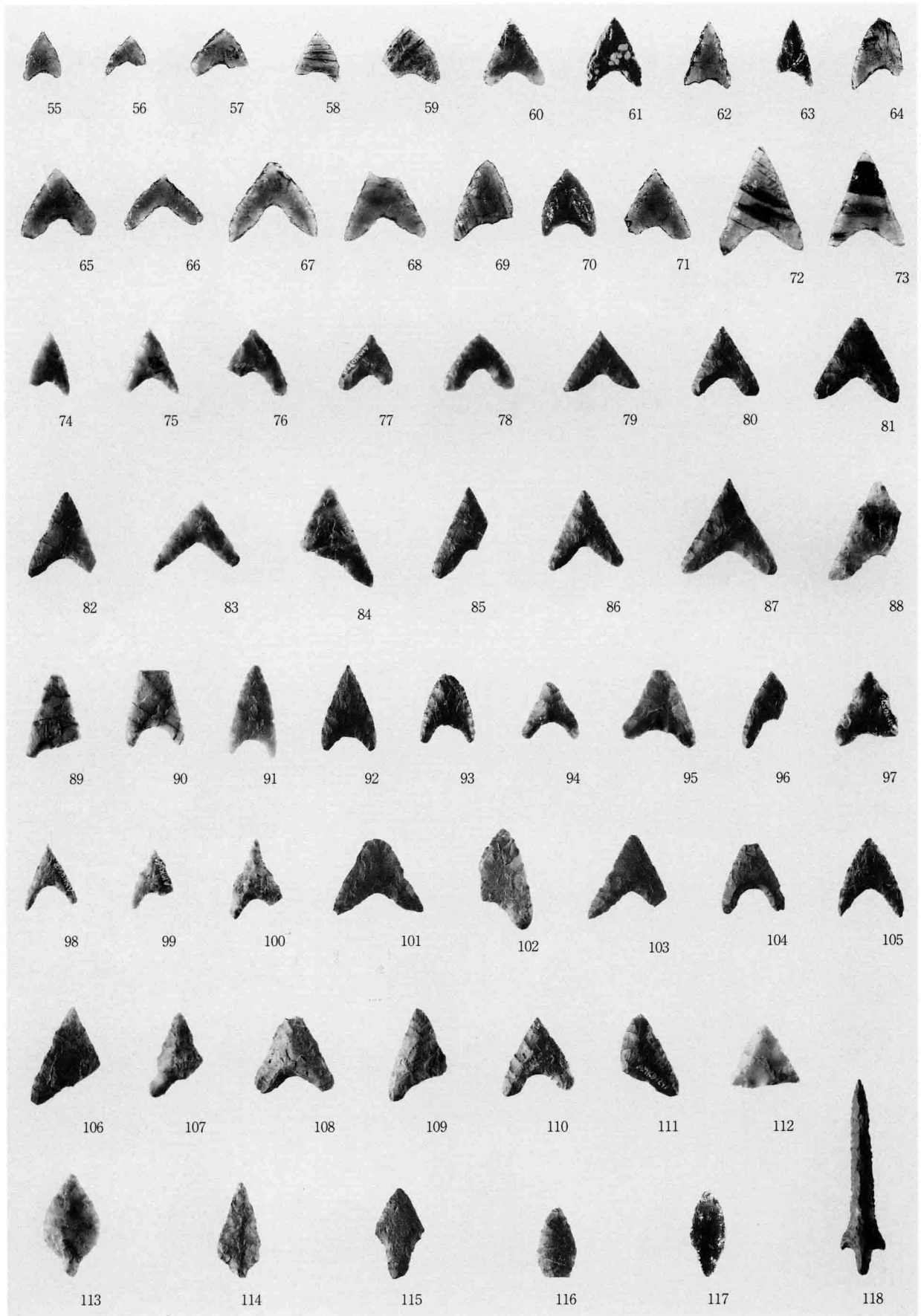
大型礫の平坦面に敲打痕などの使用痕跡が認められるもの。石皿II類と区別が明瞭でない部分がある。4点出土。石材は安山岩3点、不明1点である。

#### (18)多孔石 (381・382)

2点出土。381は片面のみに、382は表裏両面に多数の凹痕が認められる。381は小穴から、382は第9号住居址から出土した。後者は中期住居跡であることから、中期の石器である可能性が高い。(鶴田典昭)

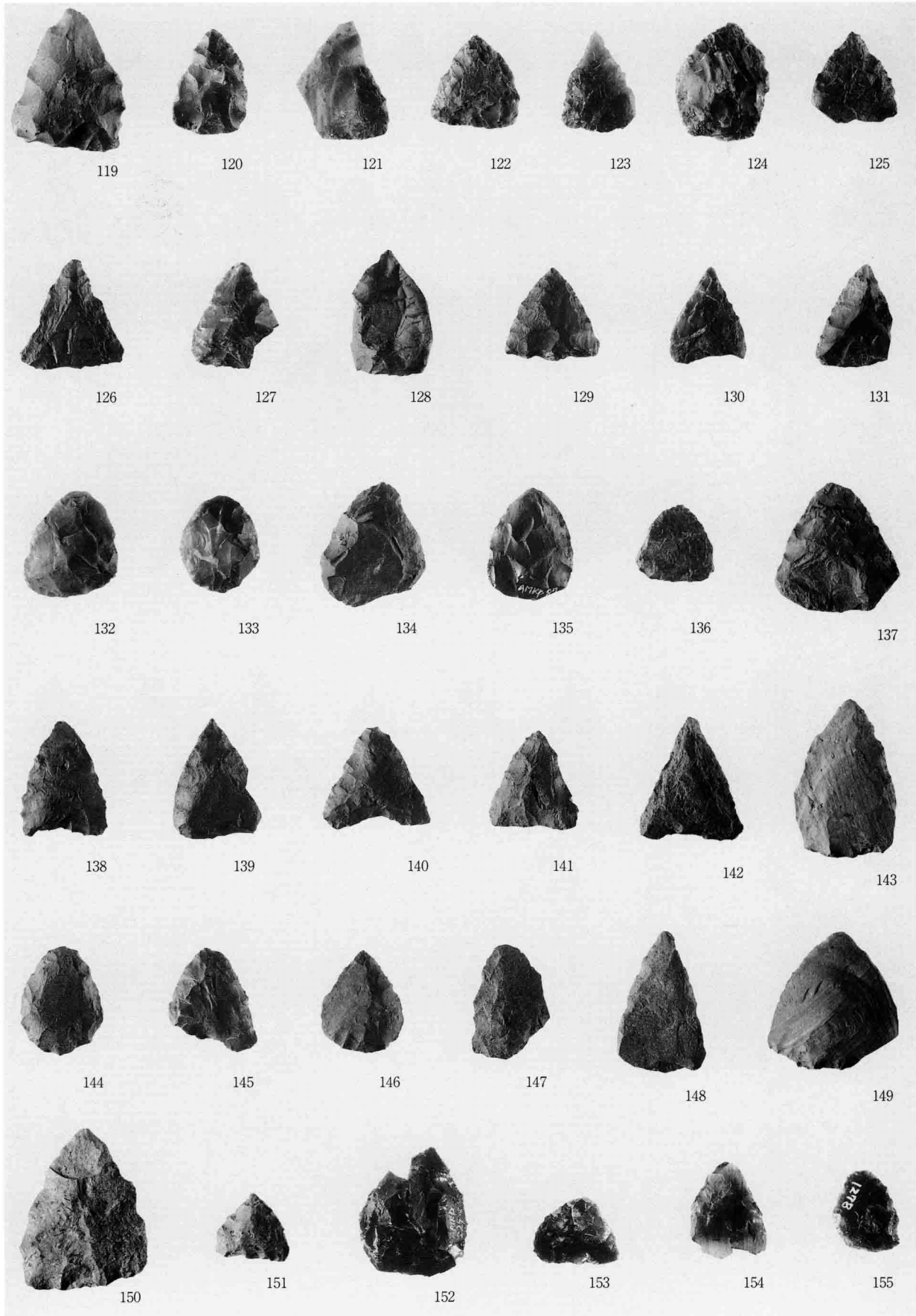


石 鏃 (約 2 : 3)

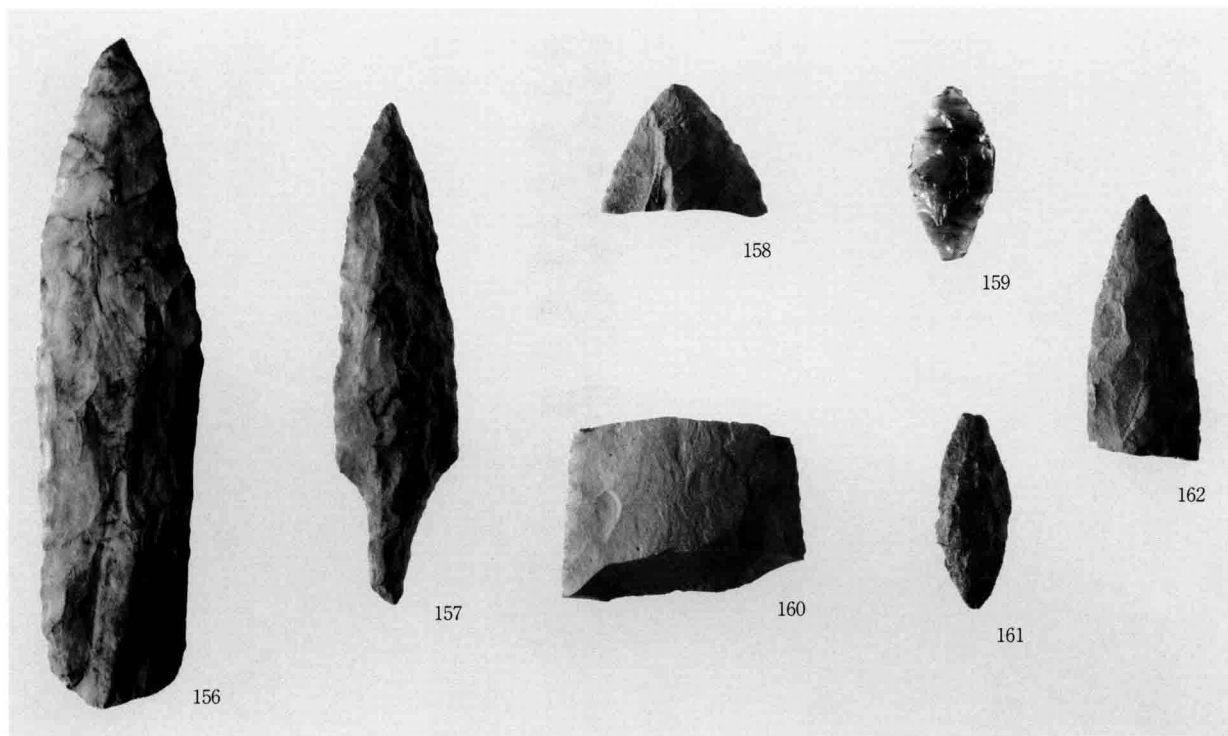


石 鏃 (約 2 : 3)

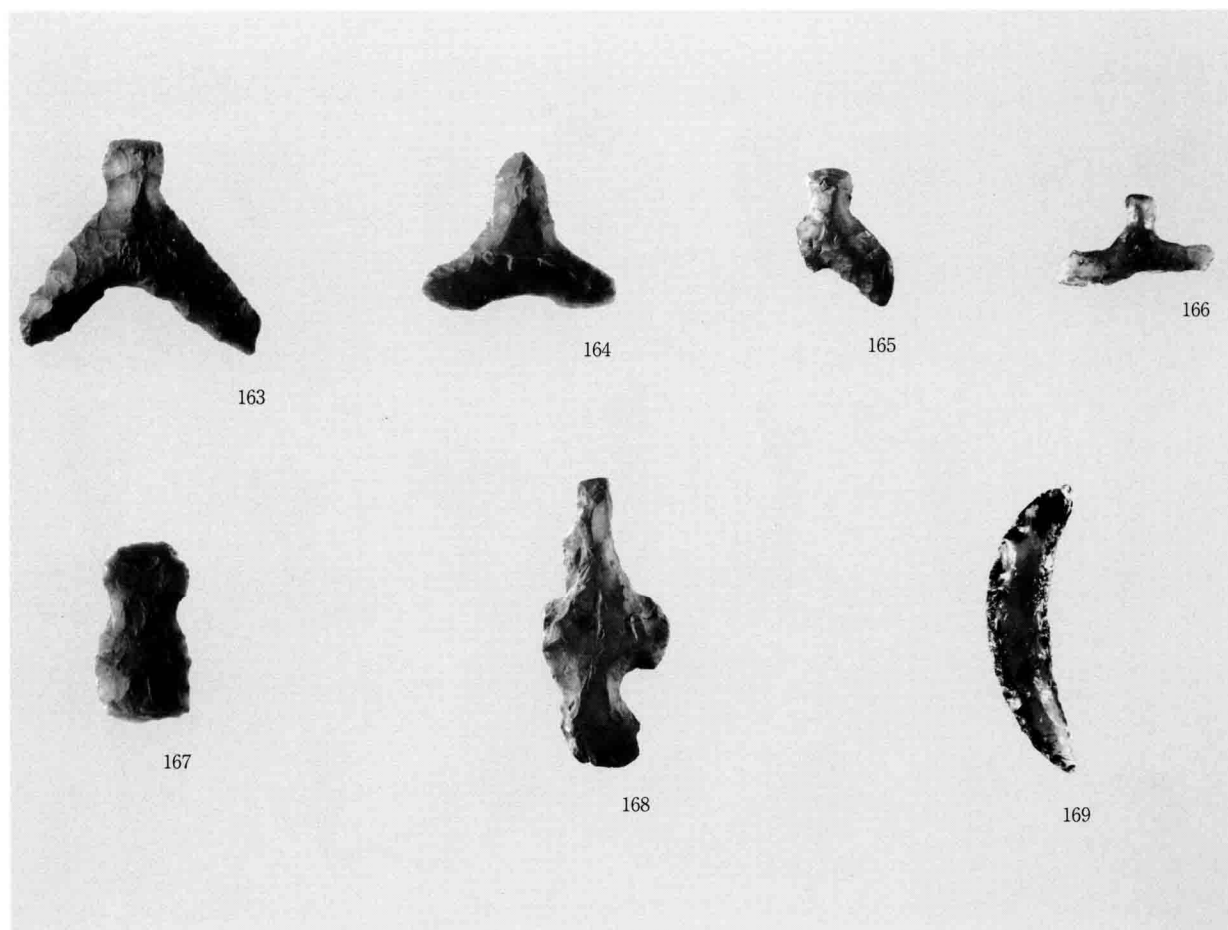




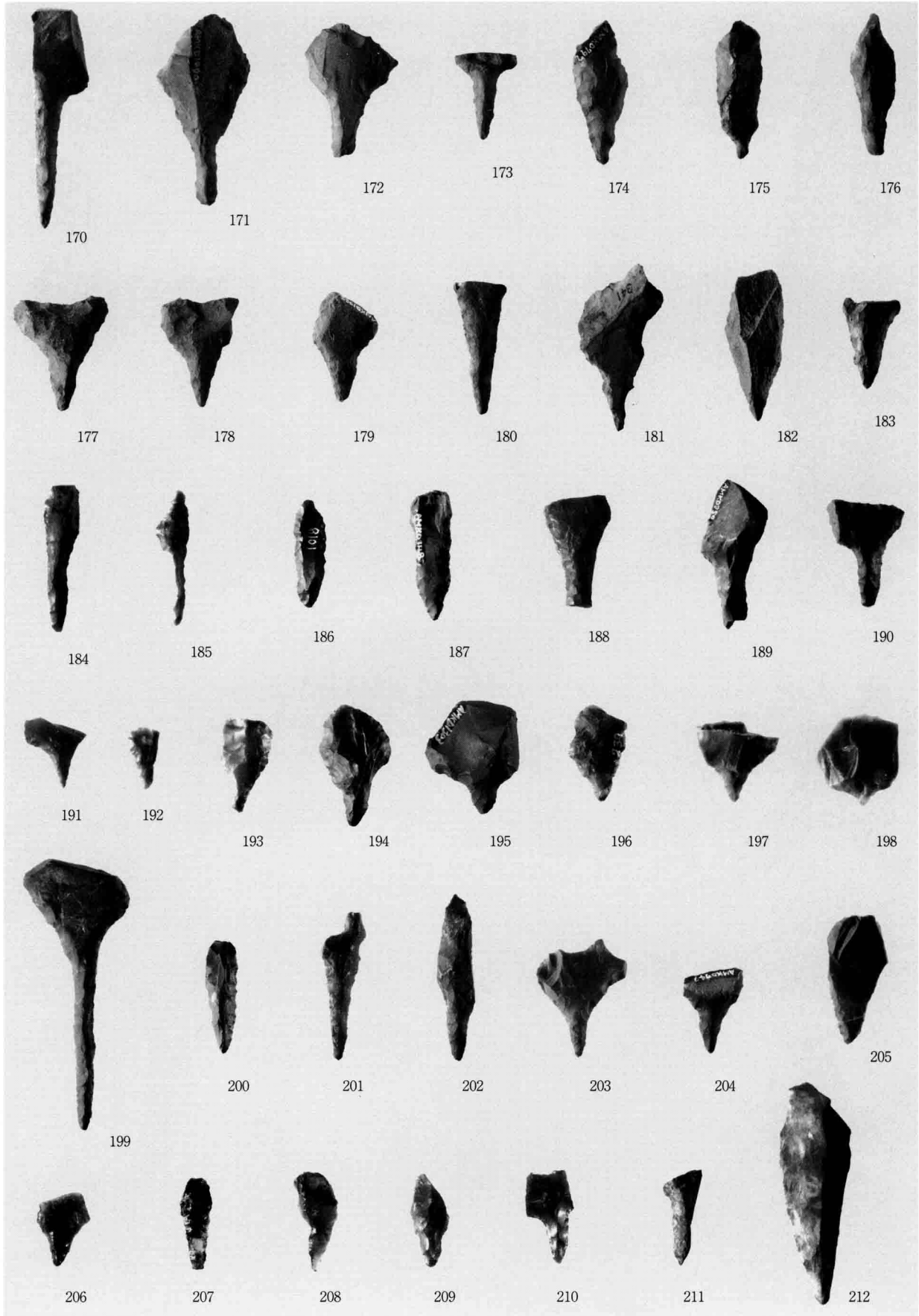
石鏃未製品（約2：3）



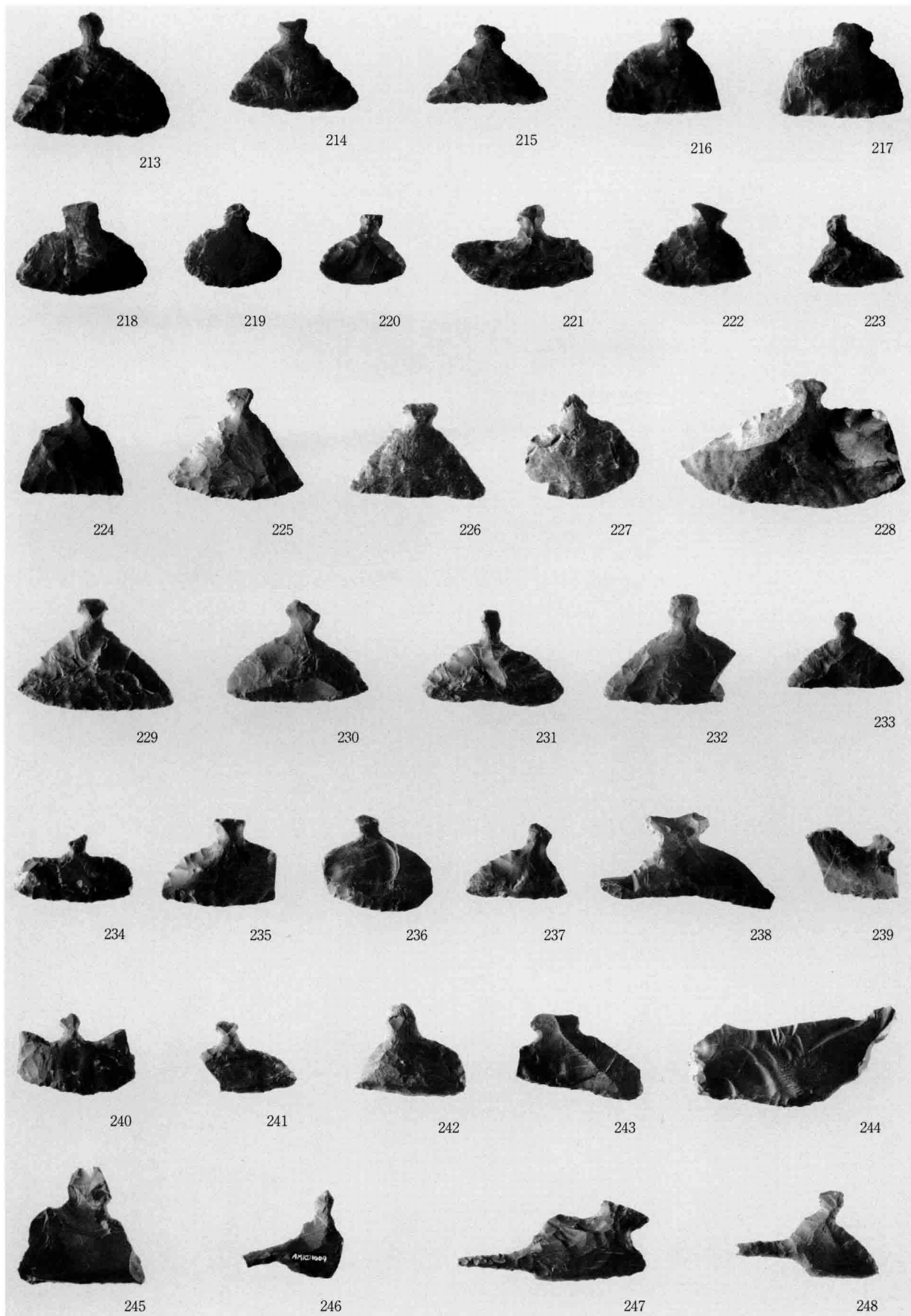
尖頭器 (約 3 : 4)



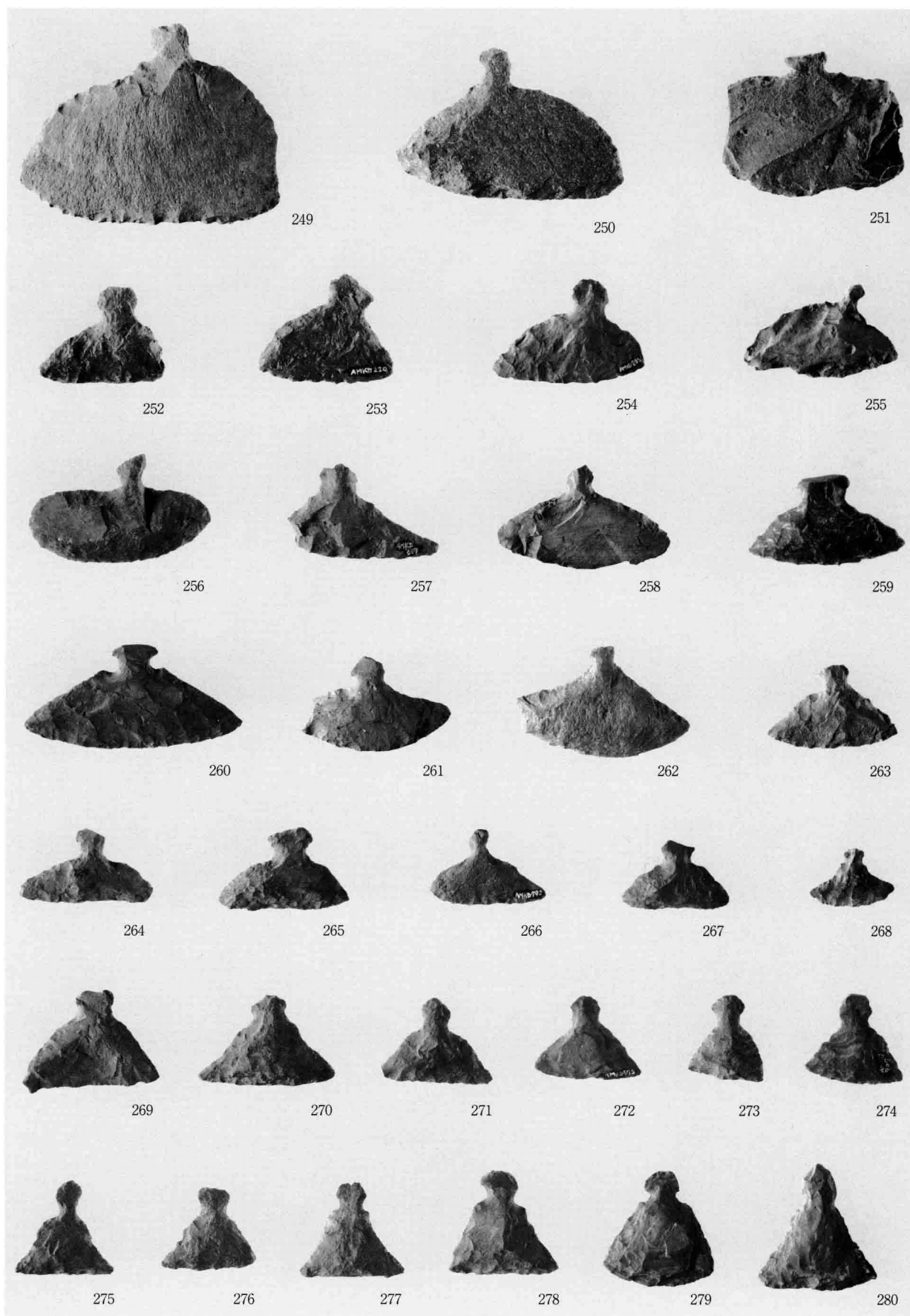
三脚石器・異形石器他 (約 1 : 1)



石 錐 (約 2 : 3)

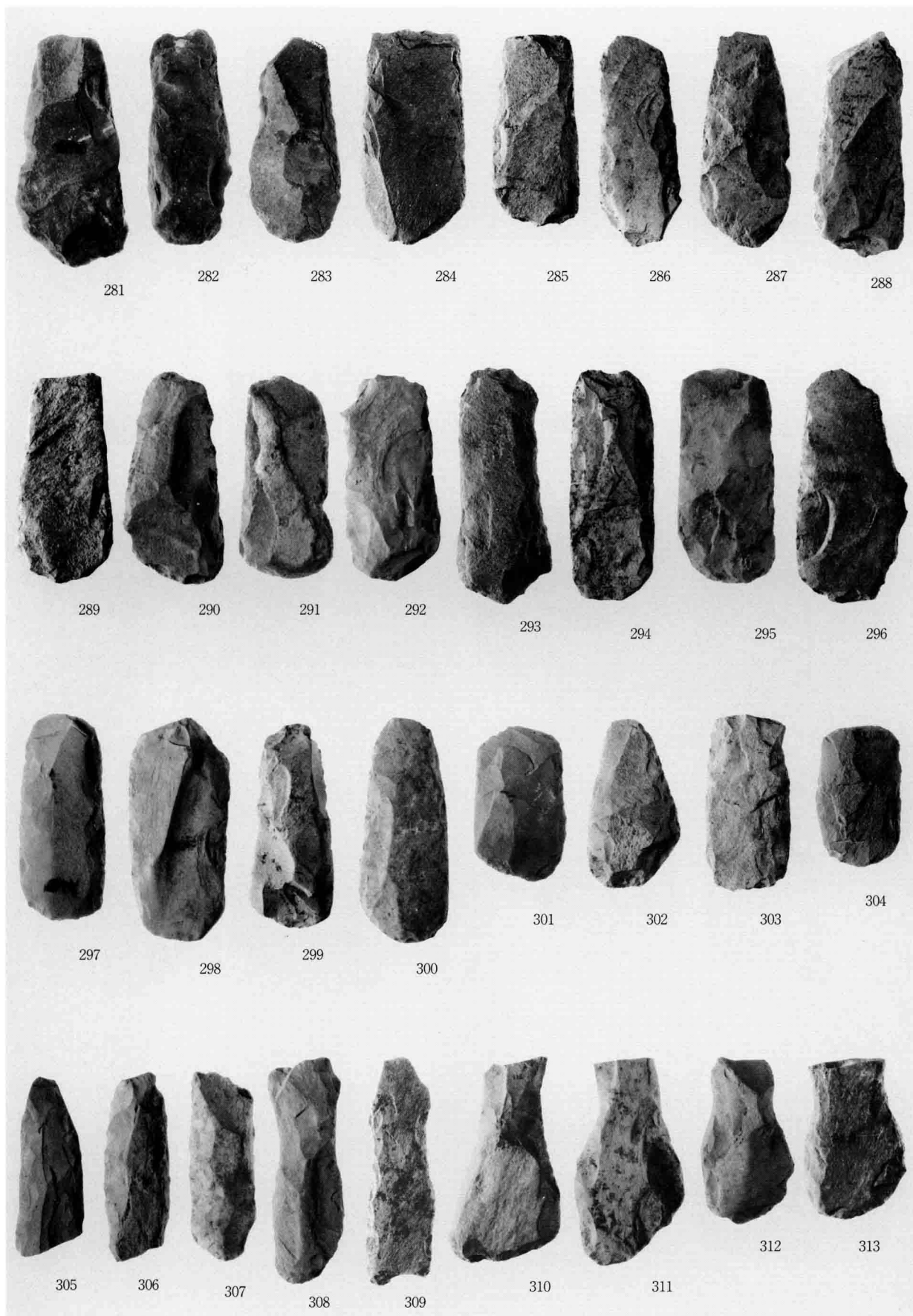


石 匙 (約 1 : 2)

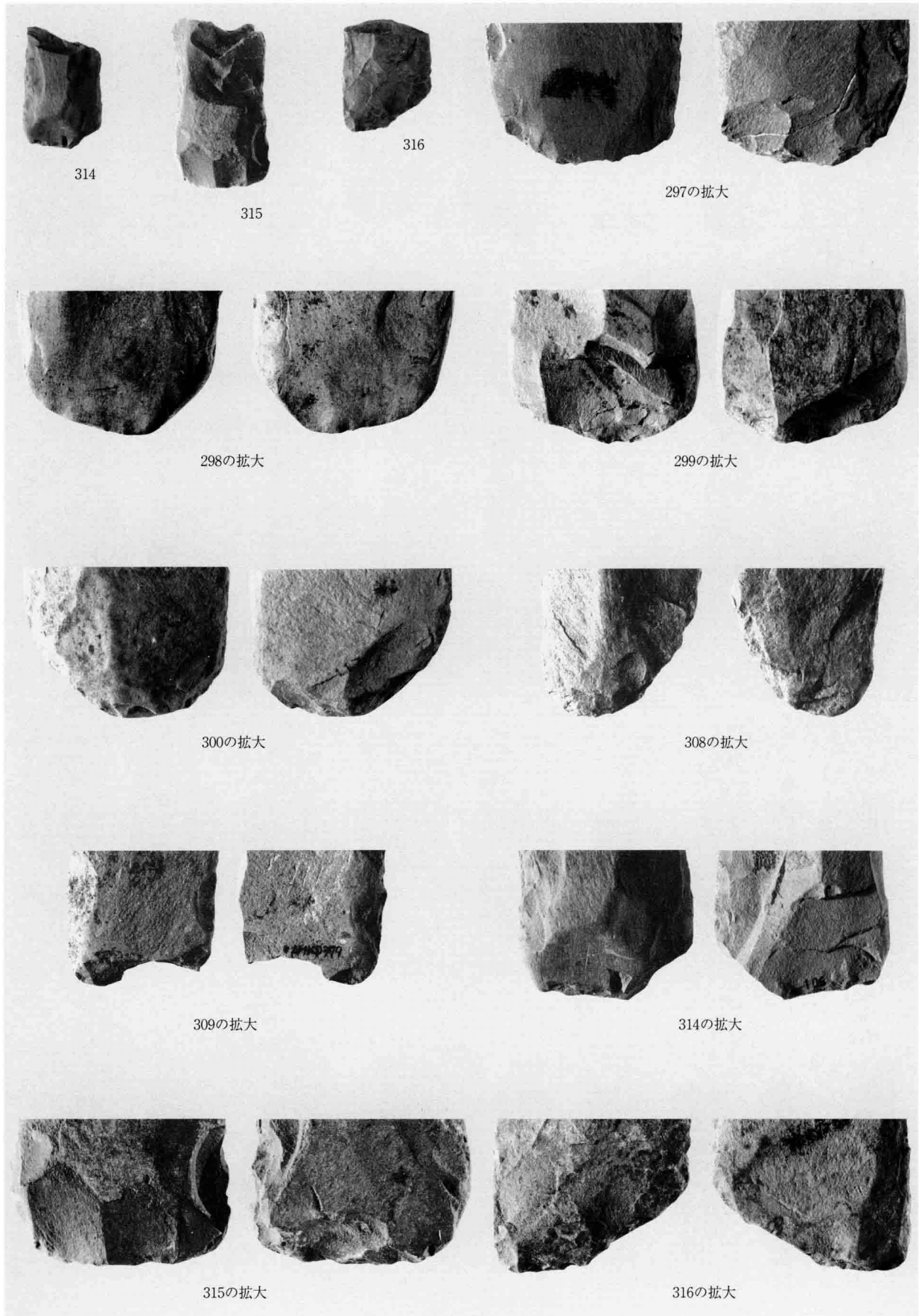


石匙 (約 1 : 2)

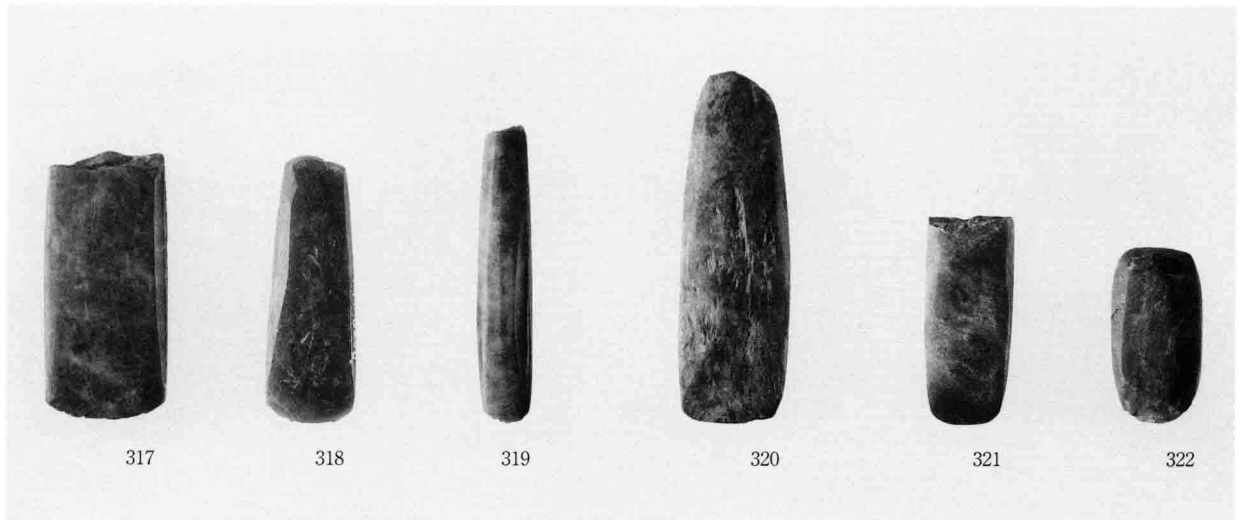




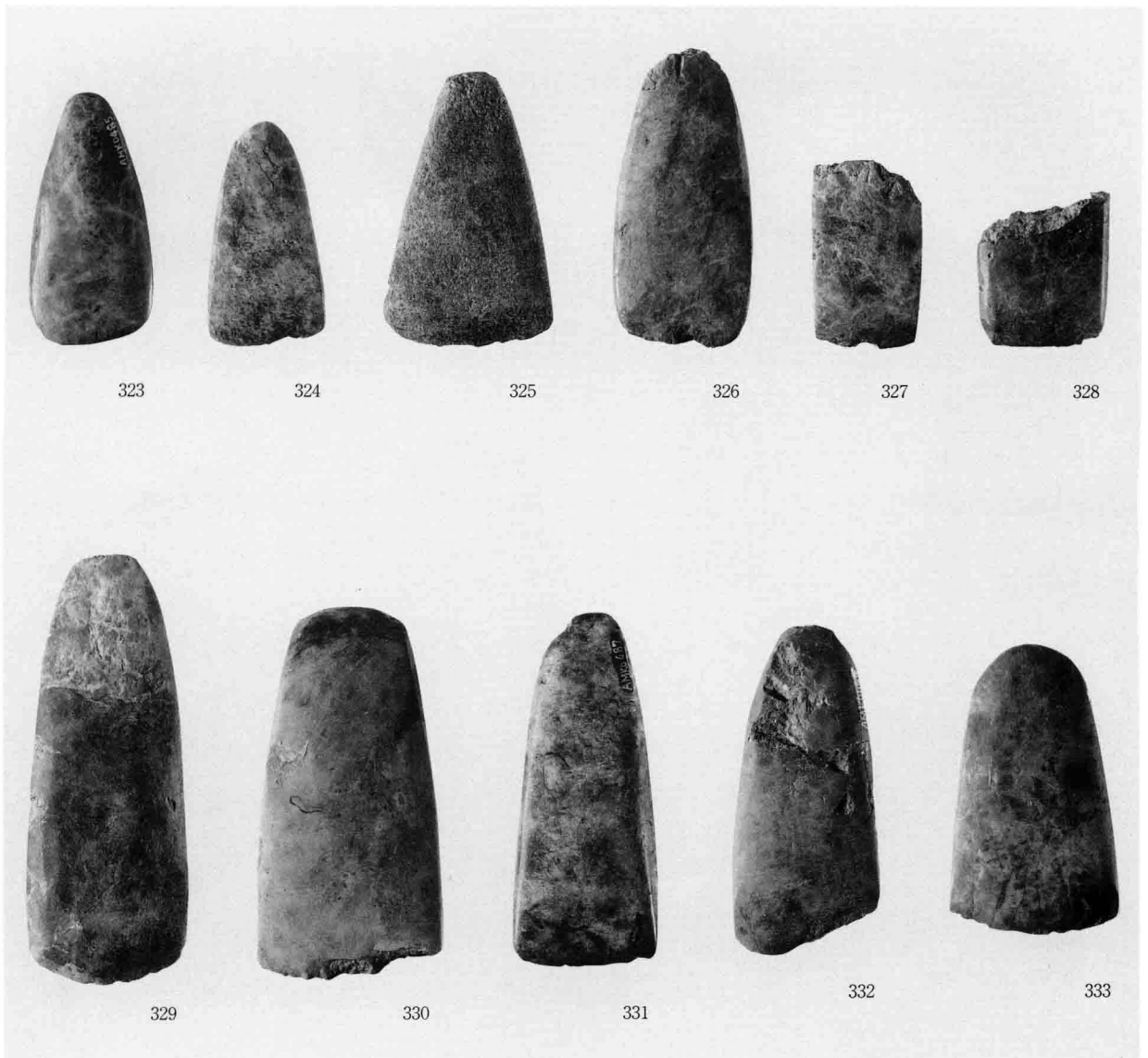
打製石斧 (約 1 : 3)



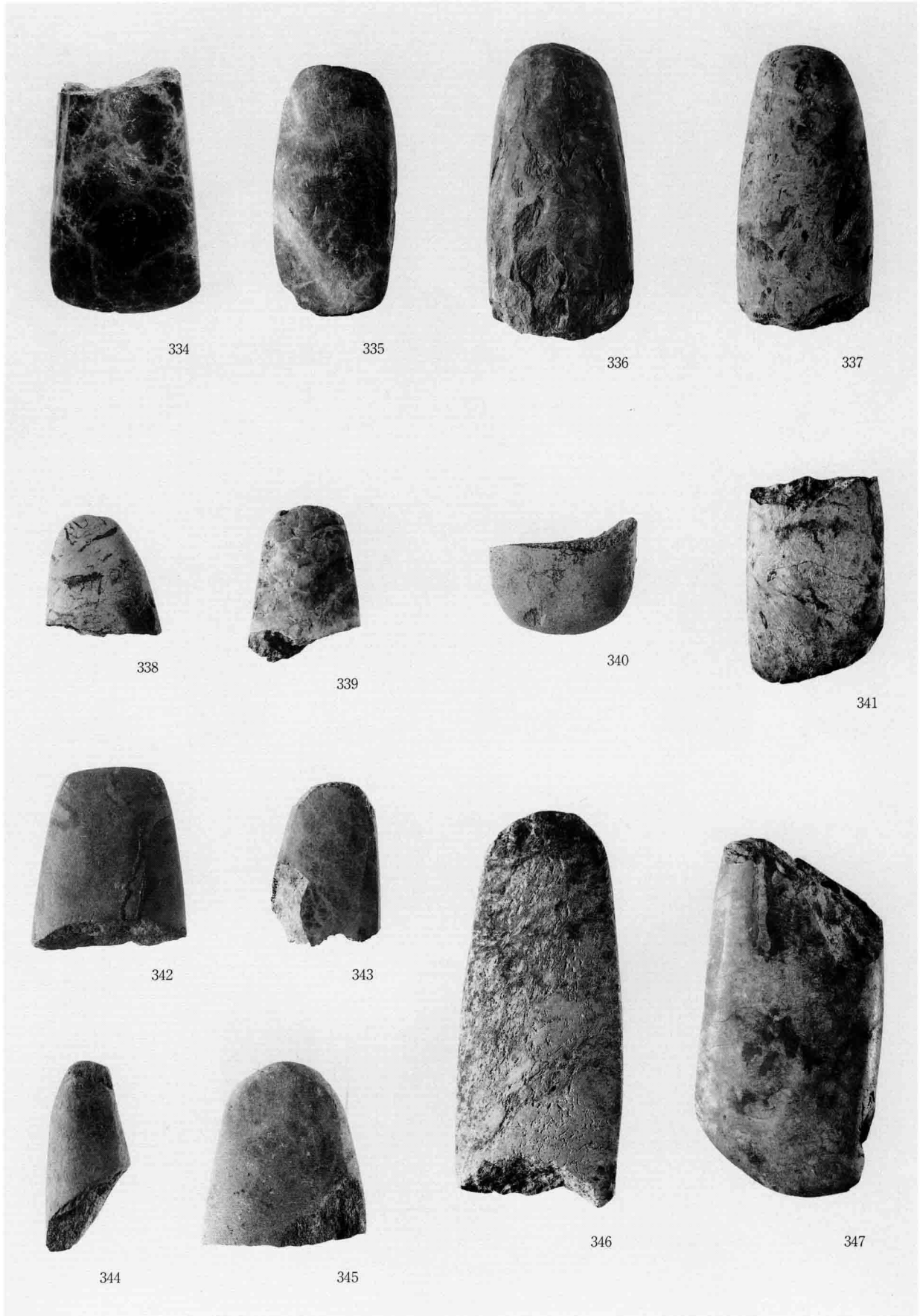
打製石斧刃部磨耗痕



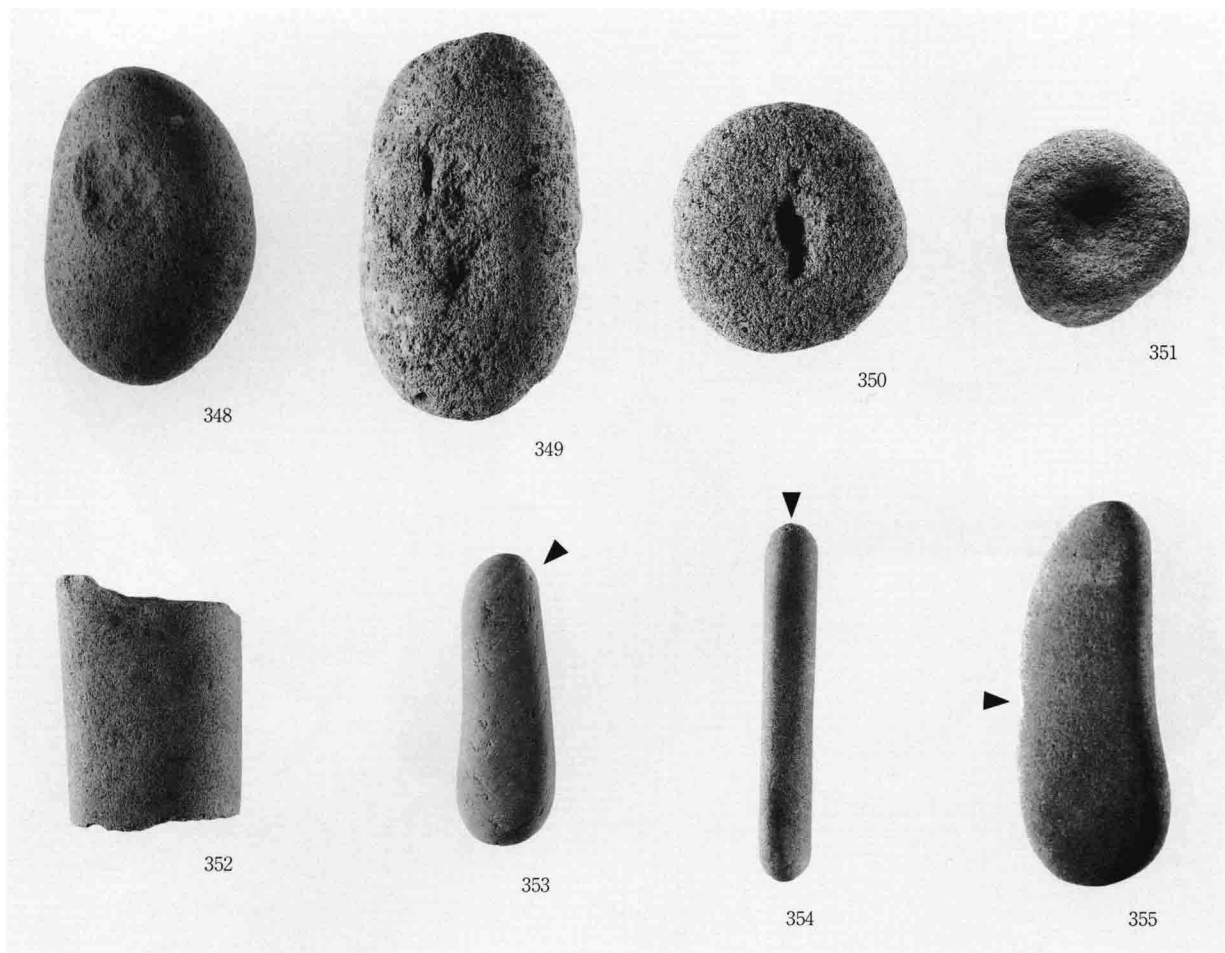
磨製石斧 I類 (約 1 : 1)



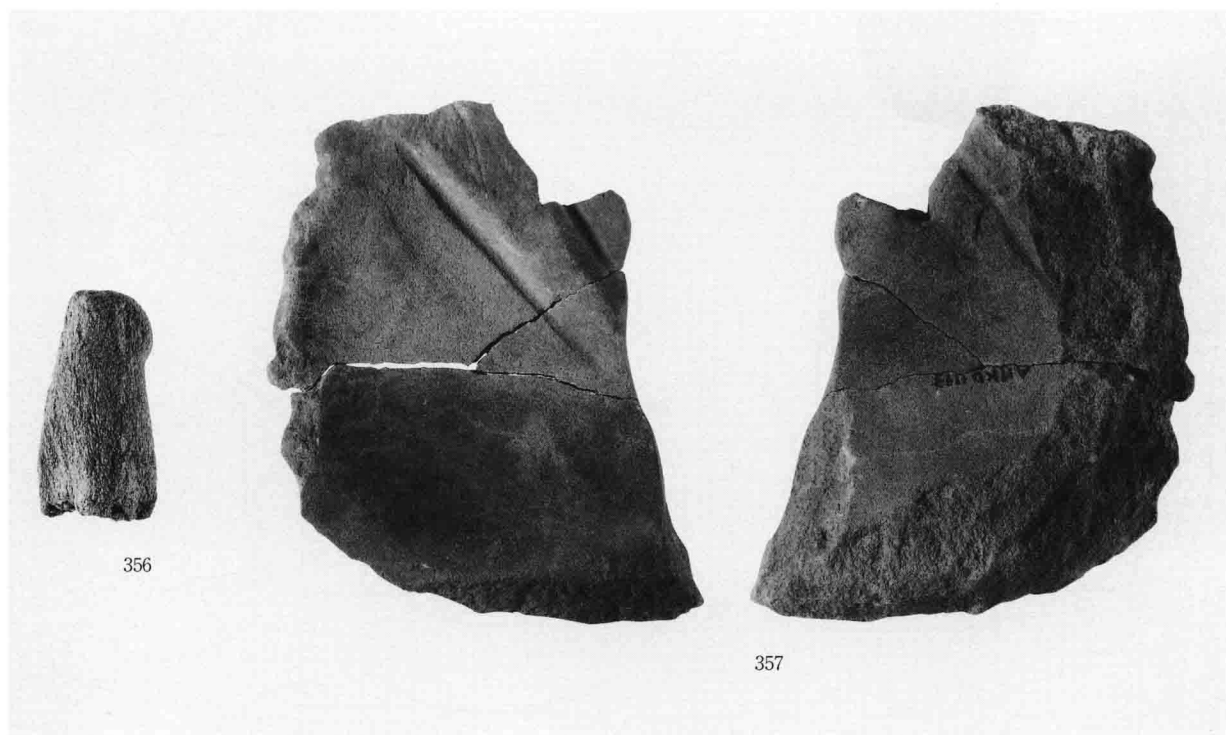
磨製石斧 II・III・IV類 (約 2 : 3)



磨製石斧Ⅳ～Ⅶ類（約1：2）

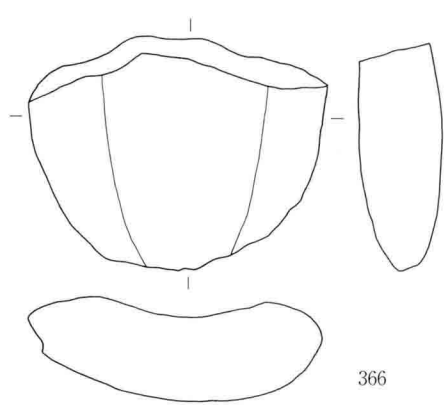
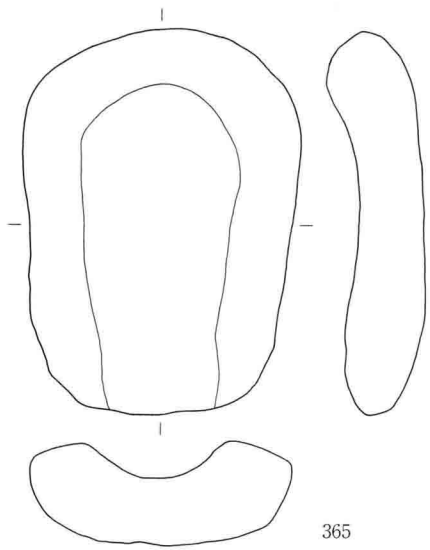
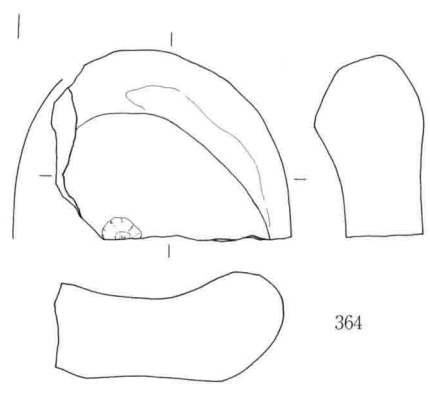
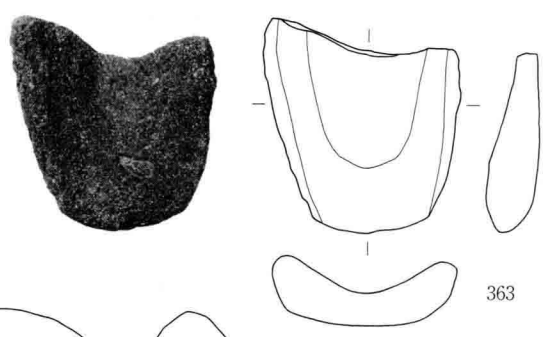
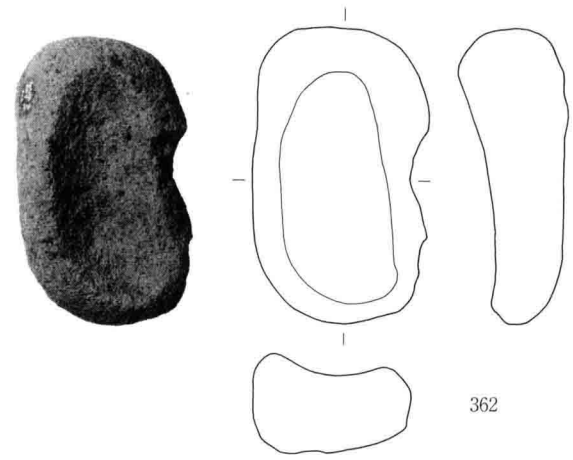
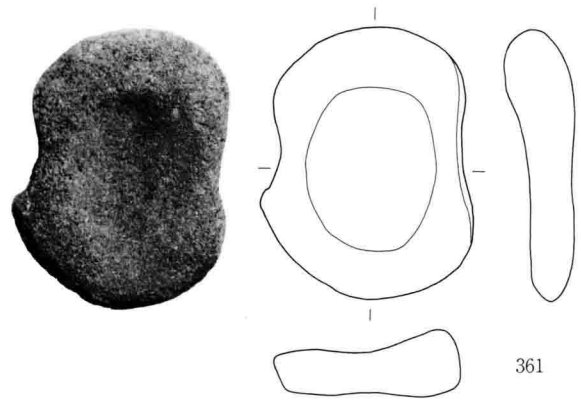
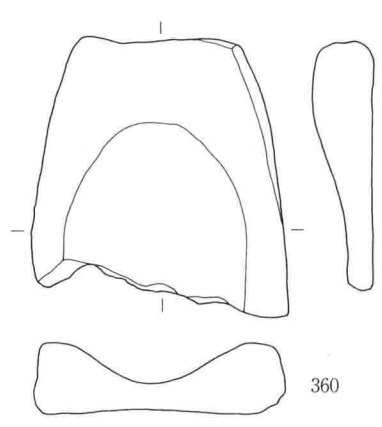
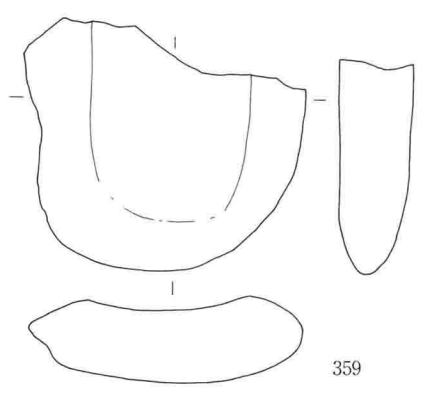
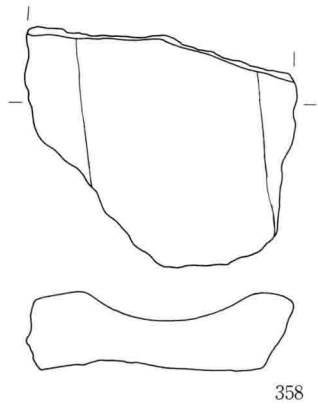


凹石・敲石（約 1 : 3）

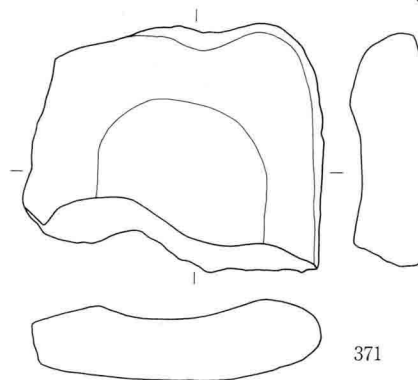
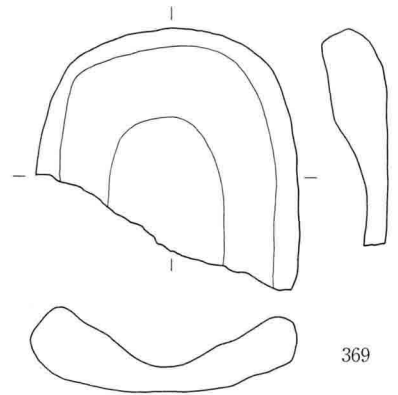
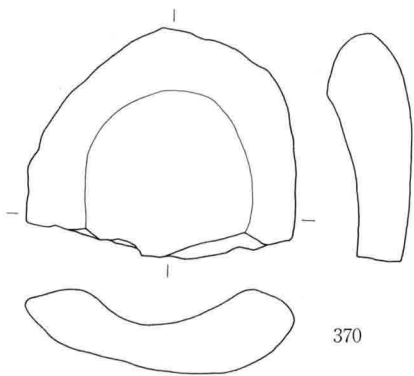
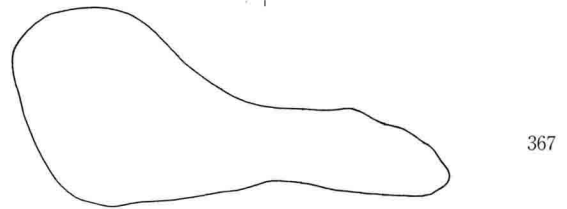
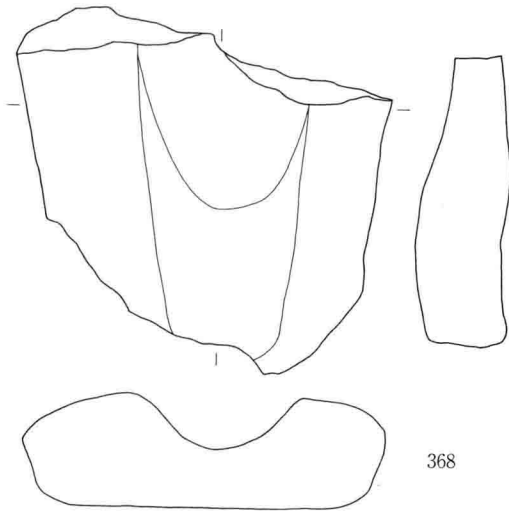
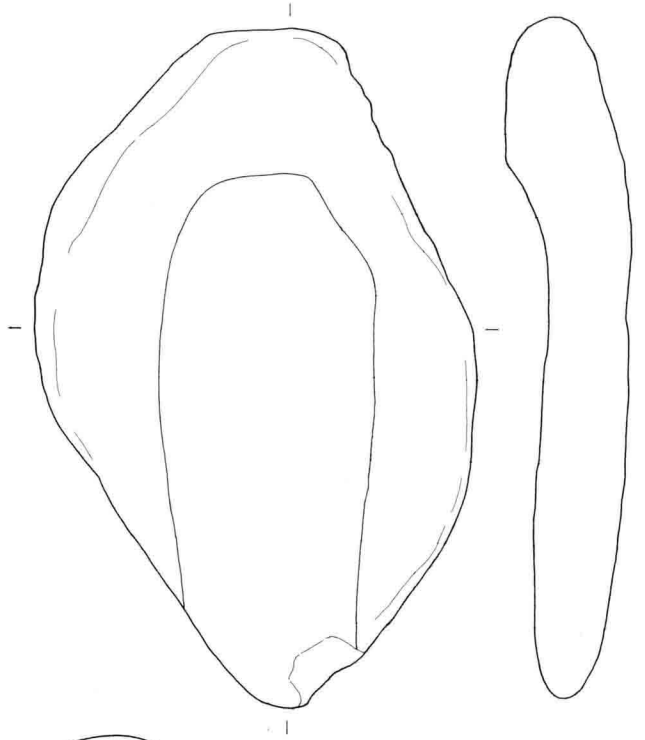


石棒・有溝砥石（約 1 : 3）





石 皿 (約 1 : 6)



368

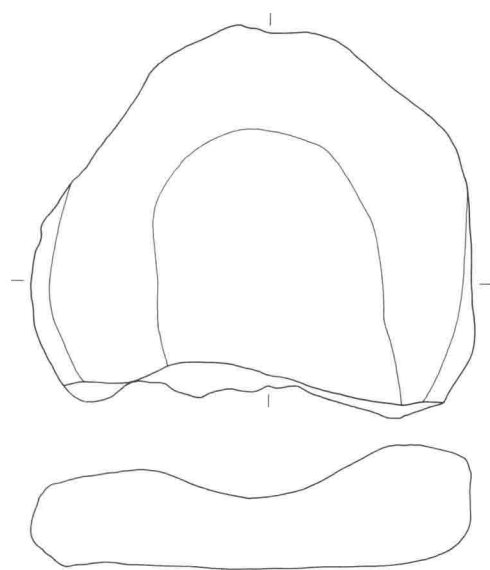
367

369

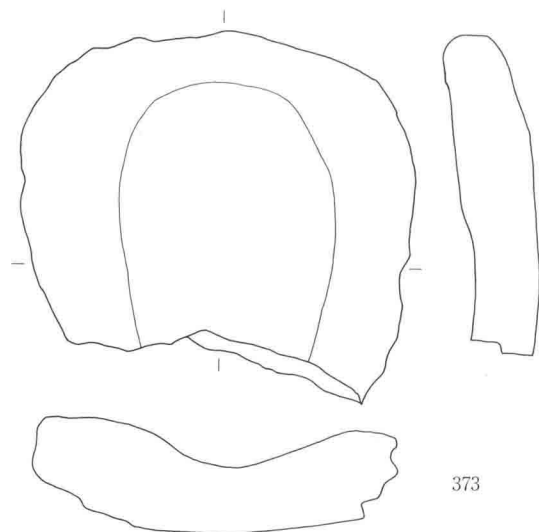
370

371

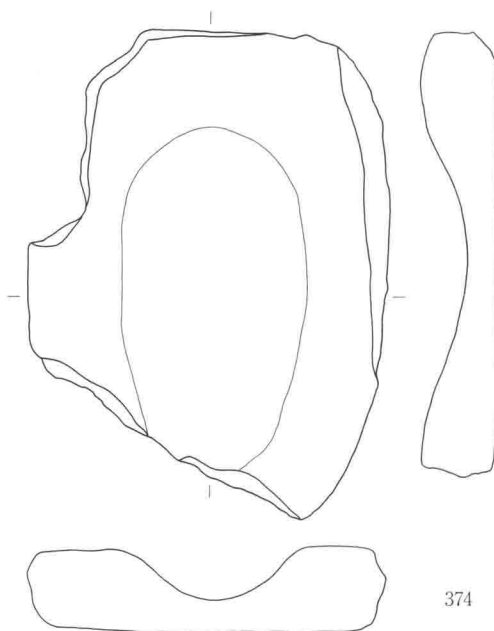
石 皿 (約 1 : 6)



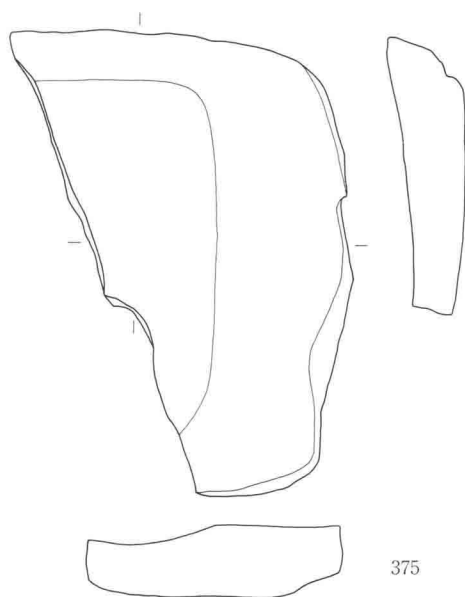
372



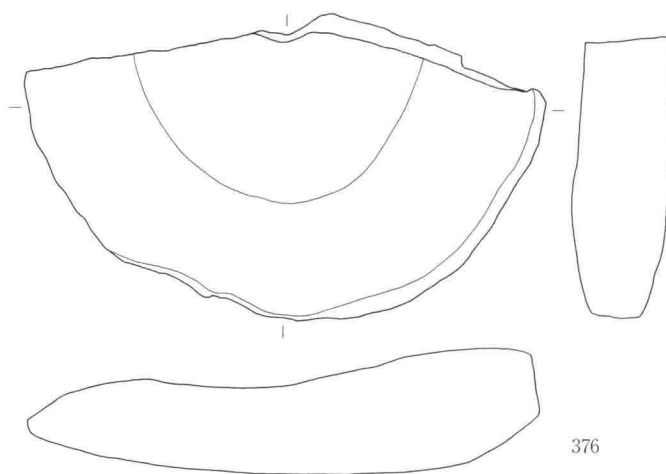
373



374

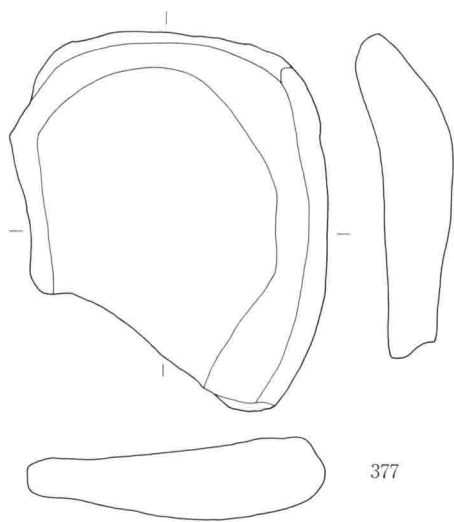


375

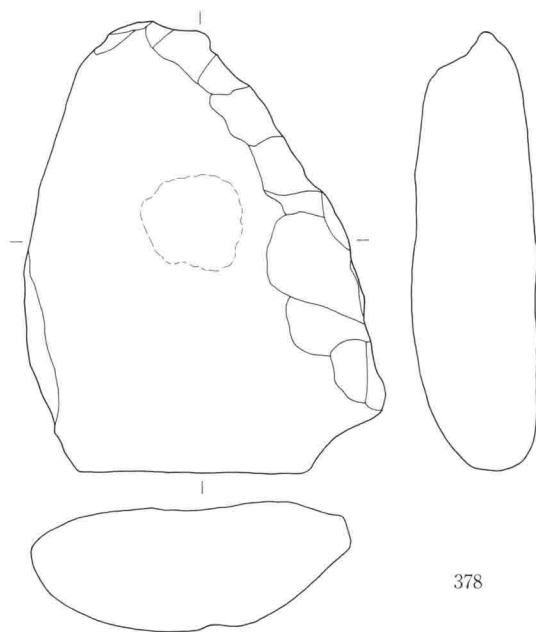


376

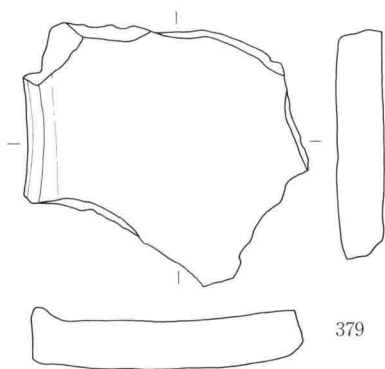
石 皿 (約 1 : 6)



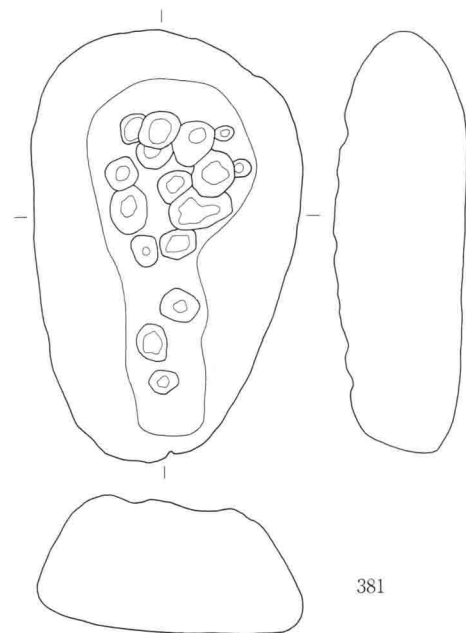
377



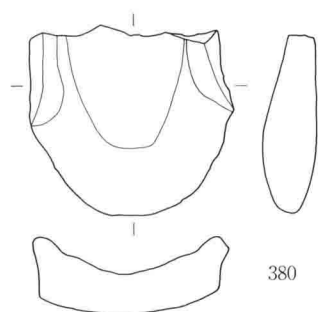
378



379



381



380



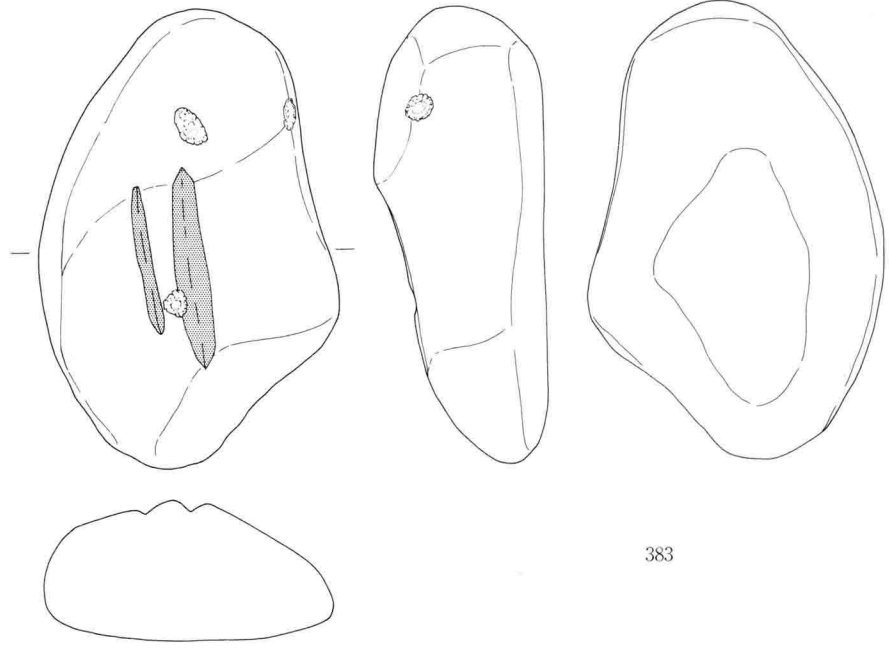
表



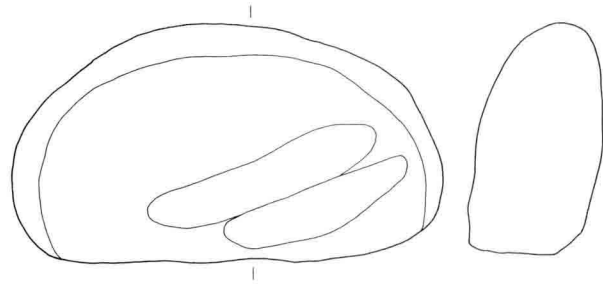
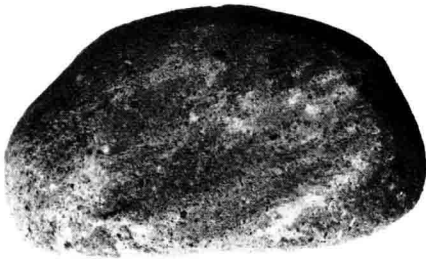
裏

382

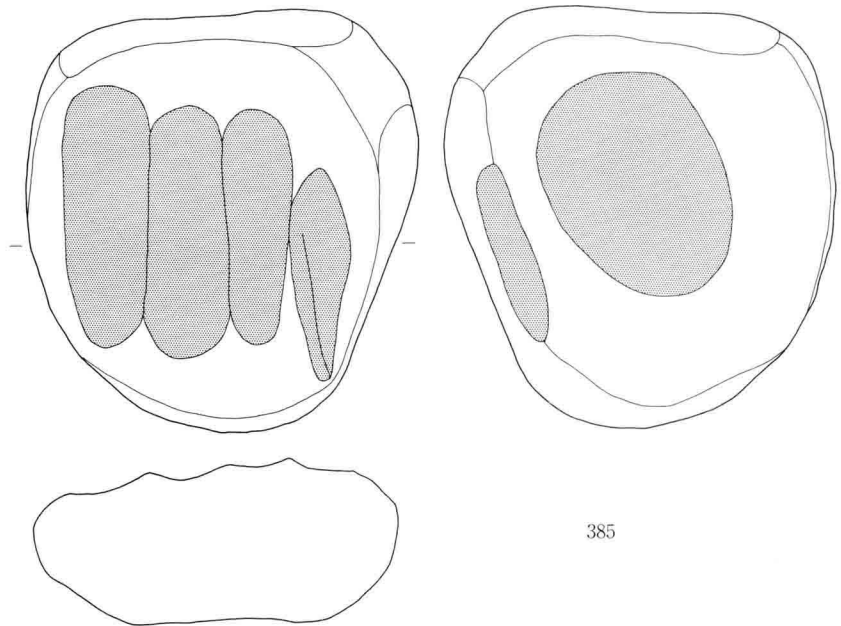
石 皿・多孔石 (約 1 : 6)



383



384



385

砥石 (約 1 : 6)



表2 出土地点別器種組成

	出土地点	尖頭器	石鏃	石鏃未製品	三脚石器	異形石器	石鏃	石匙	打製石斧	削器	石核	磨製石斧	凹石	敲石	特殊磨石	磨石	石棒	多孔石	有溝砥石	砥石	石皿	台石	合計	
遺構内	SB1		7	1			3	2		3	1	1										1	19	
	SB3		11	2			3	2	1	1				1								1	22	
	SB3東		5				3	1		2													11	
	SB5	1	7	7			1	9			2	4	3									2	36	
	SB5・6		3	1									1											5
	SB6	1	9	2				4		1	3	5										6	31	
	SB7		15	2				1	5	1	2	3	2									2	33	
	SB8		5	1				3	2	1	1	1										2	16	
	SB9								1	2	1			1			1	1						7
	SB10	1	15	8	1	1	10	12	1	3	2	5										3	1	63
	SB11	1	24	8	1		5	12	4	8	3	3				1						6		76
	SB12		14	7	1		5	1	1	2		1										2		34
	SB13		6	6				2	3				1							1	1			20
	SB14							1		1														2
	SB15		3	2					2											1		2		10
	SB16		2					1														1		4
	SB17		9	1				1	1		2	1	2									1		18
	SB18		5	1		1	1	4	1	2	1	1	1	1								1		19
	SB19	1	8	5	1		2	4	1	7		1								1		3		34
	SD01									1														1
	SD1		1										1											2
	SD3												1											1
	SD4		7	3			2		1	2	2	2										2		20
	SK1	1	1	1				3		3														9
	SK2		1	1																				1
	SK5		2																					2
	SK6								2			1												3
	SK7			1					3	1														5
	SK8		2																			1		3
	SK9							1																1
	SK10								1	1	1													3
	SK15								1															1
	SK17						1				1													2
	SK18								2															2
	SK19						1				1													2
	SK21		1					1			1													2
	SK22		1	1				1																3
	SK24						1	1																2
	SK25		1							1	1													3
	SK26											1												1
	SK26-1									1														1
	SK27			1			1		1	1												1		5
	SK32		3					3			1											2		9
	SK33		1	1					1															3
	SK34		1	1					3															5
	SK36		2	1			1	4	3	1	2													14
	SK41		2																					2
	SK42											1												1
	SK43		1	2					1															4
	SK44							1				1												2
	SK45		6	1			3	5	2	1	1									1	3		23	
	SK48		1								1													2
	SK50		1																					1
小穴		3				2	2	4	1		2						1				4		19	
包含層	1	66	100		1	21	47	142	38	16	22	1					1			8		1	217	

表3 器種別石材組成

器種名	尖頭器	石鏃	石鏃未製品	三脚石器	異形石器	石鏃	石匙	打製石斧	削器	石核	磨製石斧	凹石	敲石	特殊磨石	磨石	石棒	多孔石	有溝砥石	砥石	石皿	台石	合計	
チャート		48	40	3	1	23	14		15	4												148	
安山岩	5	103	29		1	36	86	2	69	27	1	3			1		2	2	2	49	3	421	
下呂石							1																1
花崗岩																					4		4
凝灰岩		1	1							2													4
凝灰岩?			1							1													2
玉髓		4				2				1													7
玉髓?										1													1
珪質頁岩		8	2			8	23		2														43
黒曜石	1	70	21	1	1	3			2	9													108
砂岩											1		2	1				1					5
蛇紋岩											40												40
鉄石英										1													1
不明		18	4			2	7	2	4	2	13										1	53	
頁岩	1					3	183			3			1										191
流紋岩			3						1														4
緑色片岩																1					1		2
合計	7	252	100	4	3	74	134	187	93	47	59	3	3	1	1	1	2	3	2	54	4	1034	